布施太子の入山
倉田百三著

布施
倉田百三著
入

太子
大正拾年九月河野通勢装幀

布施太子の入山
倉田百三著
大正拾年秋

目次

布施太子の入山

此の物語を長與善郎兄に捧ぐ。

兄と予との古典に對する趣味の一致を記念するために。

人物（登場順）

濕波（葉波國王）

侍從

寡婦

子供

門衞

市民甲。乙。丙。

騎馬兵

馭者

須太拏（太子）

曼坻（太子妃）

耶利（その息）
闍拏延（その女）
廷臣甲。乙。
女官
夫人
乳母
使者
王妃
兵士甲。乙。
群集
波羅門甲。乙。丙。丁。但し墮落して乞食、盜賊等を業とせるもの。
帝釋天

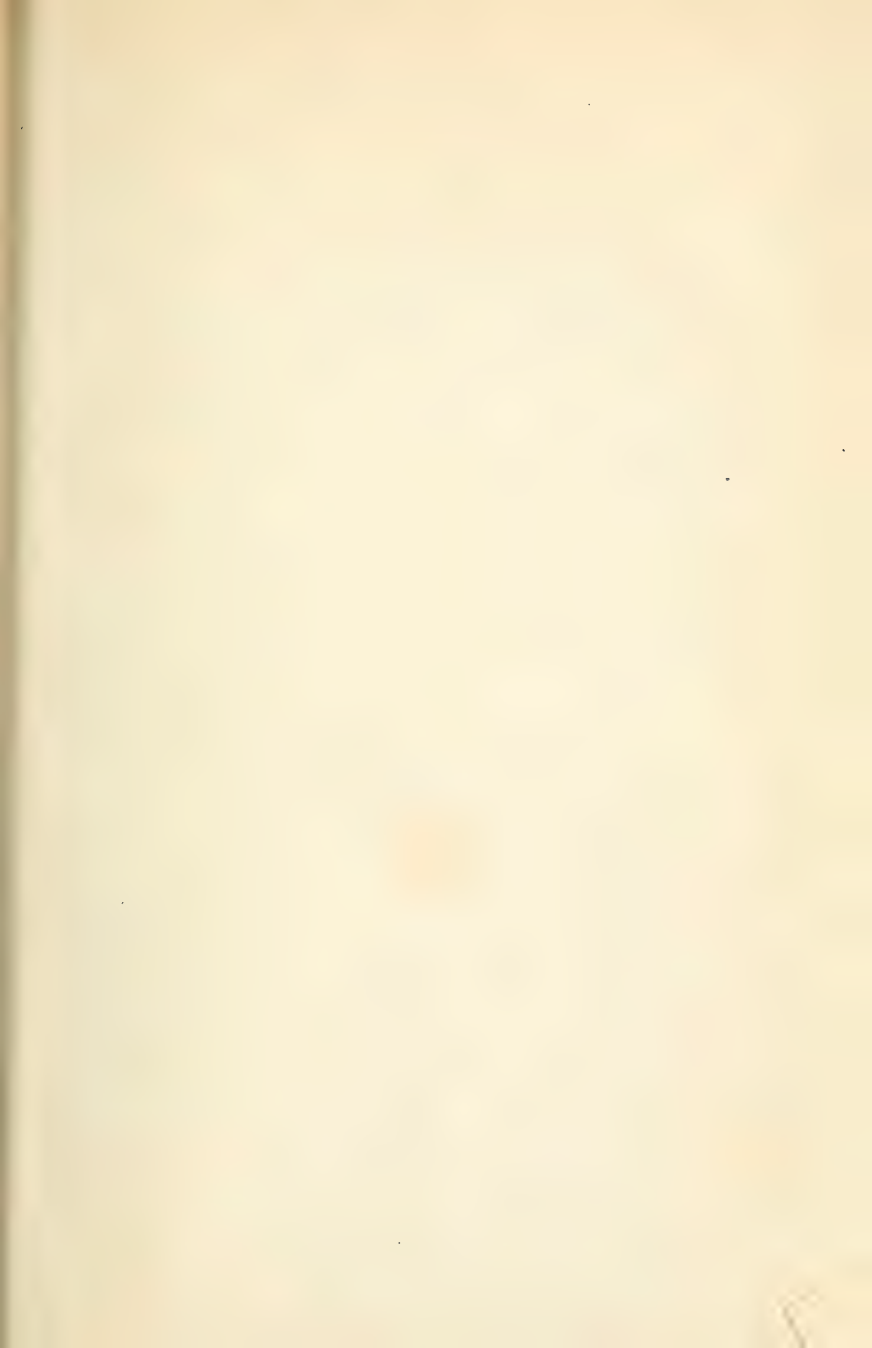
侍童

畜生の群

處

印度

時

古代

第一幕

東宮城門外。左手寄りやゝ奥に大いなる城門。嚴めしく鎖されあり。その側に門衛の屯所。城門の右手より正面にかけて城壁。城壁の後ろに宮殿の甍、大寺院、塔、樹立等の一部見ゆ。右手遠かに、塀を繞らせる民家の屋重なりて見ゆ。夏の黎明。殘月あり。

（濕波王侍從をしたがへて登場）

濕波王　（四邊を憚りながら）人影も見えぬであらうな。

侍從　幸い人影も見當りませぬ。消え殘つた月がひとり淋しく空にかゝつてゐるばかりでございます。

濕波王　（溜息をつく）余が微行で此處に來て、他所ながら太子を見送ると云ふことが知られたなら、また大臣たちが余を嚴しく責めるであらう。

侍從　諸大臣は口を揃へて陛下が太子殿下を牢獄に幽閉なさらなかつたことを非難致した位でございますから。彼等とても子を持たぬ人たちばかりではございますまいに。

濕波王　彼等には太子の一身よりも葉波國の社稷が重いのぢや。

侍従　大義のために親を滅して、愛する獨兒を異域の深山に追放遊ばされる陛下のお心をお察し申し上げるのも畏れ多う存じまする。

濕波王　（月を仰ぎながら）月も悲しう見えるわい。あの月が太子の馬車の崎嶇こして行く旅路を獨り照らすのかと思へば。檀特山へは道も遠いのぢや。

侍従　あの月が菩提樹の梢にかゝつて、葉陰に半ば隱れた太子殿下の御書院の窓から、なつかしい咿唔の聲の漏れるのを私はほんの此の間まで床しい氣持で聞いたものでございますが。

濕波王　太子は小さい時から書を讀むことが好きであつた。わしは煩はしい政事に疲れた時、太子に尊い書物を讀み聞かせて貰ふのが何よりの樂しみであつた。わしは若い時から戰陣の間に月日を過して、書に親しむ暇が無かつたから。わしは太子の學藝に秀いでてゐるのを誇りにしてゐた。荒い頑固なわしの心が少しでも和らぐことを知つたのは彼の感化であつた。彼は攻略や富強の業の外に、聖賢の道を學ぶ清い喜びのあることをわしに教へてくれた。わしの政治が壓制に過ぎると云つては戒め、誅斂が重きに傾くと云つては諫めてくれた。

侍從　政治は自由になり、徭役も輕くなり、訴訟は正しく裁かれるやうになつたと民は皆陛下の御德をたゝへて居りまする。殊に太子殿下が寶藏を開いて度々行はれたあの莫大な布施には人民どもゝ驚いてゐたやうでございます。前代未聞の御仁政であると百姓悉く擊壤鼓腹して居りまする。飢ゑたるものは食を、凍えたるものは衣を、病めるものは藥を得て淚をこぼして喜んで居りまする。遠國のものも傳へ聞いて、仁政を慕うて集つて參りますので溫波國の人口は益々繁昌致しまする。

溫波王　（苦笑して）いや〳〵民は悦んで居るが、御蔭で王室の寶庫は空にならうて。その太子の立てた布施行の大願が遂に身を過り、國を危くし、父子の恩愛を割く刃となつたわい。太子は幼い時から施すことが不思議に好きであつた。まだ元服もしない時、四人の乳母に守られて遊樂のために出城したことがあつた。馬車がやつと城門の外に出ると彼は道の邊に跪いて施をこふてゐた盲者や啞者や跛者や癩病やみの群を見つけて、顏色を變へ、車を旋らして歸つてしまひ、そのまゝ部室に閉ぢ籠つてふさぎ込んでしまつて乳母が幾ら慰めても駄目であつ

た。そして彼が再び音樂の學びや、娛樂の遊びに就くまでにはわしが庫を開いて七日の間その乞食の群に布施をしてやらねばならなかつた。

侍從　殿下のその慈しみ深いお心に誰か感動せぬものがございませう。たゞその御慈愛がある節度を保ちさへ致しまするならば――

濕波王　（溜息を吐き乍ら）太子の布施行には限りがない。彼は衣食、田宅、車馬、什器、宮殿内のあらゆる財寶、いや宮殿とのものをも施してしまはねば止むまい。此間も大藏大臣が嘆息してわしに訴へた。「國庫は空しくなりまする。國内のすべての穀物、すべての獸畜は盡きました。此分では今に我々百官の愛する妻子が人民の僕婢として施されることでございませう」と。

侍從　けれどあの須大延のみは――穀物は散じ盡されるかも知れない。妻子は僕婢とならしめられるかも知れない。けれどあの靈象のみはいかに太子殿下と雖も決して布施さるゝことはあるまいと確信して居りましたが。

濕波王　（青ざめて）わしは陸軍大臣がそれを知らせに來た時初めはどうしても信じられなかつた。が大臣の沈痛な顏付きで愈々本當だと知つた時わしは不意に大地が搖らいだやうな氣がして眼の前が暗くなつた。

侍從　陛下があの時昏倒して玉座からお落ち遊ばしたのも無理ではございません。

濕波王　あの靈象は葉波國の守護神であつた。近國が我國を懼れて敢て近づかないのもあの須大延のゐるためだつた。わしの軍隊が戰へば必ず勝つたのもあの靈象の威勢のためであつた。

侍從　あのヒマラヤ山に積る雪のやうに白い靈象が椿の樹の株よりも太い鼻を扛げ、金鞍の上に嚴めしく軍裝せられた陛下を載せて敵陣めがけて突進する時には、まるでガンヂス河の氾濫が堤を切つたやうに敵はなだれを打つて潰走致しましたが。

濕波王　あの須大延はわしが祭司百官を率ゐて、徒步にて蓮華に詣り、神聖な儀式を以つて軍神に献げた神象だ。わしは右手に象勤を持ち、左手に金甕を提げて、自ら象の足を滌いで奉つたのだ。

侍從　そのかけがへの無い靈象を國にありませうに、あの祖先以來の宿敵たる鳩留國から遣した焚土に施しておしまひになりますとは！

濕波王　わしが幾百度の戰勝の度毎に、戰利品や珍寶で眩ゆく飾つた黃金の凱旋車を曳かせて、わが都の街々を練りあるかせたのであつたが。

侍從　（感慨深さうに）あゝあの神のやうな白象が新月のやうな優しい眼をして、宮殿の柱のやうな太い足でしつかりと大地を踏んで、大山の移るやうに悠々と步く英姿を最早永久に見ることは出來ないのか！

濕波王　（青ざめて）いや。今に再び見るかも知れないぞ。戎めが戰陣の眞先きにあの象を押し立てゝ、攻め寄せ、味方を散々蹂み躙るのを。（默想に沈む）

侍從　あゝ取り返しのつかない一大事だ！

濕波王　（決心したやうに）いや、今は徒らに嘆いてゐる時ではない。祖國を護り、侮りを禦ぐ策を立てなくてはならない。今夕諸大臣初め百官諸將を招集して、わしの面前にて直ちに善後の

計を議することにしやう。

侍從　大臣達の言上されるのは尤もでございます、さすがの太子殿下も今度ばかりは後悔してゐられるでございませう。

濕波王　いや太子は自分の所業を惡いとは思つてゐない。却つて自分が天の名によつてなしたる布施の酬ひで葉波國は祝福されるであらうと云つてゐる。

侍從　（驚いて）私は葉波國が滅びはしないかと恐れて居りますのに。

濕波王　それはかりではない。わしや諸大臣が最重の刑罰の威嚇を以つて、またわが先祖代々の王達の名によつて彼が將來此の上祖國の安危にかゝるやうな布施を思ひ止まることを保證せしめやうとしたのに對して　彼は自分の立てた檀波羅密事の本願が滿足するまでは決して布施は止めない、自分は自己のため、血族のため、萬人のためにこの本願を立てたのだ。自分は何ものをも所有しない誓ひを立てた。自分が一物でも所有してゐる間は決して乞ふものに拒むことは出來ないと答へた。そしてわしや諸大臣の眼の前で地に跪き、天を拜して彼

はも一度その誓ひを新らしくした。

侍從　それでは諸大臣が激昂して嚴罰を申請されたのは、畏れながら止むを得ないことかと存じまする。

濕渡王　わしも諸大臣の申請に對して何と言葉を返すことも出來なかつた。そして默然としてゐた時に、あの老いたる宮内大臣がわしの心を察して、太子を拘禁することは穩かでないから、國外に追放することにしやうといふ議をたてた。諸大臣も流石にそれに異議を申し立てるものはなかつた。わしはせめて太子の生命の無事であることに滿足してその建議を裁可するより道がなかつた。それに出家して羅特山に行くことは太子の豫ねてからの願であつたので、彼が今日まで國に留つてゐたのはたゞわしと妃との悲嘆を慮れてゐたために過ぎなかつたのだから。

侍從　最愛の太子と、最愛の[illegible]同時にお失ひ遊ばさなければならない陛下のお心を思へば私は涙がこぼれまする。

濕波王　あゝ誰か來るやうだ。人目にかゝらぬやうに早く身をかくさう。

侍從　あの門衛の屯所に。もう夜も明けまする。太子殿下の御馬車の出城するのも程なくこ思はれまする。

（王と侍從退場。引き違ひに一人の寡婦襤褸をまとひ、泣き叫ぶ子供を脊負ふて登場す）

寡婦　あゝ。やつと來た。此處があの御慈悲深い太子様のゐらつしやるお城なのか。もつたいない。もつたいない。亡くなつた夫は決してお城の方へ足を向けては寢なかつた。夫にあのやうにおやさしくして下さつた太子様だもの、夫に先き立たれたふしあはせなやもめにきつこ惠みをかけて下さるだらう。どうか太子様にお目にかゝつてわたしや夫がどのやうに太子様の御恩を一生感謝してゐたかをお傳へ申し上げたい。そして無慈悲な稅吏のためにごんなに酷い目に遇つて死んだのを訴へたい。（泣き叫ぶ子供をすかしながら）坊や。お泣きでない。坊や。いゝ子だから。もうわたしたちは太子様のお城の門の前まで來たのだからね。もう跪いてお願ひ申しさへすればいゝのだからね。

子供　（泣きながら）ひもじいよ。ひもじいよ。

寡婦　（子供を下ろし）あゝひもじいだらうね。もう二日も食べないのだからね。今に太子様が食べるものを澤山惠むで下さるよ。

子供　（地べたに足を投げ出して）あゝ、痛い。痛い。

寡婦　（面をしかめて）はだしで、石ころ道をよつぴて歩いて來たのだもの。（子供を抱き胸をひろげて）さあ母さんのお乳を。

子供　（ちよつとしやぶつて直ぐ放し、泣き出す）

寡婦　乳も干あがつてしまつた。もうわたしの膚を傷けて血でも飲ませるより仕方がない。（石の上に腰をかけて泣く）

（城門内にて鐘の聲きこゆ）

寡婦　（立ち上り、子供の手を引つぱつて門の側に行く）もう朝だ。今朝太子様が御出ましになると聞いたのだが。（門、内より開かる）

門衛　（獨言）此の門が鳴るのも今日限りだ。主人を失つた此の門は今晩から永く／＼陰氣くさく鎖されるだらう。今日まで貧乏人は鬼子母神様の門でゞもあるやうに、ありがたがつて居たのだが、

寡婦　（門衛の前に行く）お役人様、お願ひ申します。お惠みをおかけ下さいまし。貧しいやもめでございます

門衛　（泣き叫ぶ子供の聲に眉をひそめながら）門前でそんなに八ケ間しく泣き立てゝは困る。今朝はことに靜かにしなくてはならないのだ。

寡婦　父のない不仕合はせな子でございます。（子供に）これ、泣かないでお役人様にお惠みをお願ひ申さないかい。

子供　（泣きながら跪きて門衛前に）お惠みを、父のない子でございます。

門衛　おや、この子は物乞ひすることを教へられてゐると見える。

寡婦　（節のついた白にて）ふしあはせな母子でございます。何にも食べてゐませんので。夜通し

歩いて參りましたので。

門衛　惠みなら太子樣に乞ふがいゝ。

寡婦　その太子樣にお目にかゝりたいのでございます。今朝お出ましになるときゝましたので。

門衛　うむ。今にお出まし遊ばされる。お前たちは片端な處に來合はせたものだ。

寡婦　何んでございますつて？

門衛　（考へつゝあちこち歩みながら）もう半日遲かつたらもう太子樣は此の國を去つていらつしやつたであらう。

寡婦　え。太子樣が此の國をお去り遊ばすのでございますつて？

門衛　（己れに物云ふ如く感動を以て）今朝出城遊ばしたら、もはや永久にみ車をお迎へ申すことはないかも知れない。

寡婦　（子供を突き放ち、顚倒して）あの太子樣がでございますか。あの國中のものが讃めたゝへてゐる太子樣が！　それは本當でございますか。

門衛　(默つてあちこち歩む)

寡婦　(すり寄つて)もう一度とお歸り遊ばさないのでございますつて。あゝどうしたらいゝだらう、どうぞおつしやつて下さいまし。何處にお出で遊ばすのでございますか。

門衛　お前たちに云ふやうなことではない。

寡婦　(泣き出しさうになつて手を絞りながら)どうぞ聞かせて下さいまし。お慈悲でございます。おつしやつて！

門衛　檀特山にいらつしやるのだ。

寡婦　檀特山？　あの遠い〳〵荒れた山へ！　恐ろしい獸のをるといふ深山へ！　どういふわけで？

門衛　それはお前たちに云はれない。だがあまり施しが過ぎたからだといふことだ。悲憤するやうに)あまり人民が貪慾すぎた。太子樣のお慈悲深いのにつけあがつて、飽くことを知らずに乞ひむさぼつたからだ。

寡婦　（地に倒れて）ではお布施のためには王様のお氣にふれて。

門衞　さうだ。云はゞお前たちの犠牲におなりなさつたのだ。

寡婦　（取り亂して）あゝ、どうしたらいゝだらう。私たちのためにあの太子樣が國をお追はれ遊ばすのか。赦して下さいまし。赦して下さいまし。皆があまり慾深いものでございますから。餘り愼みがないものでございますから。けれど私たちだけは本當に貧しかつたのでございます。本當に困つてゐたのでございます。こんなことになるのだつたら。假令私たちは飢ゑて死んでしまつてもお施しをお願ひ申すのではなかつたのに！　申しお役人樣、私たちはもう施しを乞ひはいたしません。人民はどうなつてもよろしう御座います。どうぞ太子樣がいつまでも〳〵此の國にゐて下さるやうにして戴きたうございます。お願ひでございます。

門衞　そんな重大な事件が俺らの手に合ふものか。それが出來る程なら俺らもこんなに愁嘆するには及ばないのだ。（子供の泣き立てるのを見て澁面をつくりながら）あゝ。退け。退け。こんなに門前を騷がすのは畏れ多い。今朝は皆樣の永のお別れにふさはしいやうに靜かに、嚴かに

市民甲　大言を吐くなあもういゝ加減にするがいゝや。少し廻りがよくなるとすぐこれだ。

市民乙　（よろめきながら）俺はお前のやうに吝嗇ではないのだ。

市民甲　ふむ。ひどく景氣がよさゝうだが、お前さんは半月ばかり前あんなにしよげ込んでわしに無心に來たことを忘れやしまいね。（傍白）臭え呼吸だ。

市民乙　（唾を吐く）大きなお世話だ。お前そんなことを云つてこれつぱかしでも貸してくれでもしたのかい。

市民甲　それあお前さんが碌な質房も持つて來なかつたからさ。ところでお前さんがそんな大きな口が利けるのも此の前の大布施の時にせしめた品をうつた金をもとでに、やつた危ぶない勝負が、たま〳〵うまく當つたからだぜ。

市民乙　うむ。俺あ賭け事にかけちやあ膽がふといからね。だがお前だつてあまり大きな顏は出來まいぜ。あの大布施の時のお前のやり口にや驚かされたよ。お前はおい〳〵泣き聲を出してやつてゐたぢやないか、「私は貧乏です、私は[illegible]藥を喰つてゐます。子供はみな白痴

で、「みな片端で」なんかしやべり立てゝゐたぢやないか。お前の庫には米を腐る程貯め込んでゐやがるくせに。

市民甲　それが羨しいと云ふのかい。それは私が正直に稼いで少しづゝ儲けた金をお前さんのやうに飲んでしまはないで貧乏なものに廻してやるからさ。

市民乙　ふむ。眼玉の飛び出るほど高い利息をとりやあがつて。

市民丙　おい〳〵お前さんたちそんなにがみ〳〵云はないで、少し靜かにしたらどうだ。此處は太子殿下の御城の前だ。

市民甲　本當にさうだ。此奴があまり利いた風のことを云やあがるものだから。

市民乙　なんの。わしは地道に貯めることは好きだが、高言を吐くことはあまり好まぬ方だ。

市民甲　太子殿下に敬意を表しやう。

市民乙　さうだ。福の神は大事にしなくてはならない。

市民丙　（頭巾を脫いでお辭儀をしながら）やれ〳〵、ありがたいことだ。太子様がこの城に住んでゐる

て下さりさへすりや　わしらは安心だ。わしらは丹精に百姓をするが　幾らはたらいても食へない時がある。何しろ幾ら凶年でも稅吏は年貢を高くして懐を肥やすことを止めはしないから。そんな時には太子樣にお願ひすれば飢え死にすることはない。わしは此の前のお布施の時に牛をいただいたが、お影でそれから田を耕すのがどれほど樂になつたか知れない。

市民乙　太子樣は私たちにとつては何よりも大切な寶槌だ。いざとなつたらそれを振りさへすれば田地でも車でも衣物でも何でも出て來る。

市民甲　何處までも勘定高いことをいふね。俺などは困つた時には貰ひに行きはするが、御恩はいつも忘れたことはない。おやあれは何だ。

市民乙　女と子供だ。

市民丙　かはいさうに子供がひどく泣いてゐる。

市民甲　あのお袋は子供の泣くのもほつたらかしにして何か獨りでぶつ〳〵云つてらあ。

市民丙　お祈りをしてゐるのだ。

市民甲　施物を貰ひに來た乞食だらう。

市民乙　御覽、いゝ女だぜ。

市民甲　此奴は女を見るとすぐこれだ。

市民乙　惜しいことに氣が狂つてるやうだ。

市民丙　いや。そうでもないらしい。

（市民丙、女の傍に近づかんとす。その瞬間に女市民等を認めて飛んで來る）

寡婦　（狂ふやうに）皆さん、大變です。どうかして下さいまし。行つておしまいなさいます。

市民甲　何だ。

市民乙　どうしたと云ふのだ。

寡婦　行つておしまいなさいます。太子樣が――

市民丙　太子樣がどうなさるつて？

寡婦　檀特山へ行つておしまいなさいます。今すぐに。今朝のうちに。

市民丙　檀特山へ？　これ。お前さん。もつと氣を落ちつけて話して御覽。それは本當かい。どうして知つたのだ。

寡婦　門衛からきゝました。本當です。だから早くして下さい。早く太子樣がお止り遊ばすやうにお願ひして下さい。

市民丙　もつとくはしく――靜かにして――太子樣がどういふわけで――

寡婦　（少し落ちついて）王樣にお氣にふれたのです。太子樣があまりお布施をなさつたのがいけなかつたのですつて。

市民甲　そいつは大變だ。

市民乙　それはいけない。嘘じやあないか知ら。門衛奴が嚇かしたのじやないか知ら。

市民丙　（考へて）いや。本當だらう。ありさうなことだ。

寡婦　早くして下さい。早く。もう太子樣の御車が直ぐに出るのですから。

市民甲　是非止まつてもらはなくちやあ。どうしたらいゝだらう。

市民乙　役人に賄賂を使つてどうにかならないか知ら。

市民丙　お願ひするより外はない。皆で車の前に跪いて一生懸命お願ひして見るのだ。

市民甲　さうだ。こんな時にお拝み倒すのが一等だ。

（鉦の聲城外よりきこゆ）

寡婦　あゝ、もうお出ましになる。

騎馬兵　（門より登場）退れ。退れ。

（市民等道を開く。騎馬兵退場）

市民甲　行つて皆に知らせてやらなくちや。

市民丙　さうだ。皆呼んで來てお願ひしやう。わしらだけでは駄目だ。

市民甲　皆びつくりするだらう。太子樣を慕つてゐないものは無いから。

市民丙　太子樣に行かれては葉波國は暗闇だ。

（市民甲と市民丙退場）

市民乙　（退場しながら）福の神を遁しちやあならないぞ。わしの金函が乾上るから。

寡婦　あゝごうしたらいゝだらう。ごうしてお止め申したらいゝだらう。太子樣を失つたら國中の貧乏人はごうなるのだらう。國中の寡婦は、孤はごうして生きて行くのだらう。行つて女たちを呼んで來やう。孤をみんな連れて來やう。皆で私達の厨がごんなに乏しいか訴へたら、ふしあはせな孤がみんなひもじいお腹を絞つて泣き立てたら太子樣も役人たちも心を動かして思ひ止つて下さるかも知れない。さあ。今のうちに。大急ぎで。（泣き立てる子供の手を曳いて退場）

（鑾の聲きこゆ。やがて先驅の騎馬兵數名消え殘りたる松明を持ちて登場。太子、太子妃、及び二人の王孫を乘せたる馬車次いで登場。その後より多數の廷臣、女官及び八人の夫人。四人の乳母は馬車に從つて登場）

太子　（馭者に眼くばせして馬車を止めしめ、一同を顧みて）見送りは此の門限りで辭退しますぞ。

廷臣甲　我々は是非國境まで殿下をお見送り申上げたう存じます。

廷臣乙　若し殿下のお許しが御座いますならば檀特山までもお伴申したいのでございます。

女官の一　一度御車をお送り申し上げたならまた、いつの日にお迎へ申し上げるのかわからないのでございますから。

太子　一同の厚い志はうれしく思ひます。わしも名殘り惜しくおもひます。だがもはや見送りは辭退しますぞ。わしは父王陛下の御勅命を受け、國を立ち退くのだから。それにいつまで送られても限りが無いのだから。

夫人の一　ではございませうが、も少し名残を惜ませて下さいませ。私たちはいぶせき深山の奥までもお隨ひ申し、朝夕おかしづき申し上げたい切なねがひをも、お言葉ゆゑにあきらめたのでございますもの、このまゝお別れ申し上げるのはあまりに淋しうございます。

乳母の一　（涙ぐみ）せめてこの城が見えなくなるところまでお見送りをお許し下さいまし。今日の行啓(みゆき)の後私どもが二度と殿下におまみえ申すことは御座いますまい。私どもはもうあまりに年が寄りましたから。

太子　いや。いつまで見送つても悲しみは盡きまいぞ。（肅然として）別れに臨んで皆に一度だけ云つて置くぞ。わしが今日此の住み馴れた城を去つて山に行くのはお前たちすべての悲しみを負ふからだ。お前たちと永久に別れたくないからだ。わしが今此の城に留つたなら私たちはいつまでも別れないですむのであらうか。いや／＼ぢきに苦い別離が來るのだ。時が刻々に冷めたい死の塀を築いて否應なしにわしらの間を割いてしまふのだ。その時になつてお前たちは今の悲しみが手習ひに過ぎなかつたと思ふ程嘆き悲しむであらう。が、薬波國の全國民が聲を限りに泣き叫んだら、此の城の門は崩れるかも知らぬが死の鐵門は金輪際搖らぐことはない。そしてその後はどうなるのだ。お前たちは今日まで心をつくしてわしに事へてくれたゞその君臣の深かい契りはどうなるのだ。夫人たちがいくたびかその清い珠飾りにかけて示してくれた誠の誓はどうなるのだ　乳母たちが私を抱いて、襁褓の間から幾百度となく立てた愛の證（あかし）は？　わしはそれが思ふと此の城も塚のやうに見えるのだ。わしの萬歳を唱へてくれる聲も挽歌のやうに聞えるのだ。（夫人たちの間からすゝり泣きの聲が起る）わしは愛する者

と永久に別れないですむ國を求める。その國の民となることが許されるならば、たとひ最も卑しい僧であつても、今の太子の位を喜んで捨てたいと思ふのだ。あの檀特山には阿闍陀といふ聖人が棲まれ、常に坐禪を行ひ水氣を飲んで道を修め、無上の智慧と道德の德を備えて猛獸や毒蛇まで敬ひ仕へてゐると聞いてゐる。わしは行つて教へをこひたい、道を求めたい。死に打ち勝つ道を得たい。わしは山に行つて無上の悟りを成じたならば、その時わしは再び喜び勇んでお前達の許に歸つて來やう。その時は葉波國の太子としてゞはなく、精神の國の王としてお前達に迎へて貰ひたい。その時こそわしはお前たちを不滅にする本當の寶を與へることが出來るだらう。わしは今日まで持つてゐるすべてのものを皆に施して來た。だがわしの布施した物には一つとして不滅なものはない。わしは貧しい人々がわしの布施した財寶を得て喜んでゐるのを見る時に彼等が貧乏の苦痛から免れるのを喜びはしたが心の底にはいつも〳〵淋しさがあつた。わしは思つた、わしは貧乏人だ。彼等に與へる本當の寶を一つも持ち合はせてゐない貧乏人だ。わしの財寶で、わしの城や冠で彼等を救はうと思

つたのは愚かなくこそだつた。わしは行かう。行つて不滅の寶を發掘しやう。お前たちはわしが無上微妙の智慧で莊つてから國へ歸るのを待つてゐてくれ。きらびやかな行列は今日の旅にはふさはしくない。わしは太子としてゞはなく本當に貧しい求道者として行くのだから

（一同しばらく肅然としてゐる）

廷臣甲　殿下の世にも尊いおこゝろを承はりまして、何と申上げてよろしいか私共はたゞ頭が下がるばかりでございます。

廷臣乙　此の上は心をこめて殿下の御念願の一日も早く滿足するやうお祈りしていさぎよくお送り申上げるほかはございません。

女官の一　私どもゝ心を奮ひ起して殿下の御決心に副ひたてまつらねばならぬと存じます。

廷臣甲　（嘆息して）此の期に及んでもはや殿下をお止め申さうとは存じませぬ。たゞ心にかゝるのは殿下を失つた後の我が國の運命でございます。慈父の如くに慕うてゐた殿下が國を去られたと知れ渡つたら人民がきつと騷ぎ出すに相違ございません。それに乘じて敵國が攻め寄

せたら――

太子．國は滅び、[illegible]――[illegible]のやうだ、（[illegible]として）よくお聞き、そして忘れずに覺えてお置き、わしは永久に滅びることのない國を求めに行くのだ。わしがふたゝび歸るときにはお前達を不滅の國の民として永久に衰へることのない福祉にあづからせるぞ。（[illegible]に目くばせして）ではたつしやで、愛する人々よ。これでお別れ致しますぞ。

夫人の一人　あゝ、ではどうしてももうお別れ申さねばならぬのでございますか。わが主、わが師としてお仕へ申し上げるのも今が最後となつたのでございますか。お惠みを受けた此の幾年の間の様々な思ひ出が今夜から私たちを眠らせぬことでございませう。露よりもしげくおかけ下さつた愛のお言葉が永く〳〵私たちを泣かせることでございませう。もう夜衣に殘つた移り香の外には殿下をおよび申上げるよすがはないのでございますか。せめては俤となつて淋しい閨の戸に立つて下さいまし、（頸飾りから眞珠をはづして捧げながら）此の眞珠をわたし

たちのかはらぬ愛のしるしにお身におつけ下さいまし。

（他の夫人達も各々一箇の眞珠を太子に捧げる）

太子　（眞珠を受け取つて）わしは遠く別れてもお前達のことを決して忘れはしない。いつもお前たちのために祈ります。お前達はつゝしみ深く暮らして、わしが望みを達して歸るのを待つてゐてくれ。お前達が心をこめて餞けにしてくれた此の眞珠の報ひにわしが山からかへる時には七倍も美しい不滅の法珠でお前達を飾つてあげますぞ。

乳母の一人　（涙ぐみながら）ではその時には私たちには香華をお手向け下さいまし。私たちは冷めたい墓になつてゐませうから。（馬車の側に走せ寄つて）あゝこれが一生のお別れでございます。も一度玉體に觸らせて下さいまし。（太子の差し延べたる腕をさすりながら）あなた樣にお哺ませ申上げた乳房はもう萎み果てゝしまひましたが、私の心はあのあなたさまを籃に載せてお搖ぶり申上げた頃と少しも渝つて居りませぬ。どうぞどうぞお體を大切に遊ばして下さいまし。山にお入り遊ばしたら恐ろしい虎や毒のある蛇がお體を傷けはしまいかと私は心配

でなりませぬ。あなた様の玉のやうな膚をいばらが破らぬやうに氣をつけて下さいまし。本當にあなた様のお肌のどの隅にある小さな黒子(ほくろ)にも、私の唇の痕のつかぬのはない程でございますのに、山にお入り遊ばしても、わたしたちのことも時々は思ひ出して下さいまし、わたしたちはあなた様のお體のつゝがないことゝ御念願を遂げられる日の一日も早く來るやうにとお祈りすることを、たゞそれだけを死ぬる日までの仕事にするでございませう。その日はもう間もなくなるのでございますから。(小さな錦襴の嚢を捧げながら)これはあなたさまの守護神の帝釋天様のお守りでございます。いつも肌身につけてゐて下さいまし。あなた様は帝釋天様の御申兒で御幼少の時から御病氣の折にはいつも帝釋天様にお祈りして不思議に御本復遊ばしたのでございますから。

太子　(涙ぐみながら)乳母よ、お前たちの悲しみはわしの胸を千切るやうだ。だがわしは行かねばならない。今わしの行くのはお前たちと永久に別れたくないためだ。お前たちは老いた。お前の云ふ通りにお前たちは程なく此の世を去るだらう。わしが今千年の齡(よはひ)をお前に約束して

やつたとて、それが何の慰めにならう。わしが今たとひ此の城に留つても私たちはもうぢきに別れねばならないのだ。今別れたらわたしたちは、此の世では二度と逢へないかも知れないが、もはや二度と別れなくてもいゝ國でまた逢へる。わしはさういふ國を求めに行くのだ。さういふ國は乾度無くてはならないのだから。其の[illegible]までいつまでも／＼わしを愛してくれ。小さい時からお前たちがどんなにわしを愛してくれたか、それを思へばわしは涙ぐむ。此の城の廻りはどの丘も、どの樹影も、あらゆる径あらゆる隈がみな一つとしてお前たちに守られて一緒にした幼ない遊戯の思ひ出の殘つてゐないのはない位だ。そのなつかしい城を見棄てるのはわしの深い、深い決心からだ。わしの心持は解つてくれると思ふ。どうぞ達者で暮らしてくれ、わしは山に入つてもお前たちのことは一日も忘れることはない。平和な晩年と靜かな眠りとを祈つてゐるぞ。（廷臣の一人に）此の老妻たちが一生不自由をしないやうに厚く扶養してやつてくれ。

廷臣　畏りましてございます。

乳母　（泣きながら）あゝ、もつたいないここで御座います。

太子　（一同に會釋して）ではお別れしますぞ（馭者に眼くばせして）行け。

（使者急ぎ登場）

使者　（恭しく）只今王妃陛下がこれへお成りでございます。

太子　母上が！

（蹄の音、轍の響が聞える）

廷臣　王妃陛下の御車だ。

（間）

（王妃の馬車登場。供奉の列なく只一人の女官陪乘せるのみ。馬車止る。王妃馬車より下りて太子の馬車に走せ寄る。太子急ぎ馬車より下りる）

王妃　おゝ。須太拏や。（太子を抱いて）わたしの愛兒（まなご）、わたしの寶！（嗚咽のために聲がつまる。間）
お前は行つてはならない。行つてはならない。

太子 （やさしく王妃を抱いて）母上よ。お心をお靜かに。

王妃 そなたに行かれてわたしは何うして生きて行かう。わたしの望みはなくなつてしまう。わたしのいのちは滅びてしまう。わたしは――

太子 （しづかに）昨夜くれぐ〵も申し上げてお暇乞ひ致しました如く――

王妃 あゝ。昨夜、夜ごほしわたしは考へあかしたのだよ。そなたを離れてもこれから生きて行かれるかごうか試めして見たのだよ。わたしはお前はもう私から去つたものと思ひ定め、神々にわたしの心を支へて下さるやうにお祈りして、できるだけ耐へやうと努めてみたのだよ。けれごわたしは昨夜そなたのない私の生活がごんなものであるかといふことを知つた。とても私には耐へられるとは思へない。お前はごうあつても去つてくれてはならない。

太子 （肅然として）母上よ。私は行かねばなりませぬ。

王妃 いゝえ。そなたは行つてはなりませぬ。わたしが崩れて死んでしまうことをそなたが望むでくれるのでなかつたら。須太拏や。ごうか思ひ出しておくれ。わたしがごんなにしてそな

たを育てゝ來たかを。そなたが小さい時私はそなたを私の瓔珞を飾つてあるこの珠よりも美しい、この珠よりも稀な珠のやうに愛でました。實際にそなたにそれだけの價があつたのだ。そしてそなたが長じてからはまたそなたは私の誇りであつた。國の寶であつた。私は華波國の全領土よりもそなたを尊んでゐる。そなたのやうな氣高い人の母であることこの名譽を王妃の位よりも重んじてゐる。思へばそなたは私の胎に宿るにはあまりに尊かつたのだ。抑も私はこのやうにしてそなたを私のものとすることができたのだとおもふか？　そなたの場合では私は特別に私のものといふ感じを私が持つてゐることが許されねばならないと思ふ。何故と云つて私はそなたを神に祈り求めて授けられたのだから。王様と私とは世嗣のないのを嘆き悲しんだ。その他のすべての充ち足つた幸福もこの嘆きの前に輝きを失ふかと思はれる程だつた。王様は尊敬すべき祖先から傳へられ、多くの記念すべき名譽ある戰爭によつて外敵から完全に護られた此の美しい豐饒な國を嗣ぐもののないことをおもふことに嘆息遊ばした。そして遂に王様と私とは寢物語りに相談して帝釋天様に子種をお授け下さるやうに祈願を立てゝゐたと

になつたのだよ。私たちはごんなに嚴かな儀式と、淨い齋戒と永い斷食とを以て熱心に祈つたことだらう。そして終に私達の切なる祈りが聽かれて、私は身重になり、漸くそなたが生れた時に私達の喜びはごんなだつたらう。その時程王樣のお顔が幸福に輝いたのを見たことはごの凱旋の時にもなかつた。金甕の水で玉のやうな肌を洗ひ、練りのいゝ絹布で裹んで、しみ〴〵とそなたの顏を見た時に私は淚がこぼれて止まらなかつた。その瞬間からそなたは私のいのちになつてしまつたのだ。そなたはまたあの立太子式の日のことを思ひ出しておくれ。そなたが元服するのを待ちかねて、あの盛んな、目の眩ふやうな華麗な儀式で、王樣の手づからそなたの頭に冠が載せられた時宮殿も搖らぐやうな萬歲の聲の裡に、そなたが百官と庶民の前に太子として初めての挨拶をした時そなたはごんなに立派で、王者の威嚴を備へて美しく氣高く見えたことだつたらう。その時私は母の幸福に醉ふやうな氣がした。須太拏や、考へてみておくれ。その幸福が皆空しくなつてしまふのだ。幸福が大きかつただけに、それを失つた後の苦しみは一層ひごいだらう。ごうぞあはれな母をその恐ろしい淋しさのう

ちに殘さないでおくれ。

太子　母上よ。あなたのお心はよく〱解ります。あなたはどんなに私を愛して下さつたでせう色々思ふと私の胸は淸い淸い淚で一杯です。あなたは此の法界に愛といふものゝあることを私に知らせて下さつた最初の方でした。私がそれを至上の眞理と認め、その眞理に私の一生を捧げて奉仕しやうと思つてゐる、その愛といふものは實はあなたから初めてその觀念の種子を賜はつたのでありました。あなたは私にありあまる程の母らしきめぐみをかけて下さいましたが、その種子こそあなたの私に賜はつた一番尊い賜物でございました。私はあなたから賜はつた生（なま）のまゝの愛の粗鑛（あらがね）から、純粹の黃金を鍊り出しました。（淚と道德的興奮とを同時に感じ乍ら）あゝ母上よ。私が今あなたとお別れせねばならぬと決心するのも實にその愛のためです。その愛の至上命令に從ふのです。あなたと今お別れするのが却つて本當にあなたを愛する道であると信じるからです。永久にあなたとお別れしたくないからこそ今お別れせねばならないのです。昨日吳々も申上げた通りです。不滅の都で、再びお目にかゝり、そし

て其處なる宮居に永久に共に棲みませう。何卒私をいさぎよく送つて下さい。

王妃　須太拏や。私はそなたの心が解らないのではありません、そなたがごんなに母思ひであつたか、わたしの思ひ出が一杯です。それがわからないでごうしませう。それだからこそそなたと別れるここが耐へられないのだよ。わたしごうあつてもそなたを遠くの山に遣つてしまうことは出來ません。年こつた母親の愛こいふものがごんなに切ないものだかごうか察しておくれ。そなたに云ふが、わたしは此の二三年めつきりと體が衰へてきてゐますよ。老の淋しさがもう私をとりまくやうになつて來ました。見ておくれ。わたしの此の鬢の霜を。

太子　わたしの心を弱くしないで下さい。

王妃　私の白髪頭が冠の重さにも耐へられなくなるのはもうぢきです。そなたこ別れてしまつたらわたしは屹度床につきますよ。

太子　あゝ。

王妃　わたしが死ぬ時そなたは私の臨終の枕べに侍しては下さらないのですか。わたしの最後の

息が呼ぶのは必ずそなたの名にちがひない。その時そなたは私を抱いては下さらないのですか。母親がその獨兒を育てるときに、自分の末期の脣を潤ほして貰ふことを願はないものがゐるだらうか。

太子　母上！

王妃　そなたはわたしの葬らひの列にもつらなつて下さらないのですか。

太子　お聞き下さい。母上。あなたの母としての執愛が今の私を躓かすならば、あなたにとつて恐ろしい禍ひですぞ！　母なるものゝ名の上に永久に天の呪ひを呼ぶのですぞ！　母性の愛の中に巧みにつくられた惡魔の陷穽が今はつきりと私に見えます。よくお聞き下さい。私は母上から愛の觀念の種子を賜はりましたが、私はそれを地に蒔いた時に不思議にも其處には藥草と毒草とが同時に生えました。私がその二つを見分けることが出來るやうになつたのはほんの最近のことなのです。これは實に恐ろしいことでした。一つは人類を平和に導き一つは爭鬪に誘ふのです。一つは涅槃に一つは輪廻に、其處に深い陷穽がかくされてゐるので

す。種族の愛はそれが法の光で照らされないならば眞の愛と異るばかりでなく相乖くのです。母子も一度隣人でなくてはなりません。隣人の愛のみ眞の愛です。世間に豊かな領土を遺したい欲望が父上を多くの戰ひに驅りました。我子の艶色に溺れてゐたい執着が今世にも尊い大願の旅程から私を阻まうとしてゐるのです。今私が退轉して此の世に留まれば母上も私も共に滅ぶのです。薩婆國の人民も滅ぶのです。どうぞ私を行かせて下さい。勇ましく送つて下さい。

王妃　（すゝり泣き乍ら）あゝ。わたしはどうしても遣らねばならぬのか。（太子を沁々と見る。やがて取り亂して）いゝえ。いゝえ。わたしはやることは出來ません。別れることは出來ません。

太子　（跪きて母の手を取り）尊き母上よ。勇氣を奮ひ起して下さい。あなたの生れながらの美しい知慧と、敬虔なこゝろを呼び醒まして下さい。假令今お別れ致しましても、やがて天上で、限りないいのちを持つて――

王妃　わたしは眩ゆい天上よりも此の薩婆國の黒土がなつかしい。假令短かいいのちでも、そな

たの黄金色の髮を見、わたしの胎から出たその薔薇色の肌に觸つてゐたい。（全く取り亂れて）あゝ、わたしは今の苦しみを見るよりは母とならなかつた方がよかつたと思ひますわい！（地に伏して泣き崩れる）

太子　（無言のまゝ王妃の瓔珞の揺らぐのを凝つと見つめて居る）

（間。群衆の喧噪の聲舞臺の後ろに起り次第に近づく。「太子殿下！」「檀特山へ」等の叫び聲時々聞ゆ）

太子　（突然立ち上がる）ではお別れいたしまする。（馬車の方に行かんとす）

王妃　（起き上り、怨めしさうに）あゝ、そなたはどうあつても行くのですか。（咽び泣き乍ら）お行き！死んでしまふから。わたしは生きてはゐられないから！

太子　（思はず、二三歩母の方に寄らんとし、踏み止まり、顔色蒼ざめ、一瞬間沈默の後决然として）お死になさい！　母上。

王妃　（眞青になつて）えゝ？

太子　（天を拜しながら）惡魔よ退け！　今のわしの決心を鈍らさうとするものは禍ひだ。永恒に呪はれるであらう。假令肉身の母であつても外道だ。惡魔だ。我前に立つ女人よ。汝と我と何の關はりがあらう！

王妃　須太拏！

太子　今の私の發心を妨げて永久の冥罰を蒙るよりも惠み深き天よ、願はくば速かにわが母に死を給へ。

王妃　おゝ。（太子に飛びつかんとし、太子の威に打たれてそのまゝ立ち竦み、やがて瞑目して沈默す）

太子　女人よ。私は今そなたの子としてそなたの前に立つてゐるのではないぞ。今私は衆生のものだ。今私は私を孕んだ女に屬くものでなく、天に屬くものだ。あゝ今私の道を阻むよりも、死は寧ろそなたにとつて幸ひだ。今私をそなたの懐から人類の手に返せ。そなたが帝釋天からあづかつてゐた私を、も一度帝釋天に返せ！

王妃　（天に向つて兩手を絞り乍ら）南無帝釋天！

太子　天王帝釋よ。此の女人を守らせ給へ。

王妃　（地にひざまづく）

（間。群衆の喧噪益々はげしく、近づき來る）

王妃　（突然、涙に洗はれたる顔を上げ）行け！　行け！　我が子よ。行つて惡を止め、悟りを開け。道を成じて父と母と葉波國の先祖代々の靈と、すべての民を救つてくれ！

太子　おゝ母上！　（走せ寄つて王妃の腕に身を投げかく）

王妃　おゝわたしの愛兒！　（一度抱き緊め、やがて靜かに太子を離し、跪きて太子を拜し）わが師よ。

太子　（瞑目して佇立す）

王妃　そなたは私の善知識です。わたしの救主です。もつたいない。もつたいない。そなたを孕んだわたしの胎は何といふ祝福されたものであつたらう。わたしに何の價があつて數多い女の中から選ばれたのだらう。いつくしみ深き天よ。いと小さきはした女が今さゝげまする心からの感謝をお受け下さいまし。

太子　（涙ぐみ）あなたのお言葉はあまりに畏ろしう御座います。若し私に何か尊いものがありますならば、母上よ、それは實にあなたに、かくも高貴なあなたに負うてゐるのでございます。

王妃　そなたを私の私有（もの）と思つたのは私のあやまりであつた。私の思ひあがりであつた。私は今はつきりとそれが解りました。天よ、わたくしの僭冒をお赦し下さい。そなたは本當に人類の有です。天のものです。わたしは今そなたを私の手から放します。天に返します。お行き。須太拏、そなたの使命のために！　そなたを産んで人類に贈つた私の動は永久に人類の記憶から滅びることはないであらう。私の名譽は眩ゆい程です。

太子　尊き母上よ、諸天もあなたを嘉し給ふでございませう。

（群衆の喧噪いよ／＼烈しくなる。遂に二、三の市民群衆に押し出されたるさまにて右手の端より登場す）

兵士甲　退（さ）け、退（さ）け。

兵士乙　寄るな。無禮者！

（二、三の市民退場す。喧噪いよ〳〵烈しくなる）

騎馬兵　（示威的に群衆の前に馬を驅けさせつゝ）叱ッ、靜かに！　御前だぞ！

寡婦　（突然登場群衆を押し分け、子供を抱きたるまゝ太子に馳せ寄らんさす）

兵士甲　無禮者！　（槍の柄にて押し出さんさす）

寡婦　（槍の下をくゞり拔け、太子の側に突進し、その足下にうつ伏し）お願ひでございます。お願ひでございます。

兵士甲ミ乙　（左右より槍の鋒先を擬しながら）退れ、退れ。

寡婦　太子樣！

太子　（靜かに兵士を制して）捨てゝ置け。今日は何人も拒みたくないから。（兵士後ろに退く）願ひの筋を云ふがよろしい。

寡婦　ありがたう御座います。有り難ぅ御座います。お止まり遊ばして、どうぞお止まり遊ばして！

太子　（稍おどろいて）誰から？　そなたは何人か。

寡婦　貧しいやもめでございます。名もない小商人の妻でございます。（泣き立てる子を揺ぶりつゝ）お泣きでない。お泣きでない。おはれなみなしごでございます。

太子　（顧みて）女と子供に食物をやれ。

寡婦　いゝえ。いゝえ。それがお願ひではございません。

太子　飢ゑてゐるのではないのか。ひどく疲れて見えるが。

寡婦　倒れ込みさうでございます。もう三日何も食べません。夜通し歩いて來たのでございます。あなた樣にお目にかゝつて、親子が干死するのを助けていたゞかうと存じました。けれども恐ろしいことを聞いた今そんなことは何んでもございません。おつしやつて下さいまし。あれは本當でございませうか。あなた樣が檀特山へいらつしやると申しますのは。

太子　（しづかに肯く）

寡婦　（青ざめる）あゝ、やつぱり本當だつたのか。（泣き出して）お止まり下さいませ。太子

樣。どうぞ御慈悲に。あゝ、どうしたらいゝだらう。（手をもみながら）おなさけでございます。おなさけでございます。國中のものがどんなにお賴り申してゐるか知れないのでございますから。それはもうみんな親の樣にお慕ひ申してゐるのでございますから――

太子　（感動を抑へ乍ら）女よ、わしは行かなくてはならない。

寡婦　いゝえ。いゝえ。どうあつても止つていたゞかなくてはなりません。あなた樣がおいで遊ばしたら國中のものがどんなに嘆くでございませう。どんなに困るでございませう。明日から此の國には日輪が昇らないのと同じでございます。國中の貧しいものや、年寄はどうするのでございませう、私たちのやうなやもめや孤兒はどうして生きて行くのでございませう。

太子　わしが行くのは皆のためだ。

寡婦　皆のため？　さうでございます。皆があまり貪欲なものでございますから。あまりに――

太子　そなたは間違へてゐる。

寡婦　いゝえ。あまりに愼しみが無いものでございますから。あなた樣が皆を憐んで布施して下

さいましたのに、皆はつけ上つて慾を過ぎました。そのために自分等が何より頼りにしてゐるあなた樣を失はなければならないやうな羽目になることは何といふ淺ましいことでございませう。無愛想が盡きませう。でも赦してやつて下さいまし。皆馬鹿でございますから。皆後悔してゐるのでございますから。

太子　いや、わしは皆を責める氣は微塵もないのだ。皆は責めるにはあまりに人が好い。あまりに自分を知つてゐない。自分の運命の恐ろしいことを知らない氣の毒な人たちだ。わしが行くのは皆に布施するためにもつと〳〵尊い寶が欲しいからだ。

寡婦　(驚いて)此の上にまだでございますか。あゝ、何處まで御慈悲深いのでございませう。そのお心のために王樣の御勘氣をお受け遊ばして國を立ち退き遊ばさなくてはならないとは！(四邊を見廻し)申し上げ役人樣、どうぞ太子樣をお止め遊ばして下さいまし。お立退き遊ばさなくてもすむやうにおとりなし遊ばして下さいまし。(地に頭をすりつけて)お慈悲深いお妃樣。どうぞ王樣にお願ひして御勘氣の解けるやうお計らひ下さいまし。皆にもう決してお布

施をねだるやうなことは致しません。皆本當に後悔してゐるのでございますから。それはもう私が承け合つてもよろしいのでございますから。

（一同沈默）

寡婦　どうぞ小さなものゝ願ひを斥けないで下さいまし。（一同の答へざるを見て突然に、狂ふやうに）わたしに命がある限りはおみ足にすがりついても此處からお立たせ申しは致しませぬ。强いてお立ちに遊ばすのでしたら、あの御車の軌でわたしの體を轢いてお通り下さいまし。（地上に身を投げて、泣きくづれる）

太子　（深く感動して天を仰ぎ）天よ。此の小さきものからこれほどまでに慕はれる價が私にありませうか。私は恐ろしうございます。何卒私がそれに價するほど偉大にして下さい。（愛憐の眼を女の埃にまみれた背に注ぎ乍ら）女よ。わしの云ふことを心を落ち付けてよくお聞き――

（此の瞬間群衆の喧噪極度に達し、群衆の中より「お慈悲でございます」「國が亡びます」「暗闇になります」「餓死します」等の叫び老若男女入り混じりたる聲にて聞こえ、やがて數名の市民後より押

された右手端城壁の前に登場す。兵士、騎馬兵等群衆を押し止めんとして槍を揮ひ、馬を驅つて叱咤す）

太子（兵士達を制して）止めなくてよろしい。人民を集まらせてくれ。わしは彼等に別れの挨拶がしたいから。

（兵士等道を開き太子の後ろに警戒す。群衆入り來り皆、太子の前に跪く）

太子（天を拜して）天よ。私の言葉を祝福して出來る限り眞理と愛とを含ましめ、且つ理解し易く語らしめ給へ。人々の心の耳を聽からしめて、よく目前の偏好の情を抑へ、永久の眞理に聽く知慧を眼ざめしめ給へ。（沈默）

（太子の一心に祈禱せる樣を見て群衆は自づと靜肅になる）

太子（靜かに、親しげに群衆の側に數步近よりて）愛する葉波國の人々よ、わしが今心の底から眞心をこめて語る言葉をどうか心を靜かにして聞いてくれ。わしの言葉は袂別の挨拶なのだ。わしは今そなたたちとお別れすることを堅く〳〵決心して此處に、そなた等の前に立つてゐ

るのだ。

（群衆色めきお止まりなされて！　といふ聲方々に起るが、叱ッ叱ッと制する聲に壓せられて再び靜かになる）

太子　（聲を勵まして）わしはお前たちの意に逆らうて此の決心を翻すことを決して恐れない。何故なれば、その決心こそお前たちに對する私の愛の印だから。わしは本當にお前達を愛してゐる。わしはかういつて何者の前にも僞はつてゐるとは思へない。これまでもわしの器量の及ぶ限り愛して來たつもりでゐる。これから後も永久にわしの愛の渝ることはない。お前達はそれを信じてくれるであらうか――

（「信じます、信じます」と與言した、おろ／＼聲で叫ぶものがある。「太子殿下」とだけ云つて涙ぐんでゐるものもゐる。方々から歔欷の聲が起る）

太子　（涙ぐみ）皆信じてゐてくれるね　皆よく聞いてくれ。わしはそのやうに心からお前達を愛してはゐるが、幾ら一生懸命に愛しても、本當にお前達を助ける力がない。どうしたら助け

ることが出來るかといふ知慧がない。わしが行かなくてはならないのは畢竟そのためだ。――

（群衆動搖し、布施は？　布施は？　といふ聲方々に起る）

太子　お前たちはあの布施のことをそれ程にいふのか。あの平凡な、下手な、効果の乏しい贈物を！　だがせめてあれがわしのお前達に與へ得る最大の贈物だつたのだ。それがわしの器量の限りを露骨に示してあまりある。わしの力の足りなさを！　またあれだけの布施でそれ程に喜ぶお前達がわしは氣の毒でならないのだ。御覽、わしがどれ程布施をしてもお前達の間に乏しいもの、飢ゑるものは無くならないではないか。布施の度毎に集る人々は殖えるばかりではないか。王室の寶藏がいくら豐かに見えても、國庫を空しくして布施しても、それを以て人民の苦艱を救はうとするのは、恰も水盤を覆して恒河の砂を潤ほさうとするやうなものだ。假令それが出來たにしても米穀、金帑、蓄什の類を以て人間の性命の苦患を醫やすことは絕對に出來ない。若しそれで幸福になれるものなら、それ等に事缺かぬ此のわしは幸福でなければならない筈だ。だがわしに果して幸福であらうか？　わしは心の内に深い〳〵不

幸を感じてゐる。わしが宮殿や、父母や、人民と別れて山へ行くのも實にその不幸に堪へ切れなくなつたからだ。わしは自分が生を享けてゐる此の法界が調和あるものであることを感じてゐなくては幸福であることは出來ない。しかし此のまゝでは世界は生あるものが互に鬩ぎ合ふ鬪場としか見えない。でなければ空しい墓場だ。私達は生を悅ぶ。しかし乍ら私達はいつまでも生きられるのか？　あゝ私たちは死ぬのだ！　これは實に／＼恐ろしい。嚴肅な事實だ。若し私達がいつまでも生きられる道が此の法界の何處かに無いならば、私たちが生を享けたといふことは實に恐るべき禍である。わしはその道が乾度なければならないと信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。私達は愛に生きる。若し愛がなかつたら私達は恐らく生きたいとは願はないだらう。だが愛するものゝ不幸を助け攝ることが出來るのか？　いや、それよりも淋しいのは愛するものと別れなくてはならないことだ。これは實に云ひやうのない惡い事實だ。若し相愛するものが永久の別離から免れる道が此の法界の何處かに無いならば、人間に愛のあることは實に恐るべき禍ひだ。わしはその道が必ずなければならぬ

と信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。實にその道を求めに行くのだ。若し私達が永久に愛するものと共に生きることが出來るならば、他のすべてのものが缺けてゐても猶且つ幸福であり得る。がその事が許されないならば、假令他の凡てのものが備はつても決して幸福であることは出來ない。がその一番大切な、無くてはならぬものが、私達には缺けてゐるのだ！　あゝ生きるものが必ず滅び、會ふものが定めて離れるこの永久の、人類に課せられた運命に打ち克つ時にのみ初めて人間は救はれるのだ。本當に幸福になれるのだ。此の難題を解決しないで、宮城が何であらう。王冠が何であらう。あゝ、わしは行かねばならない――

（群衆の聲が方々から起る。「葉波國は滅びます」と叫ぶものがある）

太子　（巖のやうに）葉波國は滅びるであらう。わしは永久に滅びない國を求めに行くのだ。

（呻吟の聲が群衆の中に充ちる。或る者は地に倒れ、或るものは流涕し、或るものは慟哭し、或るものは手を天に伸ばして祈つてゐる。「人民は死にます」と叫ぶものがある）

太子　人間は皆死ぬのだ。人間は皆死ぬのだ。わしは永久に死なゝい命を求めに行くのだ。

（「お止りなされて！」と云ふ聲が天地に充ちる）

太子　わしの此の決心は、須彌山にかけて搖らぐことはない。わしが止まるならばお前達も共に滅ぶのだ。わしが行くならばお前達も共に救ふのだ。決してわしを止めやうとはすな――

（群衆は、自づと垣をつくつて太子の行く道を塞いでしまう）

太子　（大音聲にて）皆よく聞け。今のわしの行く道を遮ぎるものは恐ろしい〳〵ことをしてゐるのだぞ。天の意志に適はないことをしてゐるのだ。諸天も鼓を鳴らし讃め給ふわしの今日の旅をお前達も祝して勇ましく送つてくれ。

（群衆は、堵列して、動かうとしない）

太子　（嘆息して）お前達は遂に理解してくれないのか。此の一番大切な、一番普遍な、何人にでもその心の奥の理性の耳に聽きさへすれば、必ず解らなければならない眞理を受け容れることが出來ないのか。わしが行くのはお前達に取つて益なのだ。人類にとつて益なのだ。お前

達が理解しないのを見ても、わしは益々わしが行かなければならない使命を感じる。あゝ天よ、彼等の心の耳をお啓き下さい！

寡婦　（此の時まで跪いて、始終注意深い耳を傾けてゐたが、突然立ち上つて）太子様、おいで下さい、私はもうお止め申しは致しませぬ。あゝ、尊い〳〵太子様、私にはわかりました。あなたのおつしやることは私に、此の何も知らないはしためにはつきりと解りました。あなたの求めにいらつしやるものは本當に私の要るものです。私の欲しいものです。私にもがいつまでも生きられるため、愛するものと一緒にいつまでも生きられるためにはどうすればいゝかといふことを學びにいらつしやるのでございますね。そしてそれを私たちに教へて下さるのでございますね。三年前私の主人がなくなりました時に私はそれをどんなに求めたでせう。あゝそれさへ私に解つてゐるのだつたら！　私はそれは出來ないものとあきらめてゐました。いつの間にかそれを求める氣をなくしてゐました。それは私が心の底では一番欲しがつてゐるものでございますのに。あゝしかしあなたの今の御言葉でやつぱりさうかと思ひました。

あの時私が馬鹿氣たことを考へたのではなく、あなた樣のやうな尊い方でもやはり同じ事なのでございました。あゝあなた樣は何てお優しく、お勇ましく、そして私たちにお近い方でございませう。私はやがて此の坊やとも別れなければならない時が來る。此れ程お慕ひ申し上げてゐるあなた樣とお別れしなくてはならない時が來る。それは屹度來る。その時どんなに苦しいでせう。今日お別れするのはどんなに淋しくても、またお目にかゝれる望みがございます。あなた樣をたゞ一圖にお止め申さうと思つたのは私の間違でございました。勇ましくお出でなされて下さいませ。あゝ太子樣、しかしきつと〳〵また歸つて來て下さるのでございますね。

太子　あゝ、屹度歸つて來るぞ。その時はそなたの本當に求めるものをあげることが出來る。そなたの亡くなられた主人と、も一度逢へる道を敎へてあげることも出來るのだぞ。（群衆に向いて）人々よ。お前たちは此の女の言葉を何と聞いたか。此の小さき者の言つたことはわしの心に適ふた。お前たちもいさぎよく送つてくれ。わしが今度歸つて來る時には、これまでし

た布施が塵埃と見える程盛大な布施をするぞ。此の華波國が粟散の邊地であつたかと思はれる程光榮ある國の王として歸り、そしてお前達をその國の民としての福祉に與らせるぞ！其の國土と其の人民との壽命は無量無邊であつて、阿僧祇劫に到るも盡きないであらう。

（群衆は猶ほ口々に何か云ひ合ひつゝ、堵列して道を開かない）

太子　あゝ。わしは行く。徒らに別れを惜んでゐる時ではない。一刻遲くなれば、その一刻の間に人類の受ける害悪は測り知れない程だ。わしは旅を急がなくてはならない。（王妃の側に行き、跪きて）母上よ。私はこれにてお暇申します。（高まつて來る感動を抑へやうと努めつゝ）今日まで母上がおかけ下さつたありあまる程の恩愛は私の胸の底に深く〱沁み込んで居ります。淸い〱感謝で一杯です。私はあなたを思ふ毎に一生感謝といふことを忘れることはございますまい。そしてその度毎に道に勵む心を燃え立たせられるでございませう。あなたの名によつて天地をはぐゝむ「母」なる愛を憶念するでございませう。今日までお心をお傷め申上げた事の多かつたのをお許し下さい。私は今日の旅が眞實の報恩に適ふ道であることを

信じます。それを信じます故に勇んで參ります。何卒お體をおいとひ下さい。私が成道して歸るのを待つてゐて下さい。（涙を一杯眼に溜めて）若し私が歸りますまでに――

王妃　（涙を抑へ乍ら）若しそなたが歸るまでにわたしが死ぬやうなことがあつても、須太拏や、そのために決して志を挫いてはなりませんぞ。それは却つて私の心に適ひませんぞ。今いさぎよくそなたを送る以上私はそれを覺悟してゐますのじや。その時は私をそなたの母らしく死なしておくれ。假令葉波國がいかなる危難に逢はうとも、そなたは成道するまで歸つてはなりませんぞ。若し落城の知らせを山で聞いたならば、私がどんなに王妃らしい死に就いたかを信じておくれ。私の罪の多い魂がどんなに恐ろしい地獄に墮ちやうとも、そなたが必ず救ひ攝つて下さることを信じてゐますから。

太子　（母を拜して）尊き母上よ。あなたの強い／＼御言葉は今の私をどんなに勵ましてくれたでせう。今あなたは何といふ美しく、そして神々しく見えるでせう！　私は今程あなたのお顏の輝いたのを見たことはありませんでした。あなたは星のやうです。あゝ。私はあなたを讃

仰します。あなたはこれまで一つの冠に充分價して來られましたが、今やまたも一つのもつと高貴な、天的な冠にふさはしくなられました。「法母」の冠があなたの頭に載せらるべきです。今より後萬代までもあなたの御名は人類の子々孫々にほめ傳へられるでございませう。

王妃　（涙ぐみて）あゝ、私は今選ばれた母の悲しみと誇りとを同時に感じます。高い〳〵絶頂と深い〳〵淵とを同時に感じます。私は昇天するやうな氣がする。けれどまた死ぬやうな氣がする。諸天よ、私をお讃め下さい。あゝけれど私をお憐れみ下さいまし。私が燈盞へ注いだ油がどんなものか見て下さいまし。私の獨兒、私の誇り、私のいのちを――（自分を制して）惠み深き天よ。（一心に祈る）願はくば此の小さき母を憐れみ給ふて、我子を守りてつゝがなからしめ、彼の念願を祝して道を成ぜしめ給へ。

太子　（默禱す）

（間）

太子　（決然として）ではお別れ申しまする。（馬車の方に行きかける）

王妃　あゝ。待つておくれ。須太拏や。――も一度抱かせて――
太子　（王妃の腕に身を投げる）
王妃　（太子を抱きしめて）氣をつけておくれよ。からだを大切にして――
太子　母上にも、おいこひ遊ばされて――
（間）
太子　（靜かに母より離れ、一同に一揖して）ではお別れしますぞ。
廷臣　御健勝に渡らせられまするやう祈り奉ります。
女官　御念願の一日も早く滿たされまするやう念じまする。
夫人　再び御車を迎へまつる日を――それのみ待つて居ります。
乳母　（沁々と太子の顏を眺め）お氣をつけ遊ばして――お體を大切に遊ばして――（泣く）
（一同恭しく頭を下げる）
太子　（馬車に乘り、人民に向つて一揖しながら）わしは行くぞ。お前たちは互ひに愛し、赦し、和ら

ぎ合つて暮らしてくれ。お前たちは聽てわしが權威あるものとなつて法輪を轉じつゝ歸つて來るのを迎へるであらう。（馭者に）行け。

（馭者車を進めんとす。群衆は口々に叫びつゝ馬車の前に堵列して道を塞ぐ。馭者ためらふ）

太子　（火の如く）行け　蹂み躙つて行け。今わしの車を阻むものは永劫に呪はれるであらう。

（馭者馬に鞭打つ。馬車群衆の中に衝き進む。群衆思はず道を開く。此の瞬間に寡婦は己れの衣を脫ぎて馬車の前の道に布く。群衆皆これに倣ふて衣を脫ぎて道に布く）

寡婦　（涙と共に聲を振りしぼつて叫ぶ）太子殿下萬歲。

（群衆これに和し、一齊に太子殿下萬歲を叫ぶ）

太子　（車上より廷臣を顧みて）東宮の寶庫を開け。すべてわしに屬する財帛を一物も殘さず、人民に施せ。何者にも拒むな。わしがする最後の布施だ。

（太子殿下萬歲の聲天地に充ちる。笳の音。馬車肅々として進む。群衆は口々に或は萬歲を叫び、或は歔欷しつゝ馬車の後を追うて退場す。急に幕となる）

（間）

王妃　（倒れんとしてわづかに女官の腕に支へられ乍ら）おゝ諸天よ。お守り下さい。小さき母をお憐れみ下さい。今私から失はれたものが私にとつて何であるか、見そなはし給ふでございませう。わたくしがさゝげた最貴最重の寶にかけてあぐみ[illegible]さ[illegible]天よ。願はくば私が、今は私にとつて望ましいものとなつた永き眠りに就きますまで、「法母」としての誇りを支へることが出來ますやうお守り下さい。（女官に扶けられて退場す。）

（一同妃に從ふて肅然として退場す。一瞬間靜寂に歸し、濕波王侍從をしたがへて登場）

濕波王　おゝ須太拏よ。此の父もそなたを勇ましく送り[illegible]すぞ、そなたは誠に王の胤であつた。それをはづかしめなかつた。いや／＼そなたはもつと高い天の胤であつたわい。あゝ葉波國はそなたにとつてあまりに小さい。そなたは法の國を嗣がねばならない。わが氏はそなたによつて永久にはまれあるものとなるであらう。（間。急に意氣沮喪して）あゝわしの幸福は去つた。今より後葉波國の政治はわしの負ひ目となるであらう。

侍從　（暗然として）陛下の御惱みを深く拜察申し上げまする。

（間。突然殷々として鐘聲起る）

侍從　陛下！　警鐘でございます。

使者　（騎馬にて急ぎ登場、馬より飛び下り）申上げまする、鳩留國の軍勢が須大延を眞先に押し立てゝ國境に侵入致しました。

濕波王　（愕然として青ざめる。やがて決心せる如く勇氣凛然として）直ちに將軍に余の命を傳へよ。全陸軍に出動の準備をなせ。今日正午に余が親ら閱兵するであらう。

使者　かしこまりました。（退場す）

濕波王　戰ひは初まつた。わしは世嗣を失つたが、わしは猶此の葉波國をわが先祖代々の靈に負ふてゐる。わしは祖國を守らなくてはならない。わしは最後までわしの義務を果たさなくてはならない。わしに生命がある限り葉波國は神聖で且つ自由であらう。（侍從をしたがへて退場す）

（警鐘きこゆ〳〵はげしくなる）

（幕）

第二幕

第一場

菩提樹の並木に圍まれたる泉の邊。岸邊には曼陀羅華、素馨、百合、蘭等の種々の夏草青々と茂り、泉の中には[illegible]、蓮、睡蓮等様々の水草の花の中に一際美しく紅、白、黄等の蓮の華が咲いてゐる。並木を透して、遙かに檀特山及びその山脈を望む。道は泉の傍を過ぎ、遠く檀特山の方に向つてつゞいてゐる。空は晴れ渡り、眞夏の日盛りの太陽は赫々として照つてゐる。三人の波羅門泉の傍の草の上にだらしなく寢そべつてゐる。

波羅門甲　（衣を脱して逞しき肌を表はしながら）馬鹿に暑いじやねえか。これぢや遣り切れねえな。

波羅門乙　無遠慮に照りつけやがるね。（裳を捲くりあげて太股のあたりまで泉に浸りながら）涼しいぞ。冷めたい水がチョロ〳〵と跨のあたりを擽つて乙な氣持だ。

波羅門甲　泥足を突込んで水を濁すのは止せ。今俺が飲まうと思つてゐるのだに。（水上の方の泉から瓶に掬みぐつと飲み干して）あゝ、うめえ。恐ろしく渇きやがる。

波羅門乙　（岸に上つて）幾ら波羅門が死太くても、かう燒き付けられちや參つてしまう。（樹蔭に晝寢をしてゐる波羅門丙の方を見ながら）此奴氣持好ささうに眠り込んでゐやがらあ。

波羅門甲　どうだ、隨分醜い面付をしてやがるじやあねえか。ひどく平べたい小鼻のあたりに寢汗までたら／＼搔きやあがつてさ。

波羅門乙　（何か感じたやうに波羅門丙の寢顏を眺め）つまり波羅門の十二醜の中に數へてある鼻正扁綿と云ふのはあれだらう。

波羅門甲　するこ汝の額の骨がいやらしく膨れて突き出てゐるのは大腹凸髖こいふのに當るわけだらうな。

波羅門乙　（首肯きしながら）なる程な　汝がひよろ／＼とひん曲つた足付きで歩くのが脚復繚戻つて云ふ奴だらう。

波羅門甲　（思ひ出したやうに）つまりお互に俺たちはあまり美しくは生みつけられなかつたのさ。云ひ換へて見れば善い行ひが出來ねえやうに生みつけられたのさ。

波羅門乙　それはさうさ。幾ら善い行ひをしたつて面が醜いからと云つて嫌はれるのじや始まらねえからな。

波羅門甲　左樣さ、そんなものはあの葉波國の布施太子にでも任かせて置けばいゝのだ。

波羅門乙　だが彼奴は奇特な奴だな。あんなに惜し氣もなく金や寶をうぢ撒くなんて一寸俺たちには飲み込めねえ話だ。

波羅門甲　なあに金に困らねえものゝやる贅澤な遊びさ。あんな眞似の出來るのも、金や寶が塵埃(あくた)のやうに見える程不自由したことのねえ結構な身分だからさ。

波羅門乙　だが彼奴は今度宮城や位を捨て、檀特山へ行つてしまふと云ふじやねえか。

波羅門甲　それだて。彼奴の醉狂が何處まで嵩じやうと彼奴の勝手だが、お影で俺たちの折角の寶藏が無(ぶ)になるのには大頭痛たて。何しろ俺たちは彼奴から是まで金銀や牛馬や穀物や、しこたま絞とつてゐたものだからな。

波羅門乙　魁が今朝事實を探りに葉波國の方へ行つたのだが吉い報らせを持つて歸れやいゝが。

波羅門丙　（眠りながら突然に）　もう放せ。阿魔。そんなに云ふならまた來てやらあ。

波羅門甲　（噴き出して）　此奴眞晝中にいゝ夢を見てゐやがるぜ。いゝ加減にして起きろ。（搖り起さうさする）

波羅門乙　ほつて置いてやれ。此奴が女の子に可愛がられるの　夢のなかより外ねえんだから。

波羅　丙　（突然に立ち上る）　可愛い奴め。（眼が醒めて、きまり惡さうに、毛だらけの脛にとまつた蚊を平手で打ち殺し）　あゝ痒い。

波羅門甲　（笑ひ乍ら）　おい／＼お安くねえぜ。何だか面白さうな夢を見て居たやうだつたじやねえか。

波羅門乙　折角の佳境を眼が醒めて合憎だつたね。

波羅門丙　（苦笑して）　冗談じやねえぜ。（溜息を吐いて）　恐ろしく蒸しあがるね。あゝ。やり切れねえ。眼を醒ますとすぐ地獄だ。（二人苦々しく沈默す。遙か向ふの砂漠の道を象や駱駝を連れた隊商の列が通るのが見える）

波羅門丙　（何と感じたやうに）ねえ。一體俺たちはどうして生まれて來たのだらうね。

波羅門甲　それあおやぢとお袋とがこしらへたのだらうじやねえか。（叫ぶ）おや鰻だあの泉のそばの曼珠沙華の叢の中に這ひ込みやがつた。

波羅門丙　（考へ乍ら）變だな、俺が氣がついた時には俺はもう此の世に生まれてゐたのだ。どうしてさうなつてゐるのだか自分にも解らねえ。そしてまはりの皆がして居たから、俺も毎日此の砂漠で乞食と泥棒とをしてゐるのだ。

波羅門甲　（欠伸をしながら）止せ。俺は可愛い女のおのろけでもしやべる時の汝はすきだが、そんな悟りめいた口をきく時にはちつとも好きじやねえや。

波羅門乙　おや、魁が歸つて來たぜ。向ふの坂を自暴に馬を驅けさせて。

波羅門甲　ふむ何處かでまた馬をせしめて來やがつたね。

波羅門乙　彼奴は強欲な、高慢ちきな野郎だが何しろ稼ぐことにかけちや凄い腕だね。

波羅門丙　俺は彼奴なぞの下に働きたかあねえんだが、彼奴に喰つ付いてさへ居りや何とか彼と

か儲け口を見付けてくれるもんだからね。

波羅門甲　それやお前なんかより、この道段違ひに役者が上だあね。それに實のところ彼奴のふ返しがこはいからね。

波羅門丁　（馬に乘つて急ぎ登場。馬より飛び下りて）何だ。汝たちはまた泉の側に座り込んでなまけてばかりゐやがつて。俺は汗みどろになつて一と働きして來たのに。

波羅門乙　（泉に浸した布切れを絞りながら）何しろ汗を拭はなくつちやあ。

波羅門甲　（追從笑ひして）お歸りなさいお魁隨分暑かつたでせう。

波羅門丙　まあ冷たい水を一杯飮むことだ。（瓶をさゝげる）

波羅門丁　拭け。（乙に肌を拭はせ乍ら瓶から水を飮む）

波羅門甲　（馬を幹につなぎながら傍白）ふむ。歸るとからがみ〳〵怒鳴りやがつて。

波羅門乙　（恐る〳〵）お魁。布施太子の方の首尾はどうでした。

波羅門丁　（不機嫌に）駄目だ。彼奴とう〳〵底拔けの醉狂になつてしまやあがつた。東宮の寶庫

は俺が行つた時にはもうすつかり空になつてしまつてゐた。彼奴が門出に人民にみな撒き散らしてしまやあがつた。

波羅門丙　そいつあ惜しいことをしたね。みなで早く行けばよかつた。

波羅門甲　癪だね。そして太子はどうしたい。

波羅門丁　太子は妃と二人の王子を連れて馬車で檀特山へ向けて出發した。

波羅門乙　じやあいよ〳〵駄目なんだね。

波羅門丁　なに。まだ絞れるだけは絞らなくちやあ。俺は貧乏百姓の風をして太子の馭者をねだりとつてやつた。田地が荒れて耕作するものがゐねえからと云つて。

波羅門甲　よく手放したもんだね。

波羅門丁　なあに彼奴は否とはいへねえわけがあるんだ。其處をチャンと捕まへてゐるんだ。俺は早速その馭者を奴隷にたゝき賣つて、馬を買つて、乘つて驅けつけて來た。

波羅門甲　凄いもんだね。

波羅門丁　あんな不細工な馭者より馬の方が調法だからな。

波羅門丙　一體太子は後でどうする氣だらう。

波羅門丁　自分で馭すさ。

波羅門丙　いやはや。

波羅門丁　まだ〱絞れるだけは絞らなくちやあ。

波羅門丙　まだかい。

波羅門丁　何だ。欲のない奴だね。まだ馬がある車がある。太子と妃と王子と王女との寶衣もあるぢやねえか。

波羅門乙　へえ。

波羅門丁　汝たちはもつと〱腕を鍛へなくちやあ駄目だ。

波羅門甲　（感心して）なる程な。だがどうしてねだるのだ。彼奴が手放すか知ら。檀特山まで乗物も着物もなくてどうして行くだらう。

波羅門丁　（冷笑して）ひどく思ひ遣りがいゝね。裸で跣足で行くさ。

波羅門丙　あゝ。太子が自分で馭して向うの坂をやつて來たぜ。

波羅門丁　叱ッ。彼、陰について來い。彼處でねだる手を仕込んでやるから。

（丁まさきに立ちて退場。甲。乙。丙。馬をつれて後より退場。太子自ら妃、王子、王女を載せたる馬車を馭して登場）

妃　（馬車の上より）あゝ涼しさうな泉だこと。

王女　綺麗な水がふつ／＼と噴き出してるわ。

王子　水草の花が澤山咲いてるよ。（母の袖を引つぱり乍ら）下りて見たいなあ。

妃　（太子に）殿下。御覽遊ばせ。美しい泉ではございませんか。

太子　（馬車を緩め）涼しさうな並木だね。

妃　あの深々とした菩提樹の陰で少し休んで參らうではございませんか。

太子　いや休まないで行かう。俺は心がせかれるから。御覽。向ふに檀特山が見えてゐる。あの

山を見ると、俺はじつとしてゐられない氣がする。

妃　でもあまり暑うございますから。私たちはあんなに燒けるやうな砂漠を旅して參りましたのでございますもの。それに馭者がなくなつてからはあなたは馴れないお手で御自分で馭していらつしやらなければならなくなつたので、大變お疲れ遊ばしてお見えになりますわ。

太子　いや。俺は少しも疲れを感じない。俺は念願で燃え切つてゐるから。

妃　でもお顏色は蒼く、お額には玉のやうなお汗が滲んでゐますわ。（無意識的に小さな扇で太子を煽ぎ乍ら）それに子供たちも大變疲れてゐますから。

王女　（嘆願するやうに）あたしくたびれちやつたわ。

王子　咽喉が乾いて、乾いて――

太子　（一瞬間默想の後）では少し休んで行かう。

（馬車駐る。太子先きに下りて妃を扶け下ろす。王子、王女は飛んで下り嬉々とし先きに立つて泉の側に走り寄る）

王女　（泉の縁の綠草の上に足を投げだして）あゝ。いゝ氣持だわ。
王子　（しやがんで泉の中に手を突つ込み）冷めたい。冷めたい。
（太子と妃は大きな菩提樹の陰の下草の上に座す。二人とも自づと沈默す）
妃　（越し方をふりさけ見て）山や川を越えて乘つて參りましたのね。もう餘程遠く故鄕を離れたのでございませうか。
太子　もう二百里も離れたらう。山まではもう三日の旅程だ。
王子　（手にて水を掬んで飮み乍ら）冷めたくておいしいよ。姉樣いらつしやい。
王女　（木の葉で盃をこしらへて水を掬つて飮み乍ら）おいしいね。母樣も召しあがらない？
妃　母樣もいたゞきますよ。ころぶと危ぶないよ。
王女　（小さな履をぬぎ、裳をからげて泉の中につかりながら）大丈夫ですわ。淺いのだもの。ほんの踝飾りの珠がやつとかくれる位なのだから。
王子　姉樣あれとつて頂戴。あの水の上に浮いてる紅い蓮の花を――

王女　あいよ。あたしされるかしら——試つて見やう。

妃　（淋しさうに）お城のお庭で遊んでゐるのと同じ氣持なのでございますね。

太子　（元氣に充ちて）無邪氣なものだ。これからは山で色々な獸や鳥などゝ一緒に遊ぶだらう。

妃　まあ、危ぶないではございませぬか。

太子　いや。あの山では獸も鳥も少しも人間を傷けないさうだ。子供と動物と位ふさはしい友達はないと俺は思ふ。（微笑しながら）俺にはもう見える樣な氣がする。耶利が獅子の脊に乘つて威張つてゐるところや、闍拏延が孔雀の尾をつかまへていたづらをしてゐる樣子などが——（夢見るやうに）子供たちは無心のまゝで毎日鳥獸と嬉戲して遊び、樂しむだらう。

妃　けれど宮城でこれまで毎日大膳所から供奉されてゐたおいしい羹や、膾や、滋味の豐かな肉漿やまた、子供たちのよろこぶ饅頭などは無いのでございませう。

太子　いや。あの山には樹木は繁茂して折り傷けるものなく、枝にはさまざまの甘果が實り、樹かげには美泉、清池があつて、山中のものは人間も、鳥、獸もその甘果を啖ひ、水漿を飲ん

で、飢ゑ渇くことを知らないのだ。私たちは一日も早くその聖地に行つて道を學びたいもの
だ。（波羅門甲、叢の陰より現はれ[illegible]として太子の前に近づく）

波羅門甲　太子殿下に御挨拶申上げます。

太子　何者だ、此の遠地にわしの身分を知つてゐる汝は？

波羅門甲　私は何でもない夫でございります。あなた樣のことを知らぬものがございませうか。葉波
國の須太拏太子樣と申しますれば、私たちには天道樣と申すのも同じことでございます。

太子　そのやうな畏ろしいことは云はぬがいゝ。

波羅門甲　（跪いて太子を拜しながら）世にも尊い太子樣。あなたは今日まで宮城のあらゆる財寶を
惜しげもなく、貧乏人にお施し遊ばされました。皆は喜んで涙をこぼし、あなた樣を布施太
子樣とお呼び申上げて居ります。あなた樣のお慈悲さには限りがございません。

太子　いや、私は俺に不用なものを、それを入用な人々に頒つたゞけだ。

波羅門甲　左樣でございます。私共にとつて尊い寶物もあなた樣にとつては塵や埃も同然でござ

います。あなた様の無欲なお心は本當にあの雪山に積む雪よりも淸うございます。

妃　（氣味惡るさうに）そなたは太子樣をたゞ讃仰するためにお出でたのだらうね。

波羅門甲　（追從笑ひして）これはお妃樣でいらつしやいますか。それはもう讃めたゝへてお禮を申上げたさに參つたのでございます。

妃　（太子に小聲にて傍白）御用心遊ばせ。また今朝の農夫のやうなのかもわかりませんから。

波羅門甲　・慈悲深い太子樣、人の話ではあなた樣は一物でも所有してゐられます限りは必ずそれを布施することを天にお誓ひなされたと申しますが。あれは大分本當では無いのでございませうな。ものには限りといふものがございまして——

太子　いや。俺が帝釋天にその誓言を立てたことは本當だ。

波羅門甲　え？　本當でございますか。それは實に驚き入ります。あなたは愈々たゞの人間ではいらつしやいません。私はかうしてお言葉を交はしてゐるのも、もつたいない氣が致します。

妃　（傍白）此のおべつか使ひをお斥け遊ばせ。

波羅門甲　實は私は貧乏な人夫でございまして、人樣の荷物を荷車で運びまして、その賃金で渡世致して居るのでございます。何しろ御覧の通り、あまり[illegible]體ではございませんのに、人と競爭することの嫌な弱氣なたちに來てゐますのでそれに、この日の細い烟もたてかねるやうな次第でございます、何しろ女房が長わづらひで、子供が澤山でそれが[illegible]厄介でございますので、それに――

太子　願ひの筋を眞直に申せ。

波羅門甲　はい。實は馬が一頭欲しいのでございますが、車を曳く馬をな。さうすれば荷物を三倍以上も積むことができますので、そして體も無理をしないですみますのでな。

妃　此の馬はとてもあげるわけには行きませんよ。私たちの車を曳くたゞ一頭の馬なのだから。

太子　俺は決して吝んで、あげないのではないのだが、私達はこれからあの遠い檀特山まで行かなくてはならないので馬がなくては困るのだが――

波羅門甲　なる程な。私たち下々のものは重い荷車を曳いて歩いてゐますが、上つ方はお徒歩で

は行けますまいて。

妃　私たちがあの遠くの山まで焼砂の道を車を曳いて行けるものですか。考へて御覧。

波羅門甲　御尤で御座います。たゞし私共は遊山に参ります時でも、子供らを荷車に載せて、私が曳き、女房が後から押して参りますが、それは無論私共下賤のもののすることでございます。幾ら大勇猛心を起して修道にいらつしやるのだからと云つて高貴の方は――

太子　馬を持つて行け。

波羅門甲　（跪いて太子を拝し）え？　本當でございますか。その馬を私共に下さるのでございますか。

太子　（無言のまゝ肯く）

波羅門甲　（ピヨコ／＼頭を下げ乍ら）あり難う御座います。ありがたう御座います。御影で今日から樂になれます。女房や餓鬼共も助かります。

妃　（心配さうに）あなた、その馬をやつてしまつてどうして山まで参りますおつもりでございま

すか。

太子　俺が車を曳いて行かう。

妃　そのやうなことがあなたにお出來になるものでございますか。馴れないお身で！　今日御自分で馭していらつしやつたのだつて、隨分御無理だつたのではございませんか。

太子　いや、俺は施しを乞ふものに拒むわけには行かないのだ。

妃　ではございませうが。

波羅門甲　太子殿下に榮あれ（わざと聞こえるやうに獨白）流石に偉いものだ。これでこそ布施太子の名に乖かないといふものだ。女が男より吝臭いのは下々のものも上つ方も同じことゝ見えるわい。

妃　何ですつて。

波羅門甲　（馬の手綱を樹から解き乍ら）いやなにお妃樣、お美しい御婦人方は、其の上にまたお慈悲深くていらつしやいます時には、一層お美しくお見えになるものでございますて。

太子　馬を可愛がつてやれ。

波羅門甲　（馬を撫で乍ら）はい、はい。可愛いがりますよ。あゝ立派な馬だ。今日から俺が飼つてやるぞ。前の主人よりちつとばかり下作ではあるが、ずつと上手な馭し手だらうて。（手綱を曳つ張り乍ら）ウムついて來い。ついて來い。（馬が動かないのでピシヤリと鞭を當てゝ）歩めやがれ。畜生奴！（荒々しく、馬を引き立てゝ退場）

王女　馬は行つてしまうの。

王子　いやだなあ。あんなにひごく打つて。

妃　（淋しさうに）本當にこれからごうなさいますおつもりでございますか。

太子　お前と子供たちは車に乘れ。俺が自分で曳つぱるから。

妃　そんなことが出來ますものでございますか。

太子　いや。これしきの事が出來なくて、これから先の修業をごうするのだ。もう行かう。愚圖々々してはゐられない。

妃　私もこんな處に永く休んでゐたくは御座ゐませんわ。けれどこれからどうして、長い燒砂の道を行つたらいゝのでございませう。

太子　さあ、皆乘れ。今の人夫は天王帝釋が化成して俺の安逸になるのを戒めて下さつたのだ。

妃　だつてあなた――

太子　（嚴しく）お乘りなさい。出發だ！

（妃、王子と王女をつれて車に乘る。太子自ら轅の中に入り、力をこめて車を曳く）

妃　（車から飛び下りて）あゝもつたいない。私が後から押しますわ。（車を押す）

（車動く。太子と妃と汗を流し乍ら、まだ五、六間と曳かないうちに波羅門丙襤褸を纏ひ、老いたる人夫の裝ひして登場）

波羅門丙　（いきなり太子の前に跪きて）お願ひでございます。お願ひでございます。

太子　（車を止め）何者だ。

波羅門丙　お慈悲深い太子樣。私は貧乏な、年老つた人夫でございます。女房も子供もない賴りな

い獨りものでございます。私は先刻道で仲間の人夫から太子樣がこれに渡らせられるといふことを聞きまして、取るものも取り敢えず、やつて參りましたのでございます。あり難い太子樣のお顏を一度拜ませて頂きたいと存じまして。私は强欲な仲間たちがひまして、まだ一度も葉波國へ施しをお願ひにあがつた事はございませんので。私は他人の無心はなるべく聞いてやるが、自分の事は自分でやつて、他人に無心を云はないのが私の主義でございますので――

太子　願ひの筋は何事だ。

波羅門丙　これがでございます。太子樣。(めそ／＼泣き出して)私がこんなに貧乏致しましたのもその主義のためでございます。實は私は仲間の奴の係蹄にかゝつたのでございます。それ私を裏切つた奴はあなたから先刻あの立派な馬をねだり取つた人夫でございます。彼奴　實に憎い奴でございます。私は彼奴が貧乏してゐる時にこれまで幾度無心を聞いてやつたか知れません。私は年老つて貧乏になりましたが、それでも彼奴に無心に行きませんでした。する

と彼奴が親切さうに金をやらうと申しますので、私は初めて彼奴から借りることにしました。高い利息で僅かばかりの金を。處が運の惡い時には何處までも惡いので、私が長わづらひを致しまして、その利息が拂へなくなつたので、彼奴は私の渡世の只一つの運具である車を取り上げてしまひました。無論拂つた利息はもう疾くに元金の幾層倍になつてゐるのでございますが。

妃　（傍白）此のおしやべりの申すことはどうもあてにはならないやうで御ざいますよ。

波羅門丙　私をお憐れみ下さいまし。偉い太子樣。私は車が無くては渡世を致す事が出來ません。あの憎い奴は先刻私に道で太子樣から頂いた馬を見せびらかして、私からもぎ取つた車を曳かせて行きました。彼奴の馬小屋では雌馬が仔を三匹も生んだばかりでございますのに。私はくやしくて／＼死にたい氣が致します。私は生れて初めて人樣に無心を申しますのでございます。それはあなた樣のお優しいお心をよく存じ上げてゐるからでございます。

妃　此の車は迚もあげるわけには行きませんよ。

波羅門丙　（聞こえぬふりをして）私はその車でその日その日の渡世のたづきを得たいばかりでなく、あの憎い奴に、車を見せつけて、太子樣からかけていたゞいたみ惠みを誇りたいのでございます。

太子　俺はあげたいのだが、お前も見る通り、俺たちは二人の子供を此の車に載せてあの遠方い檀特山まで行かなければならないので、車が無くては困るのだが――

波羅門丙　（わざと聞きちがへて）はい〳〵。その、車が無くてはまことに困りますのでな。老いぼれて、荷物を擔ぐことは迚も出來ませんので――

妃　お前よく御覽よ。殿下が御自分で車をお曳きになつて、此の私が後押しをしてゐるのですよ。

太子　決して吝むのではないが、俺たちに無くてはならないものだから――

波羅門丙　（急　皮肉に笑ひながら）無くてならないものでございますつて。へゝゝゝ。世間の誰でもが、施しを求める者に拒むときにはいつでもさう申すものでございますて、どんな物持でも何一つなくてもすむものだと思つて貯へてゐるものはありませんからな。

妃　お前さう云ひだけれども私たちは今は物持なんかではありませんよ、私たちは一錢の金貨も、一枚の着替へも持たないで城を出たのだから。

波羅門丙　（ニヤ／＼微笑し乍ら）金貨や着替へがないのでございますつて。なる程な。落ちぶれた王妃は、景氣のいゝ匹婦よりも氣位が高いつて申すのは本當でございますな。

太子　（考へながら）俺と妃とは徒歩でも行けるが、二人の子供は車で無くては無理ではないかと思ふのだが——

妃　どうして子供達があの遠方まで歩いて行けるものでございますか。お城ではやつと園のなかを歩いたきりでございますもの。あの柔かい足はきつと石ころで傷いてしまいますわ。それに蒸々した燒砂の照り返しで氣息が塞つてしまふでせう。

波羅門丙　私達貧乏なものは男の子供は父親が脊負ひ、女の子供は母親が抱いてゞも、渡世のためには隨分遠方までも歩いて行くのは常のことでございまさあ。

妃　でもお前、少しは考へて見ておくれ。私達はちつとも歩くことには馴れてはゐないのですよ。

本當に私たちは此處まで旅して來るのでもどんなに苦しみを忍んで來たでせう。

波羅門丙　と申しますのはつゞまりそれ程までにあなた樣方がこれまで結構な目にばかり味はうてゐらつしたといふことになりませうなあ。

妃　まあ、何て意地惡な、思ひやりのない人だらうねえ、

波羅門丙　え！　思ひ遣りでございますつて。滅相な、それは豐かなものが、貧しいものに對して負うてゐる義務かと私は心得て居りますが。

妃　お前、幾ら貧しくても施しを乞ふのは權利ではありませんよ。それは豐かなものが自由意志でする惠みです　ましてお前の樣な物の乞ひ方はゆするのも同然です。

波羅門丙　（露骨に圖々しき態度を示して太子に）如何でございませう。その御車を頂戴することは出來ないものでございませうか。

太子　（妃と丙との會話の間始終默想してゐたが）車を持つて行け。

波羅門丙　（一寸拍子拔けのしたやうな顏をするが、やがて追從笑ひをし出して）有難うございます。あ

り難うございます。（妃の方を横目で見ながら、己れの有所權を確かめる樣に車體を色々と撫で廻し）どうも立派な車だ。（わざとらしく）流石に腹のさつぱりした太子樣だ。

妃　（淋しさうに傍白）彼んな奴に大事な車を遣つておしまひになるなんて。

波羅門丙　いや。私などは一番遣り甲斐のある人間でございませうて。若し一番正直で、一番感謝する人間が、一番遣り甲斐があるものと致しますればな。

太子　行け。

波羅門丙　はい〳〵參ります。（轅の中に入りて、車を曳き試み乍ら）あゝ。有難い。お影で早速あの强欲な、罰當り奴に此の車を見せびらかして、腹の癒えるまでしつぺい返しを喰はしてやられると云ふものだ。

太子　彼の男は赦してやるがいゝ。

波羅門丙　（無造作に）心得ました。（ぺら〳〵と）太子殿下のみ名によつて赦してやりませう。なに、私はたゞ此の車でその日〳〵の渡世が出來さへすれば、外に望みはないのでございます。

（大袈裟に跪きて、太子を拝して）布施太子殿下に榮えあれ。（立ち上り、重たさうに車を曳きて退場）

妃 （心配さうに）本當にこれからどう遊ばすおつもりでございますか。

太子 王子は俺が脊負つて行く。王女はお前手を曳いて行け。

妃 お言葉に乖くのではございませぬが、そのやうなことが出來るとは迚も思はれません。

太子 いや、試つて見やう。これしきの事が出來なくて是から先きをどうするのだ。凡そ此の世の一番貧しいものゝする事を俺等も負はなくてはならない。彼等が已でに耐へて來た事を俺等が耐へられないことはない筈だ。それを忌ひ避けてはいけない。それを忌ひ避けやうとするのは俺等がこれまで安樂に暮らして來た惰勢のためだ。

妃 お言葉を返すやうではございますが、私は是まで妃らしい華麗な生活に慣れては参りましたが、それは決して私が特別に安逸を好みましたと申す譯ではございませんわ。私はたゞ生れ乍らに與へられた幸福を享け、またあなたから妃として遇はれて、許されたものを素直に樂しんでゐたのに過ぎないと存じますわ。

太子　お前もさうだ、お前は決して贅澤ではなかつた。お前の着物は寧ろ質素な方であつた。お前の生活が多少でも贅澤であつたとすれば、それはどうしても位を辱めない莊嚴を保つための必要と、そしてお前の愛らしい上品な趣味のためであつた。たゞさういふ生活が他の無數の衆生の辛苦のために築かれてゐたのであつた。それが私達が無意識に積んでゐた業であつたのだ。それは恐ろしい事であつた。それに私の背いた頭上は出來る限りその償ひをしなくてはならない。そのためには貧しいものゝ、卑しけがらしい、布施の要求も拒まないで、受け容れ、また私たちには價へない勞苦をも辭してはならない。それは實に私たちの業の報ひなのだ。それを男らしく忍受することが諸天の心に適ふに相違ない。

妃　（素直に）御教へ下さいましたことは淺薄な私の心にも深く沁みました。私はあくまでも殿下にお願ひ申します、たゞ私たちの業のために幼いものに難儀を負はせなくてはならないのが、どんなにか苦しうございませう。

太子　あゝ妃よ。それは此の世界で恐ろしい事の中でも一番恐ろしいことの一つなのだ。親の業

が子に報ひるといふことは！　俺が城を捨てたのは葉波國の先祖代々の攻略と誅斂と榮華との業報を脊負うたのだ。我が子々孫々の業報を償ひたいためなのだ。

妃　（眼を閉ぢて、沈黙す）

（其の瞬間に並木の陰より、乞食の装ひせる波羅門丁盲者に變裝せる波羅門乙を杖にて導きつゝ現はれ、太子の前に跪く）

波羅門丁　御願ひで御座います。御願ひでございます。

太子　何者ぢや。

波羅門丁　盲目の父を連れた惨めな乞食でございます。お慈悲深い太子様、殿下の御恵みはヒマラヤの山よりも高く、ベンガルの海よりも深く、ありとあらゆる衆生に隈なく行き渡り、さながらガンジス河の水が両岸の畑を潤ほすやうでございます。

妃　（憑かれたる如く、太子に小聲にて）また阿諛使ひが出て参りました。今度はお相手に遊ばしますな。

波羅門丁　何卒お憐みをお垂れ下さいまし。困り切つてゐますので。此奴が因果な片輪なものでございますので。

波羅門乙（つくり聲にて）慘めな盲目でございます。死に損ひ奴　ございます。

波羅門丁（手をしぼりつゝ）お布施をお願ひ申します。

乙と丁（聲を揃へて）おめぐみを！　お施しを！

太子　俺はあげたいのだが、持つてゐた物は皆施してしまつて、もう何もあげるものがない。汝も見る通り、車も馬もなく檀特山まで子供を脊負つて徒歩で行かうと思つてゐた所だ。金も——食物さへも持つてはゐないのだ。

波羅門丁　へ、、、。失禮ながらまだ充分にお持合はせのやうに見受けますが。

妃　いゝえ。本當に何も持つてはゐませんよ。

波羅門丁　これはした・、お妃樣、御手の扇は大層立派なものでございますな。

妃（眉を顰め乍ら）お前此の扇が欲しいのならあげてもいゝよ。

波羅門丁　（直ぐ手を出して扇を受取り）　いや、ごうも有難うございます。（太子に）　その立派な寶衣を
　戴きたうございます。

太子　（一瞬間沈默の後寶衣を脱して與へる。腰部に纏へる薄き衣の外裸體となる）

妃　（驚いて）　何て酷い――

波羅門丁　冠を！　冠を！

太子　（決然として冠を脫じて與へんとす）

妃　殿下！

太子　いや、城を出た時から俺はもはや太子ではないのだ。

波羅門丁　（冠を受取つて）　ありがたうムい[illegible]　ございます。（妃に圖々しく）　寶衣を戴
　きたうございます。

妃　不作法者！

太子　妃よ。お與りなさい。今はすべての[illegible]の衣を脫ぐべき時が來たのだ。

妃　（一瞬間躊躇して後寳衣を脱して與へる。薄き肌衣一枚となる）

波羅門丁　（寳衣を受取るや否や　瓔珞を！

妃　（嚴しく）お控へ！

太子　（靜かに決然と）お與りなさい。

妃　殿下。こればかりは！　（涙ぐみて）あゝ殿下から選ばれた日の光榮の印でございます。

太子　おゝ、妃よ。潔くお與りなさい。その寳石の眩い瓔珞こそ、今のお前の頭を飾るにはあまりに光なきものになつたのだ！

妃　おゝ殿下！　（決然として、瓔珞を與ふ）

波羅門丁　ありがたうございます。ありがたうございます。生れてからこんな立派なものを手にしたことはございません。（裏を返し、表を返しして眺め乍ら）いや、どうも素敵なものだ。眼がチカ〱する程だ。

太子　行け。

波羅門丁　はい〳〵参ります。（貪慾な、鳶のやうな眼付でジロ〳〵王女の方を眺めてゐる）

妃　（不安を感じつゝ）お前はもう充ち足りたのだらうね。

波羅門丁　十二分でございますよ。お妃様。此の上頂いては罰が當りまさあ。私はな。處であの困果な盲目奴はまだ何も戴いてはゐませんですが。なあ。おやぢさん。

波羅門乙　（おろ〳〵聲にて）お施しを！　おめぐみを！

波羅門丁　お前の洞穴のやうな眼玉にやあ何も映るまいが、王子様と王女様はそれあ立派な寶衣をめしていらつしやるのだぜ。

波羅門乙　寶衣を下され。寶衣を下され。

妃　（涙ぐみ）お前たちは幼いものゝまで剝がうとするのかい。

波羅門丁　此の死に損ひ奴は强欲でございますな。

太子　（決然として）王子と王女の寶衣をお與り。

（妃、溜息を吐き乍ら、王子と王女の寶衣を脫がして與へる。王子と王女は裸體となる）

波羅門丁　（着衣を乙に渡して）これをお前に與らうとよ。果報者奴が。

波羅門乙　（髭だらけの顔を着衣にこすりつけて）肌觸りのいゝ、やはらかものだ。おまけに何ていゝ薫りだらう。

波羅門丁　（感心したやうに王子と王女を眺め）何て綺麗な頸輪と踝飾りだらうなあ。

波羅門乙　（顔を大地にこすりつけて）頸輪を下され。踝飾りを下され。

妃　何てしつこい！

太子　與つてしまへ。

妃　（頸輪と踝飾りを解いて與へる）

波羅門丁　（頸輪と踝飾りを乙に渡し）今日はお前は大當りだね。お前が盲目で却つて結構かも知れないぞ。こんな眩しい寶石を見れや、眼がまうてしまうからな。

波羅門乙　やれ／＼。有難いこつた。長生きはして見るものだ。

太子　行け、

波羅門丁　はい〳〵只今。（眼敏く太子をヂロ〳〵と一瞥して）へゝゝゝ。思ひ切りの悪い申出ではございますが、お別れ際のお景物に一つ序でに戴きたいもので。なに。その小函と寶華とをな。

太子　いや。これは與（や）るわけに行かない。これは俺を深く愛するものが、はなむけに、自分の愛の證（あかし）にくれたのだから。外の俺の所有物とはちがふのだ。

波羅門丁　なる程な。私が勘違ひをしてゐました。（獨白の如く）それはさうだらう。どんな偉い人にでも程度といふものがあるのは當然だからな。幾ら一生懸命の場合、天に立てた誓ひとは云つても例外は一つ位はあることは許さなくてはならないからな。

太子　持つて行け。（寶華と眞珠の小函を丁に渡す）

波羅門丁　え！　頂きまして よろしうございますか。これは〳〵どうも。（華と函とを懐ろに収め乍ら）どうも有難うございます（猶もジロ〳〵と油断なく一行の身邊を目察し乍ら）勿體ないことでございます。（乙の耳元に囁く）もう何も眼ぼしいものはねえぜ。

波羅門乙　畏れ多いこツた。いつまでも業晒しな姿を御眼にかけるより、もう御前を下らうぢや

ねえか。

波羅門丁　それがいゝ。それがいゝ。（跪きて）太子殿下に榮えあれ。安らかな御旅行をなされますやうに。今日のみ惠みの功徳が倍になつて殿下に返りますやうに。おい、おやじさん。お禮を申し上げねえかい。

波羅門乙　（よぼ〳〵聲で）やれ〳〵。勿體なや　お影さまで親子が助かりました。

波羅門丁　ぢやお暇しやう。さあ立つた　杖はこつちだ。しつかりつかまえろ。（わざと聞えるやうに）あれこそ本當の施主だ。一物も吝まれなかつた。あれでこそ布施太子の名にそむかねえ。（退場）

妃　（涙ぐみて）深いお教えを受けました今道のためには苦しみを避けやうとは存じませぬが、あまりに私たちの姿が慘めな氣が致しまして――――

太子　いや。皆前よりも淸く、美しく見えるぞ。私たちは世俗の裝飾を振り捨てた。これからは與へられた。生れ乍らの、美を「法」の光りで飾るのだ。慚愧を上服とし、深信を華鬘とし。

戒品を以て塗香とするのだ。妃よ。そなたたちのその玉のやうな體を、七淨の華を布いた浴池で澡いだなら、どんなに美しく、淸らかになることであらう。私はこれを見たく思ひますわい。

妃　（淋しく微笑して）殿下の御意に適ひさへ致しますれば、私はどのやうな姿も本望でございますわ。

太子　（決然として）さあ、行かう。勇氣を出し試つて見やう。さあ。耶利よ。お出で。（王子を背負ふ）

妃　（その樣を見るや、決然として立ち上り）闍子延や。私についてお出で。母樣が手を曳いてあげるからね。

太子　行かう。お前たちの雄々しい姿は俺を奮ひ立たせる。檀特山は遠いとはいへ既に彼處にあのやうに見えてゐるのだ。秦然とした、嚴かな山ではないか。實に靈山だ。「法」そのもの、やうな崇高な、しかも調和した姿だ。鐵のやうに凝り固まつた勇猛心の前に燒砂の道が何で

あらう。眞夏の太陽がなんであらう。さあ、行かう！（一同退場す）

（引き違ひに波羅門甲。乙、丙、丁童木の後ろより登場す）

波羅門甲　うまく行つたな。

波羅門乙　何もかもほうり出しやあがつたな。

波羅門丙　見ろ、向ふの道をとぼとぼ行つてらあ。

波羅門甲　羽を抜かれた孔雀といふざまさね

波羅門丙　（丁に）だが蛙の凄い腕前にや今更たが驚いちやつた。

波羅門丁　（鬘を脱ぎ捨て乍ら）何だ、これしきのことに。

波羅門乙　（立つたまゝ尿をして）だがよくほうり出す奴も、ほうり出す奴ぢやねえか。

波羅門丁　飛んだ所に感心する奴だね。それやさうさ、若し太子が貴様のやうな奴ぢや、迚も錢
ら俺らが逆立ちしたつて錢一文出しやあしめえからな。

波羅門乙　（考へながら）併し考へると少し氣の毒だなあ。

波羅門丁　ふむ。間拔け野郎が。同情心なんか起したけれや、初めつから俺らの仲間に入らねえがいゝや。

波羅門甲　皆で獲物の分配はこうして呉れるんだ

波羅門丙　今日のやうにしこたま獲物のあつた日にや各々勝手なものを取つたらいゝだらう。

波羅門乙　そりや無論さうだ。

波羅門丁　なにっ、鬮だ。さもなきやどうせ喧嘩なしに分けられつこはねえや。だが冠と寶石の函こは俺らがとるのだぞ。

波羅門甲　ふむ、うまくやつてやがる。

波羅門乙　何と皆を出し拔いて、嘩く　何處までも貪欲な奴じやねえか。

波羅門丁　貴様の事を出拔いて鬮なんぞ作り毎に寶さほけて　何とか云つたかい。さあ鬮を引け。

波羅門乙　いやなんでもねえ。お前さんの膽力をほめてゐたのさ。（鬮を引く）

波羅門丙　（同じく鬮を引き乍ら）ねえ、魁、俺らもなまじつかな弱氣は止しにして、ちつとお前さ

んにあやかりたいもんだ。だが今日のやうに根こそぎふんだくりや流石のお前さんも本望だらうな。

波羅門丁　（冷笑して）何だ。慾の少ない野郎だな。

波羅門丙　えゝ？　まだですかい。

波羅門丁　無論さ。まだ大獲物が殘つてるじやあねえか。（甲に）さあ引け。

波羅門乙　（眼を圓くして）おや、おや。

波羅門甲　（鬮を引いて）もう眼ぼしいものは何も殘つてないじやねえか。

波羅門丁　（あざ笑つて）頓馬奴。まだ殘つてるじやあねえか。あの上玉さ二人の餓鬼が——

波羅門乙　（びつくりして）いや、はや。

波羅門丁　おごろくにや及ばねえ。さあ鬮をあけろ。早く獲物を分配して、また仕事にかゝらなくつちやあ。

波羅門甲　（鬮を投げ出して）畜生。また貧乏鬮が當りやがつた。

波羅門丁　（先きに立つて退場し乍ら）さあ。藪の後ろへ來な。俺が手をしこんでやるから。俺は是から大急ぎで馬で間道から先廻りして待伏せしてゐなけれやならねえ。これからいよ〳〵大仕事だ。

（甲乙丙隨ふて退場）

第二場

鬱蒼として繁茂した密林。重なり合つた樹や葉の間から月光さし込み舞臺仄白く照らされてゐる。一面、燃るやうな厚ぼつたい青々とした苔蘚に處々美い濃艶な色彩の花が燃えるやうに咲いてゐる。其の花は非常に大輪で人をして車輪を聯想せしめる。大きな天を摩すやうな榕の樹の下に美しい斑のある大きな虎が前足の上に優さしい顔を載せて眠つてゐる。遠くの森の奥から獸の吠える聲、近くの樹の枝から夜啼く鳥の聲が時々聞える外はひつそりとしてゐる。風無く、樹の葉は少しも動かない。と、忽ち樹の葉が風に撫でられた様に揺らいで、榕の木の枝から一頭の大蛇が垂れ下り。鎌首を擡げて虎の鼻先きに擬する、虎はすや〳〵と眠つてゐる。と蛇に驚いた鳥がけたゝましく鳴く、猛虎は目を醒ます。蛇を見るや猛然として背を擡げ、牙を剝き、飛びかゝらんとする姿勢をとり。暫らく睥睨す、蛇は一時對峙して後。波のやうに體軀を迂ねらして樹上に引きあげる。虎は猶ほ二三度樹上を睥睨して咆哮して後密林の後ろに姿を隠す。またひつそりとする。舞臺一瞬間空

噓。と波羅門丁及丙馬を驅つて登場す。

波羅門丁　（馬をとゞめ）さあ。此處だ。此處で森の蔭に隱れて一行を待ち受けやう。

波羅門丙　（同じく馬をとゞめ、四邊を見廻して）氣味の悪い程ひつそりしてゐやがる。

波羅門丁　一仕事やるのにや持つて來いの處だ。悪くすると荒療治をやらなくちやならねえかも知れねえから。

波羅門丙　そんなことをやるのかい。

波羅門丁　何だ。もう怖氣づきやがつて。（刀を檢しながら）萬一の時にやあこれでやつつけるのだ。だがそんなことは恐らくあるめえ。

波羅門丙　だが幾ら太子だつて子供は可愛いからな。それに鬼のやうな奴にくれてやるのじやあな。

波羅門丁　だから貴樣を選んでやつたのだ。貴樣なら幾らかやさしさうに見えるだらうからな。鬼子でも可愛いのさ、憎々しいのとあるといふからな。使ひ道はあるものだ。だが度胸を据

えてしつかりやりな。

波羅門丙　俺らが一人でやるのかい。

波羅門丁　俺は森の後ろで樣子を窺つてゐる、若し貴樣の手に負へなけれや俺が出てやる。一ゝが拜み倒せば彼ゝに屹度倒れるんだ、嫌とは云　ねえ譯があるんだから。

波羅門丙　試つて見やう。俺らは嚇しは利かねえが。愁ひは隨分利　のたから。だがこんなに苦心して生白い餓鬼を二人ものにしたところで何になるだらうな。

波羅門丁　馬鹿。王の種じやあねえか。どんなにいゝ値にだつて賣れるさ。

波羅門丙　ふむ。何處までも凄い――

波羅門丁　叱つ！　向うにやつて來た　森の陰へ！

（丙と丁退場す）

（間）

（太子王子を背負ひ、妃王女の手を曳きて登場）

妃　（喘ぎ乍ら）あゝ。私はもう歩けさうにはございません。

太子　（疲勞のために蒼白くなつた顏に冷汗をぐつさりと滲ませて）勇氣を出せ。今は大事な時だ。もつと行かう。

妃　私は一生懸命氣を張つてはゐるのでムいますが。（ぐつたりとくづ折れて）もう迚も駄目でございます。暫らく休息させて下さいまし。

太子　此の森林だけ越えてしまへばあの檀特山が見えるのだ。あの山さへ行手に見えればまた勇氣が奮ひ起つだらう。

妃　（嘆願するやうに）どうぞお休み遊ばして。罽拏延も足を傷めてゐますから。

王女　（母の傍に座し、足を投げ出して）こんなに血が出るんだもの。

妃　ひどく痛むかい。お待ち。くゝつてあげるから。（衣を引き裂いて繃帶してやる）

王子　（父の脊にて小さな足をバタバタさせて）下りるよ。下りるよ。

太子　では暫らく休んで行かう。（王子を下ろす）

王子　（すぐに母の傍に馳せ寄つて）母様お乳頂戴やう。ひもじいのだもの。

妃　あゝ。ひもじいだらうね。今朝から何も喰べないのだから。（乳房を擴げ）さあ。

王女　あたしも渇いて、渇いて。

妃　あゝ。渇くだらうね。お前もおあがり。（も一つの乳房を王女に啣ませる）

太子　待つてゐろ。わしが木の果を採つて來てやるから。

（も寄りの林の中に行く）

（間）

妃　（思はずうと／＼眠りかけるがすぐに眼を醒ます）あゝ。二人とも眠つてしまつた。疲れてしまつてゐるんだわ。（涙ぐみ兩腕で子供を抱きしめて、接吻し、自分の肌衣で掩ふやうにして）かはいさうに！

太子　（林の中から出て來る）さあ、採つて來たぞ。

妃　さつきまで乳を飲んでゐましたが、寢入りましたわ

太子　ではお前おあがり。

妃　はい。（食べやうともしないで考へ込む）淋しい森でございますのね。

太子　淋しい森だね。（勵ますやうに）だが日に照りつけられて、砂漠を歩くよりか凌ぎいゝね。

妃　（耳を傾け）獸が吼えてゐますわ。

太子　檀特山へ急がう。彼處では聖人の徳で淋しい森の中も樂園だ。獸も少しも害をしないのだ。

妃　（淋しさうに考へ込み。やがて涙を膝の上に落す）御免遊ばせ。（あはてゝ涙を拭ひ）私今夜は何だか淋しくて、淋しくて――。

太子　氣を強く持て。今は大事な時だ。

妃　どうしたのでございませう。私精一杯氣を引き緊めてゐるのでございますけれど、何だか此の森にさしかゝつてから、氣が變になつて急に歩るく力もつきてしまつたのでございますの。あんなに月が照つてゐますのに雨が降るやうに思へたり、森の樹が皆倒れかゝるやうな氣がしたり、左眼がむづ痒い、右眼がうるみ、兩方の乳房が變に痙攣つたり致しますの。何か子

供達の身の上に凶い事でも起るのでは無いのか知ら――

太子　何をつまらない、お前の氣根が弱つたので色々なことを考へるのだ。

妃　左樣たとよろしうございますが、（身慄いして）また獸が吼えましたわ。（子供をしつかり抱きかゝへて）子供をとりに來はしないでせうか。

太子　大丈夫だ　あんなに遠方だから、お前氣をしつかり張り締めてゐなくてはいけませんぞ。

（間）

（突然近くの森の中で角笛の音が聞えた）

妃　（訝しげに）何でございませう。

太子　あれはたしか角笛だが　狼から羊たちを守るために羊飼が鳴らしてゐるのだらう。

（一瞬間沈默。羅門丙羊飼ひに變裝して角笛を腰に吊し鞭を持ちて息を切らして登場）

波羅門丙　（いきなり太子の足下に跪き歔欷し乍ら）お願ひでございます。お願ひでございます。

妃　（ギクッとして本能的に子供達を後ろにかばふ）

太子　何者だ。

波羅門丙　（やつと泣き止めて）私は貧乏な羊飼ひでございます。やれ〳〵。やつと追ひ付きました。坂道を走りつゞけて參りましたので息が切れさうでございます。あなたがあのお慈悲深い布施太子樣でいらつしやいましたか。

太子　願ひの筋を申せ。

波羅門丙　はい〳〵。有難うございます。私の牧場は荒れ果てゝ居ります。實は女房が永らく病みついたきりでございますのでな、迚も私一人ではあの氣まぐれな羊ごもの世話を燒　手が廻りません。毎晩狼や虎が襲つて來て荒らし廻ります。それで私は羊の番をしてくれる牧童が欲しいのでございます。

妃　（眞青になる何か云はうと試みて、唇が空しく痙攣する）

波羅門丙　で誠に申兼ねますがお子樣方のお手をお借り申上げたいのでございます。

妃　（せき込んで）お前お願ひ出來ることゝ、出來ないことの別は心得てゐるだらうね。

波羅門丙　（おづ〳〵して）左樣仰せられますと誠に恐縮致します次第でございまして。尊い王子樣に賤しい牧童の仕事がふさはしいとは決して思はないのでございますが、何しろあまりに困り切つてゐるものでございますから。それに人の話では、あなた樣方はお城をお立ちになりました時から、もうお位をお捨て遊ばして、世の一番賤いものと同じ列に身を落し、下々の貧しいものゝ苦しみをお頒ち下さるのだと聞いてゐました。私はそれを聞いて勿體なくて涙がこぼれました。そしてそれではと存じまして、お願ひ申して見る氣になりましたのでございます。決しておなさけにつけ上る氣ではないのでございますが。

太子　（考へ込みながら）それ程までに難儀致してゐるのか。

波羅門丙　全く持ちまして、困り切つてゐるのでございます。病氣の女房のために藥が得られないことなどは無論あきらめて居りますが、食べさせる事さへも出來兼ねるのでございます。たゞ羊の番さへしてくれるものさへ居てくれゝば助かるのでございますが。炊事と看護とでぐた〳〵に疲れ切つてしまひますので。

太子　それは不愍なことだ。助けてくれる隣り人(ひと)は無いのか。

波羅門丙　（悲憤するやうに）殿下。番人のゐないのをねらつて墻を越えて羊を盗む奴はゐましても、不幸な隣りのもののために一槽の秣をも刈つてくれるものはございませぬ。

太子　…………

波羅門丙　（めそめそと泣き出して）此の様子ではあはれな妻は屹度今に死んでしまうでございませう。私は貧しいものの悲しみと人情の冷めたさとを沁々と感じます。私は寧ろ女房が一層の事邪慳な奴ならまだ心の苦しみは少なからうにとさへ思ひます。女房はこんな乏しさにも、病氣にも少しも不平を申しませず、私を心配させまいと思つてわざと呑氣なやうな風をして見せるのでございます。普段あれ程の働き手であつたのに、それを少しも鼻にかけず、たゞ私に手間へさせる事を氣の毒がつてばかりゐるのでございます。もうすべての苦しみを忍び受けて、運命に身を任せ切つてゐるのでございます。私は襖越しに私の眼の前では苦しい顔を見せない女房が、うめき聲を立てゝお腹(なか)を押へ乍ら、早く死の來るやうに天に祈つてゐるの

を見ました。私は今日も女房の枕元に凝つと坐つてその青ざめた寝顔を見てゐました。あゝ女房もかうして死んで行くのかと思ひました。何一つ悪い事をしない、從順な、働き手の女房が、何うしてこんなに苦しまなければならないのだらうと思ひました。何一つ樂な目もさせないで見す／＼死なせる自分を腑甲斐なくも思ひました。あゝ、牧童さへあつたらと思ひました。その時私は殿下のことを聞きました。そして矢も楯も堪らなくなつて、後を追つて參りましたのでございます。

太子　（涙ぐみ）世にも氣の毒な夫婦だ。俺に出來る事なら何とかして助けてやりたいが――

妃　（せき込んで）子供たちには迚も羊飼ひの仕事は出來ないのだから――

波羅門丙　大丈夫でございます。お妃さま。遊び半分にでも出來ます。牧場は廣く、青々として、お子様方のためには、此の上もないいゝ遊び場でございます。角笛を吹いて、杖を持つて羊たちと遊んでゐてさへ貰へばよろしいのでございます。

妃　でもお前それでは危ぶなくて仕様がないからねえ。

波羅門丙　さう致しまして。お妃樣。對手を戰ひ中で、奪はないと云はれる筈でございます。決してお子樣方をお傷け申すやうなことはございません。

（子供達不意に目を醒まし、見知らぬ人と父樣の連れるを見て、母に縋り付く）

妃（子供を抱きしめて）怖がることは無いよ。怖がることはないよ。（丙に訴へるやうに）ねえ。お前。お前は惡い人では無さゝうだから聞き分けておくれ。私はお前のお連れ合ひの人を本當にいとしく思ふのです。けれどそれだから云つて迚も子供たちを手放す氣にはなれません。なれる筈がありません。どうぞお願ひだから私の心を察してあきらめておくれ。

太子（妃の樣子を見て動かされて）わしは汝を助けてやりたいのは山々なのだが、他のものと違つて幼い者の事ではあり、また汝も見る如く、妃があの樣に手放すことを悲しがるから、不本意乍ら汝の願ひを叶へてやることが出來兼ねる。氣の毒だが牧童は外で求めねばなるまい。

波羅門丙　あゝ、可哀想な女房よ　お前はどうあつても死なねばならぬわい。（地に泣れ伏し號泣す）

太子（默然として聞いてゐる）

波羅門丙　お前の運が拙いとあきらめてくれ。わしを不甲斐ない夫だと思はないでくれ。何一つ樂な目に遇はせることも出來ないで苦勞ばかりさせたのを恕してくれ。(間)わしは太子樣が若しかお救ひ下さるかと果敢ない望みをかけてゐた。併しその唯一つの望みの綱も切れた。お慈悲深い太子樣もそなたをお助け下さる譯には參らぬさうだ。そなた程の善人が太子樣のお慈悲に洩れなくてはならないといふのもよく／＼不運な生れだなあ。お前は多分今頃明りも點けないで籔蚊に責められ乍ら、痛む腹を抱へて俺が吉い報らせを持つて歸るのを待つてゐるだらう。俺はどう云つて歸つたらいゝだらう。お前が俺の云ふ事を聞いて失望して息が切れはしないかと心配だ。(間)いや／＼お前は初めから當てにしてはゐなかつたらう。屹度さうだ。お前は人情の冷たいことは知り拔いてゐたからな。さうだ俺は今思ひ當る。俺が太子殿下の處にお願ひに上ると云つた時、お前が變に淋しく／＼笑つたのを。どんなに慈悲深い人でも他人の幸福よりは自分の幸福を願ふものだと云ふことを俺は今こそ本當に知つた氣がする。——

太子　（苦しさうに）待て！　もつとよく考へて――

波羅門丙　（耳に入らないやうに）だが恨んではならないぞ。考へて見れば御尤な事だ。此方の運が悪いのだ。誰だつて子供は可愛いのだ。幾ら天に立てた誓ひだと云つても、脊に腹は換へられない。慈悲と云つたつて程度問題だ。自分の幸福の保てる限りの話だ。誰を恨むわけもない。不運な星の下に生れたのだ。あゝ、あきらめて死んでくれ。お前を見送つたら俺も後からついて行くぞ。俺は甲斐しよは無かつたが、どんなにお前を愛してゐたかといふことをそれで知つてくれ。そして俺をあはれみ赦してくれ。（泣きつゞける）

太子　（眼をしばたゝき）氣の毒な羊飼よ。汝の言葉はわしの心を搾めつけるやうだ。汝が愁嘆するのは本當に尤もだ。汝の身になつたら實に堪へられまい。俺は心から不愍に思ふぞ。

波羅門丙　（我に返つた如く、やうやく面を上げ）御免下さいまし。太子樣。取り亂した姿をお目にかけまして。あまり絶望致しましたものでございますから。

太子　いや。苦しうない。誰かそなたの樣な身の上になつて取り亂さずにゐられやう。

波羅門丙　もつたいなうござります。太子樣。あなた樣からそれほどのお言葉をかけていたゞきますれば死ぬる女房も本望でござりませう。ではお暇申上ます。（立ち上りコソ〳〵身仕度をする）

太子　（凝つと眺めて）もう行くか。

波羅門丙　はい。女房が待ち佗びてゐませうから。（眼をしよぼ〳〵させて）では御健勝に渡らせられまするやう。（妃に）あなた樣にもおいとひ遊ばされて。

妃　（始終うなだれて聞いてゐたが）おゝ。お行きか。（心苦しさうにしながら）くれ〴〵もお連れ合ひに氣をつけてあげてね。

波羅門丙　（わざと殊勝に）あり難うございます。尊いお妃樣にさうおつしやつていたゞいたことをせめて土産に致しませう。嘸女房もよろこんで死ぬるでございませう。（大地に頭をコスリつけてお辭儀をし）ではお暇申上げます。（行きかける）

太子　（丙のしよんぼりさした後姿を見送つてゐたが、堪へられなくなつたやうに）待て。

波羅門丙　（振り返り）お呼び止めでございましたか。

太子　お前に訊くが、お前は連れ合ひの病氣が恢復して、牧童が要らなくなつたら、子供たちは必ず返すであらうか。

妃　（思はずギクツとして不安に堪へぬ面持で二人を見比べてゐる）

波羅門丙　（瞬間的に得意の表情を浮べるが、直ぐ巧みに押し隠して）それは無論でございます。太子樣。私はたゞ可哀相な女房の一命を助けたさに、無理とは知りつゝあんなお願ひを致しましたのでございます。お子樣方に羊の守りをして戴きまして、女房が恢復し、その日の業（なりはひ）が立ちさへ致しますれば、私はもう直ぐにも檀特山へ飛んで行つて、お子樣方は屹度お手許にお返し申し上げます。

太子　しかと左樣か。

波羅門丙　（大袈裟な誓ひの徴をしながら）この河が逆さに流れませぬ限りは——今のあなたを欺きましたら天罰があまりに恐ろしうございます。

太子　そなたの誓ひを信じるぞ。

妃　（堪へ切れないで）殿下。御考へ下さいまし。如何に清淨な、信じ易いお心とは申しながら――

波羅門丙　御安心下さいまし。お妃様。私はよく〳〵存じて居ります。幼な兒は親に、とりわけ母親に屬くものであると申すことを――私は屹度お手までお屆け申します。

妃　（太子に、嘆願するやうに）殿下、私をお憐れみ下さい。母に取つて子供がどんなものだかお考へ下さい。私はすでにすべてのものを與へました。持物も、衣服も、あの私の、最高の誇りと記念の徴であつた冠までも！　其の事で私が殿下の御教へにお乖き申上げるつもりでは無いことをお信じ下さいまし。若し私がまだ他に何物かを身につけてゐるのでございましたら、私は即座にそれを惜し氣もなく與へるでございませう。けど子供達だけは！　私は堪へられませぬ。私の二つの乳房を切り取つて與へるのでも、まだ〳〵それに比べればた易い氣が致します。何卒お赦し下さいませ。

太子　そなたの母らしい恩愛には深く同情する。そなたは嘸苦しかろう。だが妃よ。勇氣を出せ。

そなたの胸の底の愛を燃え上らせろ。他人の危難を助けるためにそなたの肉身の愛を供へ物にしろ。

妃　でも私の苦しみを忍ぶだけではございません。幼いものがあまり可哀相でございますから。

太子　可愛いゝ子供たちに善い奉仕をさせて、その善行のために諸天の祝福を招いてやるのだ。それが一番正しい親の愛だ。

妃　（泣きながら）殿下、それはあまりにお厳しい――

太子　妃よ、今は俺の生涯で一番厳しさの必要な時だ。若しその厳しさに耐へ得ないならば俺はあまりに器量不相應な大願を立てたことになる！　運命が今俺を試みて居るのだ。俺は道のためには恩愛に打ち克たねばならない。

妃　あゝ。私は嗟きさうでございます。人は道で生きるのでございませうか。愛で生きるのでございませうか。

太子　おゝ。妃よ。愛こそ唯一の道なのだ。若しその愛が純粋無垢でありさへするならば！　純

粹無垢の愛は法の愛だ。母性の愛はまだ不純なものが含んでゐる。それは法の愛まで淨化されて高められなくてはならない。母性の愛を否定するのではない。それを法の愛で包攝するのだ。法の光で照らされた時母の愛は一層生かされて輝くのだ。母の愛の名によつて、法の愛をなみするものは禍ひだ。そなたはその愛で生きてくれ。法の愛に照らされた母の愛で子供たちを愛してくれ。今その愛がそなたに子供たちを放つことを命じるのだ。そなたはその命令に從つてくれ。それは最も深く子供たちを愛する所以なのだから。そなたの胸に法の愛の火を點してくれ。蕊を切つて焔を燃えあがらせてくれ。その火を高くかゝげて見よ。その時其處には子供達しか見えないそなたの眸にも可哀相な羊飼の妻が獨り淋しく臥てゐる姿が映つるだらう。彼の女は死にかけてゐる。妃よ、子供たちを彼の女に送らう。若し私たちが拒むならば彼の女は死んでしまふのだ。

妃　(身を悶えながら) おゝ。私はどうしたらいゝのだらう。私には憐れみの心が乏しいのだらうか。眞理への愛が足りないのだらうか。私はやつぱり子供が放したくない。尊いお敎へもよ

くは耳には入らない氣がする。

太子　今そなたの耳には俺の言葉は空しく聞えるかも知れない。切迫した苦しい心には迂濶にも冷淡にも響くかも知れない。だが俺は飽くまでも道を說かずにはゐられない。そなたや子供たちを愛すれば愛するだけ道に嚴しくならないではゐられない。俺は假令死に瀕してゐるそなたの耳元にでも道を說かずには置かないだらう。俺は說教者としての使命を感じる。法輪を轉ずるために此の世に遣はされたものゝ天務を——

妃　あゝ。私は息が窒りさうです。

太子　俺はそなたを我が身に親しく考へる程そなたに眞理を强ひたくなるのだ。

妃（眩暈を感じて）あゝ。

太子（蒼白になりながら）子供達を放せ！

妃（額に手を當てながら一生懸命の努力にて）お許し下さい。私は子供たちを施すことは出來ません。

太子　暫くの間許して與へるのだ　俺の妻の病氣が癒えるまで——羊飼ひが左樣申してゐるではな

いか。

妃　でも若しその時になつて――

太子　俺は人間の内にある良心に望みをかける。それはどんな人の心の内にも屹度ある筈なのだから。若しそれが無いとしたら俺がこれから成し遂げやうとしてゐる大願は最後の據り處を失ふ事になる（跪きて）天よ。私の今かけます望みは屹度眞直な、公けな道の上に立つてゐることを信じます。天の祝福を受けてゐることを信じます。

妃（抵抗し難きを感じ、慄えながら沈默す）

太子　二人の子供を貸し與へる。連れて行け。

波羅門丙（跪いて太子を拜し）有難うございます。勿體なうございます。御慈悲深い布施太子樣。女房よ。喜べ。太子樣がお助け下さつたぞ。此の世で誰も顧みてくれる者のないお前を葉波國の御世嗣に渡らせられる須太拏太子殿下がお救ひ下されたのだぞ。これからは附き切りで看病してやるぞ。食物も藥も不自由はさせないぞ。お前は屹度快くなるだらう。此の喜びを感

謝とだけでゞも快くならずには居られまい。（空涙をこぼして）さうだ。お皿が恢復したら。夫婦連れであらゆる村々を駈け廻つてふれて歩かう。太子様がこのやうにして貧しい羊飼の女房に惠みをかけて下さつたか。このやうにしてお妃様がその玉のやうに愛でゝいらつしやるお子様たちを貸し與へて下さつたかを。

太子　行け。

波羅門丙　はい〳〵（王子と王女に愛嬌顔をして狎れ〳〵しく近寄りながら）坊ちやま。孃ちやま。さあ〳〵此のおやぢの牧場にお作致しませう。

王女　（母に縋り付き）いやだよ。いやだよ。

王子　（面をしかめて）こわいよ。こわいよ。

波羅門丙　（ますます愛嬌よく）こわいことはございません。おやぢが可愛がつておあげ申しますよ。おやぢの處には澤山かはいゝ羊が居りますよ。

王子　いやだよ。行くのはいやだよ。

太子　お前達は此のぢいやの所に暫らく行つておいで。ぢきに歸つて來るのだから。（丙に）連れて行け。

波羅門丙　さあ參りませう。參りませう。

妃　（絶え入るやうに）お前本當に返しておくれだらうねえ。返して――

波羅門丙　（杖で誓ひの印なしながら）羊が肉を喰ひませぬ限りは――屹度お返し申します。

王子　（泣き出して）行くのはいやだよ。いやだよ。

太子　行つてぢいやを手傳つて羊の番をしておやり。

王女　（猶も妃に縋りついて）離れるのはいや。離れるのはいや。

妃　（優しく）しばらくぢいやの處に行つておいで。ね。いゝ子だから。そしてぢきにまた歸つておいで。ぢいやが可愛がつてくれるからね　ぢいやの處には廣い牧場があつて可愛い羊が澤山ゐるから、羊たちと遊んでおいで、いゝかい。ぢきにまた母樣の處に歸るのだよ。（涙ぐみながら）羊たちの草を喰べるのを見るのはおもしろいからね。え。

太子　（嚴しく）ぢいやと一緒にいらつしやい。

波羅門丙　（せき立てゝ）さあ。行きませう。行きませう。

妃　（猶　縋りつく子供たちを放して、立たせ丙に渡しながら）お前可愛がつてやつておくれよ。可愛がつて――

波羅門丙　御安心下さいませ、羊の子でさへ優れた種を大切にせねばならぬことは羊飼の一等よく心得ねばならぬ事でございます。まして至尊の王種たるお子様方をおろそかにしてなりませうか。

妃　（も一度子供たちを抱きしめて、接吻して）氣をつけておいでよ。早く歸つておいでよ。

波羅門丙　（繩を出して）御免下さいまし。（ジロジロ妃の面を見ながら）なに若し途中でうつかりして谿川などにお轉び遊ばすと大變でございますから。（子供の腰に繩を結び付ける）

太子　（瞑目して）早く連れて行け。

波羅門丙　（子供たちを引き立てながら）さあ參りませう。行つて羊たちと駈け比べをして遊びませ

う。（角笛を吹いて見せて）かうして吹くと羊が皆集つて參りますよ。それは面白うございますよ。（丁寧にお辭儀をし）ではお二方氣をつけてお越し遊ばしませ。今日のお惠みは孫子の末まで云ひつたへて忘れませぬ。（泣いてゐる子供を引き立てゝ退場）

（森の奥で、獸の吠える聲聞ゆ）

妃　（狂ふやうに）待つておくれ、も一度子供を見せておくれ。私はまだ云ひ殘した事がある。も一度子供を――（後を追うて退場）

太子　（後見送り暫く不安の表情にて突き立つてゐるが、軈て跪きて）私はなすべきことをなしました。諸天よ。子供たちをお守り下さい。（一心に祈る）

（間）

妃　（息せき追つて來て）あゝ、行つてしまひました。（くず折れて）子供達は行つてしまひました。

太子　（強く）心を勵ませ。今は大願の門出だ。

妃　まるで屠所に曳かれる羊のやうだつた。素裸の腰に繩をくゝりつけられて！

太子　勇猛心を奮ひ起せ。今退轉してはなりませんぞ！

妃　（獨白のやうに）もう二度と子供達に逢へないのではないか知ら。子供達の運命は——

太子　わしは諸天の守護を信じる。妃よ。試みに敗けてはならないぞ。出城の際に母上が世にも見事に打ち克たれたあの同じ試みに、そなたも立派に勝つて見せろ。

妃　（一生懸命心内に鬪ひながら）殿下に選ばれた名譽に適ふために！

太子　勝て、勝ち誇れ。祝福はそなたの頭に下るであらう。

妃　（太子の腕に身を投げて）殿下を、たゞ殿下を命と致しまする。

太子　おゝ。妃よ。（妃を抱く）

（間）

太子　（妃を靜かに放し、立ち上り）さあ、行かう。一刻も猶豫してはゐられない。

妃　參りませう。今は疲れを恐れてはゐられませぬ。此の恐ろしい森を早く出ませう。

太子　（勇ましく）さうだ。森を過ぎれば山が見える。聖山の姿は勇氣を奮ひ起たせてくれるだら

う。

妃　（見廻して）おゝ、いやな森だこと！（身慄ひして）惡魔が潜んでゐるやうな！

太子　私達に勝つた。だが新しい試みの來るのを畏れねばならない。まつしぐらに檀特山へ！

（先きに立ちて退場）

妃　（森の奥の方の道へ振り返りながら）あゝ　子供たちよつゝがなく行つておくれ。（太子に從うて退場しながら）森を越え、谷を渉り、何處何處までもお隨ひ申上げまする。

波羅門丁　（森蔭より出て）腰拔け奴が出かけ居つたぞ。案の條太子奴ァ拜み倒されやがつた。なる程俺のやうに嘘かゝはかりが手でも無えわい。（間）處で二人の餓鬼にゃうまく賣りつけなくちやあならねえが、一等いゝ價の出相なのは何處か知らんて。

（波羅門丙、王子達を引き立てゝ別の道より引き返して登場）

波羅門丁　（笑ひ乍ら）出かしたぞ。貴樣にしちや少し上出來だつた。

波羅門丙　魁、冗談じやあねえぜ。俺いらあ少し此の稼業がいやになつた、

波羅門丁　何だ。これしきのことが。

波羅門丙　あの妃にや少し薬が利き過ぎたて。

波羅　丁　なあに。俺あ貴様が嘘をつくことの甘いのには少し感心した。あんなに出任かせに嘘がべら／＼しやべれるたあ頼もしい。その道にかけちや俺らかなはねえや。

波羅門丙　（考へ乍ら）どうもいけねえ、彼奴が鳩のやうな眼付をして云やあがつた言葉が妙に耳に喰つ付きやあがつた。「そなたの誓ひを信じるぞ」つて。

波羅門丁　（丙の肩を叩いて）おい／＼、しつかりしろ。折角少し腕前が上つたかと思つて望みをかけてやつてるのに。

波羅門丙　（頭を振りながら）「ガンジス河が逆まに流れませぬ限り」か……

波羅門丁　（王子の顔を眺め乍ら）ふむ。流石に格のある面をしてるやがるな。（王女の顎を手の平に載せて）ふむ、綺麗だな。……好色な金持のペルシヤ人にでも賣り飛ばすかな。それとも俺らが使はうかな。美少年や美少女の一人位使ふのも惡かあねえからな。

波羅門丙　（何か思ひついたやうに）唯。此の餓鬼を賣るなあ俺いらに任せてくんねえ。

波羅門丁　ふむ。それや望みならさうしてやつてもいゝ。貴樣の手柄たからな。だがぬかりはあるめえな。

波羅門丙　大丈夫だ。

波羅門丁　ぢやあこの餓鬼等は貴樣に任せたぞ。俺らあこれからまた仕事にかゝらなくちや。

波羅門丙　まだかい。

波羅門丁　まだ上玉が殘つてゐらあな。（馬に乘り乍ら）間道から先廻りだ。

波羅門丙　いや、ごうも。

波羅門丁　（考へながら）俺あおくまでも「嚇し」でやらう。（馬首を巡らし二三歩行きかけて振り返り凄い目で睨して）云つて置くが、萬一餓鬼を逃がしでもしやうものなら後は恐(こは)いぞ。

波羅門丙　（ギクツさするが、笑つて見せて）まさか自分が骨折つてやつてせしめた獲物を遁がす馬鹿もあるめえよ。

波羅門丁　ぢやあ任せたぞ。しつかりやれ。（馬に一鞭當てゝ）どれ。又一汗掻かせなくつちやあ。

波羅門丙　俺らも歸らう　（慳貪に繩を曳つぱり）さあ歩め。（王子達を鞭打ち）歩まねえか。

（王子と王女悲鳴をあげて抱き付く）

波羅門丁　（心地好げにその狀を眺めて）ぢやあ任せたぞ。

波羅門丙　うむ。しつかりやりな。

（丁馬に鞭打つて退場）

波羅門丙　（後見送つて）チエッ、何處までも酷い奴だ。（間。考へる）俺あ少し嫌氣がさした。何だか腹の底がゾク／＼する。どうも さつき彼の太子に 誓はされた時には變に恐ろしかつた。（あちこち歩く）どうも 俺には此の稼業は少し向かねえやうだ。彼奴に何日まで喰つ付いてゐたつて碌な事は無えのは知れてゐる。もういゝ加減に彼奴との腐れ緣を切らう。逃げ出さう。さうだ。せめて王子たちを連れて葉波國の宮城へ行かう。彼處なら王孫達をどんなに高くでも買ふだらう。其の金を資本にして、さつぱりと足を洗つて、堅氣な小商ひでも初めやう。

さうだ。鬼の歸らぬ間に早く逃げやう。（王子達を連れて退場す）

（幕）

第三幕

巖石よりなれる嶮岨なる山道。間近く檀特山の麓の一部をなせる幽邃なる森林を望む。山道と森林との間に聖畑と磽土とを區劃するが如くに一條の淸らかなる溪流橫はる。綠滴たる無憂樹の森林と、全く草木なき磽确なる巖山とは著るしき對立をなす。夏の正午の太陽は赫奕として巖山を照り付けてゐる。岩石の形狀は不思議に或る醜きものを聯想せしむ。

波羅門丁　（馬に鞭打つて峻しき坂路を登つて登場。四邊を見廻して）何て醜い、露骨な山だ、剝き出しの地肌を無遠慮にかッ／＼と日が照りつけてゐやがる。（泡を一杯噴き出して苦しさうに腹を波打たせて喘いでゐる馬を無暗にピシャ／＼と鞭打ち乍ら）歩めやがれ。瘦馬奴。（たらたら流れる埃だらけの汗を筋の一杯浮き出た手の甲で拭つて）恐ろしく燒けつけやがるな。（ウロウロ見廻して）何だ。休まうにも木影と云つちやあ一つも無えや。馬鹿に蒸々しやがるな。やり切れねえ。息が窒りさうだ。まるで焙烙の上に居るやうなものだ。咽喉がヒリ／＼する程乾きやあがる。（怪しげなる鳥群の鳴き聲聞こゆ）む、此の山にや屹度行き倒れの死骸があるな。あの人喰鳥が集つて來るからにやあ。（下を覗いて）恐ろしい崖だな。おゝ地獄だ。（間。向うを見て）あれが檀特山

か。馬鹿に綺麗な水だな。(咽喉を鳴らし乍ら)一口飲みてえな。(考へて)だが待て。あれは滅多に飲めねえぞ。悪人があの水を飲むと恐ろしい疫病に取つ付かれると云ふからな。俺はごうも餘り自信は無えからな。畜生。地べたにへたばつてしまやがつた。立ちやあがれ。四ツ足奴。(鞭打つ)何だ馬鹿に臭えと思つたらあづりづり糞を垂れやがつたな。(向うを見て)來たぞ!立たねえか。(馬をつゞけさまに鞭打つ。馬ヨロヨロとして立つ)歩め。(岩影に隠れる)

(太子と妃喘ぎ喘ぎ登場)

妃　あゝ。とても苦しくて。苦しくて。

太子　しつかりしろ。もう一息だ。

妃　(足を引きずり乍ら)とてももう歩けませんわ。(岩角に躓く)あツ!

太子　(腰布を引き裂いて)血を拭へ。俺が縛つてやるから。(跪いて妃の足の傷をくゝらうとする)

妃　いゝえ。よろしうございますの。私息が窒りさうで。窒りさうで。私出來る限りは默つて耐へてゐたのでございますけれど。

太子　氣を確かに持て。

妃　（地べたにへたばつて）あゝ。胸が惡くて、胸が――

太子　（妃を扶け乍ら）しつかりしろ。氣を緊き締めろ。

妃　（眞青になつて倒れかゝつて）水を。咽喉がくつ付いて――

太子　（妃を抱きかゝへて）氣を張れ。一生懸命勇　を出せ。御覽彼處に、崖の下にあんなに綺麗な溪川が流れてゐる。俺が下りて水をこつてくるから。

妃　（太子にしがみついて）いゝえ、私の側をお放れ遊はさないで！　私何だか恐くて　恐くて――

太子　恐いことは無いよ。心を靜かにして俺の腕にもたれて居ろ。苦しいのは今一息だ。御覽。あの聖山を。あの眼のさめるやうな無憂樹の森を。

妃　（一生懸命自分を支へやうと努め乍ら）此處まで來たのだ。もう此處まで來たのでございますもの。

太子　さうだ。此の崖を下つて、あの溪川を渡りさへすればもう檀特山だ。あの長い間憧れ進ん

で來た靈山だ。

妃　あゝ。あの聖山へ早く入りたい。

太子　今一息だ。あの川に足を浸せば痛みも直きに去るだらう。あの森の靈氣に觸れゝば疲勞も直ぐに醫されるだらう。

妃　（再び青ざめ乍ら）私はどうしたのでせう。氣がさして、氣がさして――（四邊を見廻し身震ひして）あゝ、此處は何て嫌な、不作法な、醜い處だらう。

（此の頃より黑雲檀特山の一角に起り、見る見る四方に擴がり一天俄かに掻き曇る）

波羅門丁　（岩影より身を現はす）

妃　（思はず聲を立てゝ）鬼が！　（しがみつき）殿下。あの異形（いけう）の者は何でございませう。

太子　（ギクッとするが睇視して）人間だ。恐れる事はない。

波羅門丁　（つかつかと太子の前に進み）葉波國の太子須太拏に挨拶するぞ。

太子　何者だ。

波羅門丁　俺は波羅門だ。
太子　俺に何用あつて參つた。
波羅門丁　布施の所望があつて參つた。
太子　（靜かに）俺は既に凡てのものを布施して餘す所がない。
波羅門丁　凡てのものを？　汝は一番貴重な寶を所持してゐるではないか。
太子　いや。一物も持つてはゐない。俺はそれを吝んで施さないのではないのだ。
波羅門丁　（齒をむき出して皮肉に薄笑ひして）汝の最愛のものを除いてはな。
太子　（思はず妃を後にかばひ）俺は二人の子供さへも施したのだ。
波羅門丁　他のすべてのものを施しても、最愛のものを施さないならば、一物をも施さないのに去ること遠くはないわい。
太子　（嚴しく）去れ！　そちに施すものは一物もないのだ。
波羅門丁　（からからとあざ笑ひ）虛言者よ。汝の後ろにかばうてゐるものは何ものだ。

太子　…………

波羅門丁　俺はそのものを所望するぞ。

太子（青ざめて）これは余の妃だ。

波羅門丁　汝の妃を俺に施せ。その時初めて汝は凡てのものを布施したといひ得るであらう。

太子　妃は俺と一心同體だ。二體にして一體だ。分け施すことは出來ないのだ。

波羅門丁　讒言者よ。汝は一婆羅門の耳を瞞まし得ても、天を欺くことは出來ねえぞ。

太子　惡人よ。天の名を呼ぶことを恐れよ！

波羅門丁　僞善者よ。天の名を呼ぶことを恐れなくてはならないのは寧ろ汝であらうぞ。

太子（眼を閉ぢる）

波羅門丁　汝は自ら僞はつてゐるのだ。妃を施せ。俺は是非とも所望するぞ。伴ひ歸つて俺の婢とする。

妃（慄へ乍ら）退りや。無禮者。

波羅門丁　（一向頓着せず、圖々しく太子に詰め寄りて）汝の誓ひは守られねばならねえぞ。
太子　（やゝ和睦的に）施すものは拒んではならない。だが乞ふものは強いてはならない。乞ふものには乞ふものゝ踏むべき道があるのだ。
波羅門丁　はゝゝゝ。汝はあまり甘へ過ぎたな。汝は初めから衆生の欲望はこれ位なもの、高を括つてゐたのだな。それならば汝はあまり大言を吐き過ぎたのだ。天を輕ろしめたのだ。
太子　いや俺は決して天を輕ろしめたのではない。俺は何ものをも何者にも拒ばまない決心　誓つたのだ。だがよもや妃を乞ふものがあらうとは思はなかつた。
波羅門丁　須太拏よ。甘いぞ。甘いぞ。若し善人がその「善」に於て賭けるものが、惡人がその「惡」に於いて賭けるものよりも小さいならば、その善人の權威はどこにあるのだ。俺に敗けずに賭けろ。俺はたつて汝の妃を所望するぞ。
太子　（思はず一歩のり出して何か言ひかけるが、妃の青ざめて、慄えてゐるのを見て再び思ひ返したやうに）善行に賭けるのは、惡行に賭けるやうに容易なものではない。それには恐ろしい犧牲が要る

のだ。

波羅門丁　惡行に賭けるのにも恐ろしい犠牲が要るのだ。それには良心を賣らねばならない。汝が拂ふ犠牲は、汝が贏ち得てゐる名譽に對する當然の代價に過ぎないのだ。

太子　俺はその代價は己でに充分に拂つてゐる。

波羅門丁　いやまだ決算は濟まなかつたぞ。今こそその刹那が來たのだ。汝は回避することは出來ねえぞ。天はその名によつて立てた汝の誓言の實行を迫るのだ。

太子　（天を仰いで）あゝ、天よ。生を人身に享けたるもの、あはれな愛をお許し下さるでございませうか。

波羅門丁　（嘲笑して）何だ。汝は此の期に及んで天の課稅の割引を哀願しやうと思ふのか。俺は驚いた。實の處少し失望した。俺は汝はもつと偉大な奴かと期待してゐた。しかるにどうだ。汝は先きに、詭辯を以て事實を瞞着しやうと試みるかと思へば、今は哀訴を以て負擔を輕減しやうとあせつてゐる。實に見られた態ではない。

太子　（憤然として色をなし、決心せる面持にて手を高くあげ、二三歩波羅門丁の方に進み近づく）

妃　（太子の様子を見て無意識的に二人の間に身を投げ出し）私を憐んでおくれ。汝が若し鬼でないならば、汝が今要求してゐることがどんなことだか考へて見てお呉れ。そして此の上もう私達を苦しめないでおくれ。

波羅門丁　（空嘯いて）泣いて見せるのは止した方がいゝ。俺の無慈悲な本能を挑發するばかりだから。

太子　（妃の泣き崩れたる態を見て再び決意の鈍りたる樣にて空しく佇立してゐる）

妃　（突然肌衣を脱ぎ捨てゝ丁の前に投げ出し）お前、この肌衣をあげるからこれで滿足しておくれ。それは一等練りのいゝ絹で出來てゐるのだから。私の肌の匂ひが一杯にこもつてゐるのだから。私はどんなことがあつても此の薄絹一枚だけは脫ぐまいと思つてゐた。けれどお前のためにはこれを脫いだのだ　殿下にさへも一番秘密な閨の中でなくては決して見せない肌を、そちの眼の前に露したのだ。お前これで滿足しておくれだらうねえ。

波羅門丁　（恐る／＼妃の裸體を眺めながら）何だ眞晝中に丸裸になりやがつたな。（眼をぱち／＼させて）少し眩しいぞ。いや、俺も流石に汝の肌をほめないではゐられねえわい。だが汝は逆上して、一番無分別な振舞をしたと云はなければならねえ。俺は益々汝を欲するぞ。そちのその玉のやうな乳房を見た今、俺はもう金輪際汝を斷念することは出來ねえぞ。

太子　（堪へかねたる如く）恥を知れ。無作法者奴が。

波羅門丁　所望だ。所望だ。妃を我が所有となす迄は那落にかけて此處を動かねえぞ。

妃　（眞青になつて手を絞り乍ら）天よ。波羅門の心に慈心を催ほし下されませい。

波羅門丁　俺は外道の名によつて誓ふぞ。此の禿山から青草が生えねえ限り、俺の心から慈悲は起こらねえぞ。

妃　おゝ殿下。（太子の腕に倒れかゝる）

太子　（妃を抱きかゝえて）しつかりしろ。（玉のやうな汗を額に一杯掻いて）波羅門よ。汝が今起こす一念の善心は、千念萬念の菩提心よりも優るのだぞ。汝が若し冥罰を恐れるならば――

波羅門丁　（嘲笑して）醜いぞ。須太拏。汝はまことに烏滸がましい僭越者であつたわい。或は憐みを求め、或は嚇かし文句を使つて、いかにもして汝の當然負はねばならない課税を免れやう、藻掻く態は、寧ろ笑止千萬だ。何處に大願を立てた大行者の權威があるのだ。汝は空恐ろしい大言をほざきすぎた。天を指し、地を指して途方もない恐ろしい誓言をしたその罰を汝が受くべき時が今來たのだ神妙に刑罰を受けろ

太子　（妃をしつかりと抱きしめ、顔色土の如く、焰の如き眸にて波羅門の面を直視せるまゝ無言にて彫像の如く突き立つてゐる）

波羅門丁　さあ答へろ。度胸を据えて返答をしろ。さうして返す言葉もなく立つてゐる態はまるで木偶だ　おゝ聖人の假面をかぶつた無細工な木偶だ。

太子　（卒倒せんとして僅かに自ら支へる）

波羅門丁　笑止な僞善者よ。假面を脱げ。己れが約束した布施を己れが拒むのなら、もつと露骨な堂々とした方法をとれ。汝は武力を以て男らしく俺と闘へ　雌を爭ふ二頭の猛獸のやうに、

此の燒山の上で鬪はう。

太子　……

波羅門丁　さあ、武器を執れ。（二つの劍を出し、一つを拔き放ち他の一つを太子に差し出す　鬪へ！

太子（無意識に劍を拔き放ち、波羅門丁をめがけて突きかゝらんとす）

（此の刹那突然電光閃めく）

太子（愕然として自己に氣付き、劍を地に投げ捨てる）

波羅門丁　何だ。劍を投げ出したな。汝は鬪ふことも出來ねえのか。卑怯者奴。ではいよ〳〵妃は俺の所有だぞ。

（雷鳴す）

太子　あゝ天よ。（地に倒れる）

波羅門丁　はゝゝゝ。須く箏こ。汝は今こそ知つたらう。汝が大それた身の程知らずの大願を立てたことを！　汝は今汝の大願を捨てゝ、俺の前で彼の恐ろしい誓言を取り消せ。しからば

俺は汝の負擔(おいめ)を許してやらう。汝が妃を布施することを免かれるためには唯其の一つの道が殘されてゐるのみだぞ。

太子　(身を起し。跪きて天を拜し一心に祈る)

波羅門丁　(太子の答へざるを見て) 取り消さねえな。よし。(つか／＼と妃に近寄り) 婢(しもめ)よ。俺に從へ。(妃の手を捕へんとす)

妃　(ぶるぶると慄へ哀願に充ちたる聲にて) 殿下!

太子　(妃の聲を聞くや思はず) 待て!

波羅門丁　取り消せ!

太子　(顏色を失ひ、膏の如き汗をたらたらと垂れる。はげしき苦悶と、心的鬪爭と祈禱との數瞬間の後突然立ち上り、兩手を天に延ばし) 誓言は神聖であるぞ　妃を汝に與へるぞ!

妃　おゝ。(地に倒れる)

波羅門丁　(一瞬間茫然として突き立つてゐるが軈て獸の如く飛びかゝつて妃の腕を摑み) 來い。

妃　（波羅門丁の手を振り放し）寄るな。無禮者！

波羅門丁　太子は汝を俺に與へたのだぞ。

妃　（太子にすり寄つて）殿下　あなたは――あなたは。

太子　無限の感じを含めて）曼坻よ　諸天の名によつて立てた誓は守らねばならない。

妃　（顚倒して）わたしを此の下司に――鬼にお與へ遊ばすので御座いますか。

太子　（一生懸命に）今退轉しては凡てを失ふのだ。

妃　いやです。いやです。あゝ考へても恐ろしい。私に出來ることか出來ないことかお考へ下さい。私はとても、とても――

太子　大願を捨てることは法界を亡ぼすことだ。

妃　あゝ死んでも！　私は死んでも彼に從ふものか！

太子　妃よ。汝の決心は三千大千世界を救ふのだぞ。

妃　あゝ世界も滅び失せよ。私が惡魔に嫁かなければならないなら！

太子　（一生懸命に）汝一人の犧牲は一切の衆生を救ふのだ。

妃　私は既に衆生のために二人の愛兒を施しました。それでまだ犧牲が足りないので御座いますか。

太子　汝自らを捨てゝ俺の成道を助けよ。

妃　おゝ。あまりに酷い――

太子　捨身せよ捨身せよ。

妃　人身御供をお強ひ遊ばすので御座いますか。

太子　おゝ。俺は強ひるぞ！　わが成道のために汝の身を鬼に供へさせるぞ！

妃　おゝ地獄よ、足下に口を開いて私の體を嚥へ込んでくれ。（地に倒れて慟哭す）

太子　（妃の泣く狀に辟易し乍ら）今の俺のために己れを失ふものは畢竟己れを得るのだ。無量劫に亘つて不滅の法身を得るのだ。今俺は如何なる犧牲を拂つても成道しなければならない。成道は今の俺にとつて、唯一の善、唯一の要だ。今俺が退轉するならば俺は一切衆生と共に汝

をも滅ぼすのだ。俺が成道した時俺は汝を鬼の手から奪ひ返すことが出來るのだ。汝に不滅の生命を與へることが出來るのだ。

妃　——

太子　曼瑤よ。汝を伴つて聖山に入らうとしたのは抑も俺の誤りであつたのだ。汝は忘れはしまい。城を出る時俺は汝を伴ふことを力をつくして拒んだのだ。その時汝がどうしても聞き入れぬ故俺は萬一の時には汝をも布施する覺悟を語り、汝は堅い決心を示してそれを拒まぬことを誓つた故、俺は汝を此の千載一遇の重大な旅に伴つたのだ。が運命は甘えることを許さなかつた。嚴しい恐ろしい、試練の時が今來た。捨つべきものを一絲だも携へて聖山に入ることは諸天のみ心に適はぬことであつたのだ。曼瑤よ。受くべきものを受けてくれ。俺の成道の礙きとならないでくれ。俺を助けて大願を成就させてくれ。そなたが若し今の俺をつまづかすならば億千萬劫は汝にとつて恐ろしい呪咀となるであらう。俺はそなたに强ひずには居られないのだ。

妃　（太子にしがみつき）助けて！　お助けなされて――

太子　行け。妃よ。（骨が砕けるやうに妃をしつかり抱きしめ、妃の眼の底に己れの魂を射込むやうに見入りながら）俺は此の瞬間俺の生涯のどの瞬間よりもそなたを愛してゐるのだぞ！　どの瞬間よりもそなたは俺のものなのだぞ！

妃　おゝ。（太子の腕の中にて慟哭す）

太子　（燃えるやうに妃を接吻し、やがて決然として妃を突き放つ）

波羅門丁　（圖々しく妃に近寄り）さあ、行かう。もういゝ加減にしろ！　俺に隨いて來い。連れて歸つて可愛がつてやる。（妃の腕を捕へんとす）

妃　（突然落ちたる劍を拾ひ波羅門丁をめがけて突きかゝる）

波羅門丁　（體をかはし、妃の腕首を捕へ劍を叩き落し）あぶないぞ！　際どい眞似をやりをつたな。はゝゝゝ。だが美しい女が危ない眞似をするのは味なものだて。（振り放さんとして身をも搔く妃の腕を鷲摑みにして）ふむ。何て柔かな、尋常なお手々だ。

妃　あゝ。どうしても――どうしても行かねばなりませぬか。

太子　行け。そなたは神聖な神聖なさゝげ物だぞ。人類の救主をつくるために供へられた贄だぞ。衆生の罪業を贖ふために、魔王の怒りをなだめるために選ばれた人身御供だぞ。おゝ。法界を溺らす大洪水を治めるために建てられた人柱だぞ。

波羅門丁　(妃の腕を捕へて引き立てながら) 婢よ。さあ。俺に從へ。今日から俺が汝の主だ。

妃　(引き立てられながら太子に畢生の力をこめて) あゝ。我が主、我が夫よ。私は今こそあなたの婢、あなたの妻で御座いますぞ。あなたのために私は行きます。あなたの大願を成就させるために、あなたの最も忠實な妻であるために、私は鬼に嫁きますぞ。

太子　おゝ。我が眼、我が玉、我がいのち！　そなたは今こそ正眞正銘の我が妻だぞ。夫の使命を助けるものこそ本當の妻だ。今こそ俺がそなたを選んだことを天に感謝するぞ。尊き尊き妻よ。あゝ我が母は我れを産んだが、我が妻は我を成したのだ！

妃　(汪然さして涙を垂れながら) あゝ。我が背よ。その御一言のために私は勇んで嫁きまする。

太子　我が妹よ。俺は汝を鬼の手から奪ひ返さずには置かないぞ。汝を掠取せずには置かないぞ！

妃　その日を、その日を信じて待ちまする。

波羅門丁　（いらだたしく）さあ。行かう。乘れ。（妃を馬に載せ自ら轡をさる）

妃　（馬上より振り返り、渾身の愛をこめて太子を凝視し）殿下！

太子　妃！

（瞬間沈默。此の時沛然さして大雨到る）

波羅門丁　ひどい雨だな。（天を仰いで）眞暗になつて降りやあがる。

妃　あゝ。鬼神よ。我がために哭け。葉波國の華、全印度の女の誇りなる曼坻は卑しき波羅門の醜男に嫁くのだぞ。（檀特山の方を仰いで）諸天よ。私をお守り下さい。お嘉し下さい。私を最も美しき女、最も忠なる妻とお賞め下さい。（傍白）私は絶體絶命の場合には自ら玉の緒を斷つことによつて、此の下司男の凌辱を避けることが出來るであらう。

波羅門丁　（ピシヤリと馬を鞭ち）　さあ。しつかり歩め。畜生奴。貴樣が載せてゐるのは印度第一の美人だぞ。

（妃振り返り〳〵波羅門丁に伴はれて退場）

太子　（妃の去るや張り詰めし勇氣の緩みたるさまにて、岩の上にくづれて慟哭す。やゝあつて立ち上り、大雨に濡れながら、暫らく身動きもせず石像の如く突き立つてゐる。總て奮然として蕎直に峻しき斷崖を攀じ下らんとす）

（電光、雷霆はげしくなる）

騎馬兵　（甲冑を裝ひ武器を持ち、息せき登場。太子を見るや馬を飛び下り）　殿下。これに渡らせられましたか一大事で御座いますぞ。

太子　何事だ。

騎馬兵　鳩留國の大軍が浸入致しました。

太子　なに。鳩留國の大軍が？

騎馬兵　彼等は須大延を眞先きに押し立てゝ攻め寄せました。大王親ら葉波國の全軍を率ゐて防ぎ戰はれましたが、戰ひ利なく味方は苦戰でございます。

太子　父王殿下の御安否は?

騎馬兵　大王は戰陣の先頭に立つて、亂れ足の立つた味方の軍勢を叱咤して、勇ましく奮戰せられましたが、味方は陣形が崩れて、遂に潰走致しました。何しろ敵は靈象を得て勇氣が百倍し、味方は士氣沮喪して居りますので。遂に葉波城は重圍に陷りました。

太子　天よ。葉波國を守らせ給へ。

騎馬兵　私は重大な使命を帶びて、單身重圍を破つて、殿下の後を追つて參りました。殿下、一時も早く御歸國下さい。殿下が御歸國下されば、人民は殿下の旗下に馳せ集つて侵入者を打ち退けるでございませう。敵は間諜によつて殿下が國を去られて、民心の離散したことを知り、隙に乘じたのでございます。祖國の安危は殿下の一身にかゝつて居りまする。一刻も早く御歸國下さい。御伴仕りまする。

太子　（默然として、瞑目し　俺は歸國致さぬぞ。

騎馬兵　殿下！　祖國は危殆に瀕して居りますぞ。

太子　俺は山に入らねばならない。

騎馬兵　兩陛下の御生命は風前の燈火の如くでございますぞ。

太子　（木石の如く）恩を捨てゝ無爲に入らねばならないのだ。

騎馬兵　若し一度葉波城が陥落致しますれば、神聖なる國土は荒らされ、祖先の墳墓は發かれ、處女は犯され、人民は永く他國の壓制の下に哭かなければなりませぬぞ。

太子　俺は不滅の國を求めて行くのだ。無關の土と無窮の民とを創りに行くのだ。

騎馬兵　殿下！　今は夢を追つてゐる時ではございません。祖國は現前に阿鼻の巷でございます。歸つてお救ひ下さい。人人は殿下の御歸國に唯一縷の望みをつないでゐるのでございます。事は切迫して居ります。夢をして夢を葬らしめて下さい。火は已でに放たれて居るのでございます。

太子　火宅た。火宅だ。三界を焚燒する劫火を治するものは唯法水あるのみだ。
騎馬兵　殿下！　即刻に御歸り下さい。
太子　俺は歸ることは出來ないのだ。
騎馬兵　殿下は兩陛下の御最後を傍觀遊ばすのでございますか。無辜の民を見殺しに遊ばすのでございますか。辱かしめられる少女を！　虐殺される嬰兒を！
太子　（死灰の如く）俺は山に入らねばならないのだ。
騎馬兵　殿下！　敢て申しまするが、一大事を招いたのは靈象を敵國に布施なされた殿下の御責任でございますぞ。
太子　（心內に苦悶しつゝ聲を振りしぼつて）惡魔よ。退散せよ。（驅け出さんとす）
騎馬兵　（追ひすがつて）お待ち下さい。（無限の哀願と詰責とをこめて）殿下はどうあつても御歸國なされませぬか。
太子　（決然として）金輪際歸國は致さぬぞ。（檀特山を指して）俺はあの山に行く！　あの山こそ俺

が據つて以つて魔軍を防ぐ法城だ！

騎馬兵　（急にがつかりしたる態にて茫然自失する。一瞬間沈默。軈て奮然地を蹴つて馬に飛び騎り、天を仰いで）おゝ鬼神よ聞け。而して左右に命じて記錄せしめよ。（無限の怨嗟を含めて）薬波國の太子須太拏は祖國を滅ぼし、父母を殺し、人民を賣つたのだぞ。（熱涙をハラハラ滾し）俺は最後まで鬪はう。祖先の墳墓を枕にして死なう。（馬を鞭打ち、豪雨を衝いて退場）

太子　（後を見送り大雨に打たれながら、巖上に立つ。一瞬間沈默。軈て枯木の如く卒倒す）

（雨徐かに止み、雷、電去り、黑雲次第に四散し、青空現はる。軈て檀特山の一角より聖なる白雲湧き出でゝ、續き、微妙の音樂[illegible]に聞こゆ）

帝釋天　（侍童を隨へて天に現はる）善哉。善哉。太子。須太拏。

侍童等　（天鼓を打ち鳴らし聲を合せて歌頌す）

一人出家則九族生於天。一人出家則九族生於天。

（大地六種震動。異香薫じ、虚空より花降る。帝釋天と侍童消ゆ）

水邊

人物

北川恭助　倫理學者
直子　その母
恭一郎　その長男
お村　恭一郎の母
住山高子　恭助の前の戀人
女中
書生

場所

明石の海岸

時

現代

初秋

第一場

直子の居間。質素な清潔な部屋。部屋は廣いわりに家具や裝飾が少ない。正面右手に窓。窓は開放してある。庭をへだてゝ海を望む。淡路島と燈臺見ゆ。朝。

直子は新聞を讀んでゐる。お村は着物を縫つてゐる。

（間）

直子。たう〳〵夏もすんだのだね。今日から納涼場も閉ぢるさうだ。

お村。涼しくなりましたからね。避暑の客などももう大抵歸つたやうです。濱邊は淋しくなりました。

直子。これから又靜かに暮すんだね。今年の夏は本當にたのしかつた。私は賑やかなことはそんなに好きな方ではないのだけれど、今年は本當に久し振りに暢びりした氣持で海水浴もしたし、人の混み合ふのだつてやつぱり樂しい氣持もしたんだよ。

お村。本當に今年のやうに樂しい夏はございませんでしたわね。ヨットで淡路島まで行つた時なんか。

直子。（しんみりして）私恭助があんなに樂しさうなのを見たのは本當に久し振りだよ。やつぱりあれの始めての仕事が世の中に認められたのだからね。

お村。（急に涙ぐんで）あたしどんなに其の日を待つてゐたでせう。

直子。これであれも男の數の中に混つて誇りを持つて生きてゆくことが出來るやうになつたんだ。私もこれで安心だ。

お村。××の大學の教室では恭助樣の今度のお仕事を隨分認めて褒めてゐられるさうでございますよ。

直子。學問の上から來る名譽はどんな名譽よりも私は立派だと思ふのだよ。世間にぱつとしなくてもね。

お村。さうでございますとも。少しの尊敬してゐる人たちに認められたいといつも云つていらつ

しやいます。だけどやつぱり山の上に立てられた城は隠れることは出來ませんわ。段々評判になつて來るやうです。

直子。（喜びを抑へて）私はあれの爲にさう云ふものを見くびつてやりたいのだよ。あれが仕事が出來なくて長い間苦しんでゐた時には見向きもしなかつた癖に。今になつて——

お村。あたしは恭助様を信じてゐましたわ。どんなに平凡にお見えになつてゐる時でも、きつと立派な仕事をなさる時が來ること。——とう／＼來たんですわ。

直子。この頃は身體の方もめつきりと元氣になつて呉れたやうだ。本當に有難い。（窓の外で子供のしきりに遊び戯れてゐる聲が聞える）あれがあんなに元氣になつたのも皆お村さんのお蔭ですよ。

お村。どう致しまして。（窓の傍に行く）恭ちやんや。そんなに垣に登ると海に墜落ちますよ。

恭一郎。（窓の外にて）墜落ちないよ。今船が通るんだよ。

お村。さうかい。部屋に上つていらつしやいな。

恭一郎。嫌だよ。

お村。(其のまま海の方を見て何か考へてゐる)

直子。(先からの考のあとを追ひ乍ら) それに お前さんは世嗣を生んで下すつたのだ。これからは皆一つになつて幸福な日を樂しまなくては、私達はそれを招き寄せたんだから。

お村。奥様、今の幸福がいつ迄も續くんでございませうか。

直子。續かなくつてさ。私達がそれをこわすやうなことをしない限りは。

お村。私何だか怖しくなりますわ。あんまり幸福過ぎて。若しか何か魔がさして、この幸福が壞れて了ひはしないかしら。

直子。大丈夫だよ。私達に幸福が來たのは偶然ではないのだから。云はゞ私達の愛の力が生んだのだから。私達の間の愛さへ變らなかつたらね。

お村。若しさうだつたら私本當にどんな眞心を盡してゞも――。

直子。(涙ぐんで) お前さんの捧げた心は私本當に有難く思つてゐるのだよ。今日の日が來たのは

私半分以上お前さんに負つてゐるこさへ思つてゐるのだよ。私は感謝の印（しるし）にお前さんをもつこ幸福にして上げたいと思ふのさ。お前さんを正式に恭助の妻に——

お村。あら奥樣。

直子。冗談ではありませんよ。それは初め反對だつたつたのは私だつたかも知れないさ。だけごお前さんのまごゝろのある氣質もよくわかり、それに恭一郎といふものがある以上、さうするのが當り前ですからね。

お村。（昂奮しながら）だつて私なんか………

直子。恭助の妻こして恥かしいここはありませんよ。

お村。あんまり過ぎて。（感謝をこめて）奥樣 あたしもうこれ以上の幸福を望まうこは思ひませんわ。

直子。（あはれむやうに）望んでもいゝのだよ。お前さんのやうに出過ぎるこいふここのない人は。

お村。私やつぱり侍めがよろしうございますわ。一生涯恭助さまのお側にお仕へしてお世話をさ

せていたゞいてゐればそれで結構でございますわ。

直子。（感動して）本當にお前さんはよくやつてくれますよ。恭助はあれで決して機嫌のこりいゝ奴ではないんだから。お前さんは彼にはなくてはならない人だ。恭一郎のためにも――（强く）恭一郎の母が恭助の妻で無いこしたら北川の家は義しさの缺けた家こいふこミになる。

お村。（訴へるやうに）だつて奥樣。駄目でございますわ。

直子。どうして。

お村。恭助樣はそれがおいやなんですもの。

直子。心配することはないよ。心配することは無いよ。わたしに任せてお置き。お前さんの心はわかつてゐるのだから。

お村。（考へ乍ら）奥樣此頃恭助樣の御容子は少し變だこお思ひなさいませんの。

直子。どうして。あんなに快活にやつてゐるではないの。

お村。さう努めてはいらつしやいますけれど、どうもこの夏とは違ふやうです。どうかすると考

へ込み遊ばして。何か起つてゐるのではないか知ら。

直子。そんなことは無いよ。あれが考へ込むのはいつものことなんだから。

お村。さうでせうか。

直子。若しお前にさう見えるとしたら、餘り勉强に耽り過ぎるせいなのだらうよ。

（間）

お村。奥様、恭助様はまだあの方のことを思つていらつしやるのではないんでせうか。――高子樣のことを。

直子。そんなことが有るものですか。それは今だつて思ひ出すだらうさ。だけどそれはほんの昔の思ひ出としてだけですよ。十年も前のことなんだし、あれきり音信も何もないのだから。

お村。あの方は結婚なさつたんでせうか。

直子。どうだかね。何でもある華族の家に嫁いだつたと云ふ噂があつたんだが。はつきり分らないんだよ。始めは恭助の方であの人の安否を氣づかつて、容子を探つてゐたんだけれど、向ふで

は出來るだけ隱さうとしてゐるここが分つたので止して了つたのだよ。だけどそれはもうずつと前のここで、それつきり樣子は分らないんだよ。

（恭助散歩から歸つて來る。少し疲れて見える。）

お村。お歸り遊ばせ。
直子。お歸り。
恭助。舞子まで行つて來ました。
直子。そんなに遠くまで。
恭助。海岸を歩いてゐたらとう〳〵舞子まで行つてしまつたんです。
直子。そんなに歩いて疲れなかつたかい。
恭助。少し。だが却つていゝ氣持です。
お村。あんまり過ぎるといけませんよ。
恭助。うむ。だが少しは練らさなくてはね。やつぱり景色は歩いて見なくては駄目だね。なかな

かいゝところがある。

直子。内海の景色は大きくはないけれど溫かで親しみ易いからいゝ。

恭助。よく見るこ非常に豐かな複雜な景色ですよ。内海は世界の三つの美しい航路の一つこ云ひますからね。

お村。此の海峽はめづらしく海が深いので、いゝ色なんですつてね。

恭助。海が深いといふので思ひ出したが、昔允恭天皇の御代に海の底に眞珠があつて、海士(あま)が勅を受けてそれを探りに入つて死んださいふのは明石の海ださうだ。

直子。あの謠曲の「海士」の傳說なのかい。

恭助。さうです。その傳說は不思議に私を惹きつけるんです。それを知つてから明石の海が變に好きになりました。

お村。ではその海士は眞珠は探るこミは出來なかつたのでございますか。

恭助。あまり海が深かつたので持つてあがつて帝にさゝげるこすぐ息が切れたんだ。(間)深い海

の底の眞珠――私はそれを眞理のシムボルと考へて見たい。學者は海に潜い眞明の底を探つて眞理を採り、それを神にさゝげるのだ　その時は悦んで死ぬるのだ。

直子。その暗闇から採り出した眞珠を明るみの光で泌々と眺めたいものだね。

恭助。それが許された時にはね。それこそ學者の幸福です。それは元より私の願ふ所です。私はそれを避けやうとは思ひません。感謝して享けたく思ひます。だが眞理は海の底の孤獨な貝のやうに容易く達することは出來ないもので、それを得るには命を賭けなくてはならないのです。（考へ乍ら）命ほど大事にしてゐるものを。

直子。お前が學問の爲に淸い捧げた心でゐることは私も尊く思つてゐますよ。それを思つてつましい生活の中にも誇りを感じてゐるのだよ。

恭助。さうです。贅澤と云ふ氣持は學者には似合ひません。眞理に捧げた、貧しい心を損ひますから。

お村。今のお仕事は大分捗どつたのでございますか。

恭助。今日もそのことを考へ乍ら歩いたんだよ。今取扱つてゐる問題は精神生活に於ける斷念の意識に就いてなんだが。矢張り仲々考へをまとめるのは容易なことではない。色々な深い問題とつながつて來るもんだから。

（恭一郎部屋の中に突進して來る。）

恭一郎。來〻御覽よ。來て御覽よ。ヨットを走らせるんだから。

恭助。お前のヨット？　お前が拵へたのかい。

恭一郎。あゝ僕拵へたんだよ。

恭助。（恭一郎の頭を撫で乍ら）偉いね。

恭一郎。來て御覽よ。

恭助。（笑ひ乍ら）お父さんは本が讀みたいんだがね。

恭一郎。（お村に）母ちやん。見て頂戴。

お村。（笑ひ乍ら）私は御用がありますよ。

恭一郎。（直子の手を引張り乍ら）お祖母ちやん。來て御覽よ。よく走るんだから。

直子。（引張られ乍ら）さうかい。見せて頂戴ね。

恭一郎。それはよく走るよ。赤い帆を掛けて。（直子と恭一郎退場）

（間）

恭助。（窓の傍に行き恭一郎達の方を一寸見るが、直ぐに何か探し求めるやうに海べを眺め聽て憂鬱な表情となり凝と立つてゐる。）

お村。お召更なさいますか。

恭助。あゝ。後で。（少しまぎらすやうに）嵐になるかも知れないな。あんな雲が出たから。

お村。（窓の側に行く）沖の舟が歸つてまゐりますわ。

恭助。御覽。何だか可愛い氣がするぢやあないか。彼の親舟の後に子舟が素直に曳かれてついて來るのが。

お村。本當にね。よく犢が牝牛の後にくつついて、ついてゆくのを見ますが、あれを思ひ出しま

すのね。

恭助。私たちは一つだ。何ものも私たちの平和ミ結合を毀すことは出來ないのだ。

（間）

お村。（考へてゐたが）人生は海のやうだと、あなたがよくおつしやいますが、かうして目の前に擴がつてゐる海や、向ふの山脈の上の雲など見てゐますと、何だか寂しい、側り知れないやうな氣が致しますのね。あなたと始めてお目にかゝつたのもこのあたりの海邊でした。それから又こゝで斯うやつて暮すやうになる迄には八年の月日が經つてゐます。其の間にどれ丈色々な出來事が有つたでせう。

恭助。不幸と孤獨との月日だつた。病院から病院へ、山の湖から、海岸の溫泉へ、其の間お前は氣むらな私の看護ミ守役ばかりして來たのだ。

お村。だつてその忍耐が報ひられて、仕合せな日が來たんで御座いますわ。（少し調子に乘つて）幸福な時に通つて來た佗しい生活を振返つて見ることは却つて樂しいもので御座いますわね。

（間。だんだん暗い顏になる）だつてあなたは今でもお寂しいのですわね。………あたしだけは幸福でも………

恭助。寂しいのは寂しいさ。だけどそれだからと云つて幸福でない譯はないぢやないか。わしには仕事と云ふものがある。可愛い子もある。それにお前が側にゐて呉れる――

お村。でもたつた一つの失はれたものが歸つて來ない限りは。

恭助。…………

お村。ねえ恭助樣。あなたは此頃何か考へていらつしやることがお有りになるので御座いませう。

恭助。（憂鬱になつて）いや、別に。

お村。解りましてよ。心配な出來事でもあるのではないのですか。

恭助。別に何でもないのだ。心配することはないよ。過去の痕跡と云ふものは直ぐになくなるものぢや無い。だがそれは只それ丈のことに過ぎないんだ。氣にしないがいゝ。

お村。あたしそれをお訊きしたいと思ふのでは御座いませんのよ。お訊きしたつてお慰めする力

が無いんですもの。これまでだつていつもさうでした。だけご氣にはなりますわ。何だかあたしのせいのやうな氣がするのですもの。

恭助。そんなことは決して無いよ。わしにはお前の爲にごんなに慰めを受けてゐるだらう。わしの心の靜けさはお前に依つて保たれてゐると云つてもいゝ。お前はわしにとつて港のやうなものだ。其中でわしが嵐を避けて安心して休むことが出來るのだ　わしが難破しないで濟むのはお前のある爲だ。

お村。あたしなんか只あなたの身の廻りのお世話だけ出來る丈で御座いますわ、本當のあなたのお心の中のお苦しみには觸れることは出來ないのです。それを思ふと時々寂しい、寂しい氣が致します。

恭助。決してさうでは無いよ。ものを理解するのは智識ではなくて、愛なんだ。解らないやうに見えても、實はお前位わしの腹の中の解るものはないのだ。

お村。あたしは思ひますの。あたしはあなたを幸福にする女になれなくても、あなたに縋くてや

らないと思はれるやうな女になりたいと。

恭助　お前はわしになくてはならない女だ。お前が無くてはわしは生きて行けないやうになつてゐる。深い〳〵所で緣を結んでゐる　それにわしの子を生むだ者はお前丈だ。わしには子種はもうないのだから。恐らくこの地上の凡ての女の中で一番緣の深いのはお前なんだ。

お村。（感動して）それを思ふと本當に心强くなりますわ。あなたの血をこの地の上に繼ぐ者は私なんです。あなたの氏には私の血が混つたんです。（間）だけどさうなつたのはあなたの本意ではなかつたんですわ。私が弱くてあなたにさうおさせして了つたんですわ。私はあなたの尊い理想を壞させたんです。

恭助。それはもう云はぬがいゝ。私が弱かつたのだ。アダムが墮ちる時にはイブが誘ふやうに出來てゐるのだ。イブの方が惡いとは云ひたくない。それは始めに立てた理想のやうに何處までも主從として暮して來たら一番美しかつたと思はないことはない。だが其處には攝理と云ふやうなもの も考へられる。今となつては恭一郎の 出來たことはどんなに嬉しいだらう。

出來た（は幸福しなくてはならない。恭一郎を立派に育て上げることは、原因が過失であればあるだけ私達の神に負ふてゐる義務だ。

お村。本當にあの子は立派な人間に育て上げたう御座いますわ。あなたの氏の譽となりますやうに。

恭助。（眞面目に）只大事なことは私達はやつぱり前の理想で暮して行かなくてはならない。一度墮ちたからと云つてそれを續けてはいけない。それを機縁にしてもつと愼しみ深くなつて、淸く暮して行かなくては。

お村。お心によく解つてゐますわ。私は出過ぎたことを願ひは致しません。（間）ですけれど今の幸福が壞れるやうなことさへ御座いませんでしたわねえ。（涙ぐみ）本當にいつ迄もお縋り申させて下さいましね。

恭助（動かされて）いつまでも側にゐて吳れ。私を信じて――

お村。（寄り添うて）信じあげますわ。

（直子庭からあがつて來る。）

直子。（笑ひ乍ら）子供つて勝手なもんだね、おもちやのヨットを二人でいぢくつてゐると、向ふから本物のヨットがやつて來たのさ。あのホテルの客人用のが。するとボ坊主奴、私をうつちやらかしてその方へ駈け出して行つてしまひやがつた。さんぐ〵手傳はせて置き乍ら。

お村。（笑ひ乍ら）ひどい奴で御座いますね。

恭助。（同じく笑ひ乍ら）誰だつて本物の方が面白いからね。

直子。何でも誰かヨットの中から合圖をしたものがあるらしいのだよ。恭一郎の方でも帽子をあげて合圖をし乍ら駈けだしたのだから。

お村。子供つてすぐに誰とでもおなじみをこしらへるものでございますわね。

恭助。あの子は少しませてゐる。

お村。なるだけ無邪氣にさせてゐるんですが。

直子。なあに頭のいゝ子は皆ませるもんだよ。恭助なども さうだつた。

恭助。ホテルももう淋しくなつたらしい。夏の盛りには火が明るく點(とも)つて舞踏會(ボール)なぞやつてゐたつけが。（何か追想し乍ら）此の間あの側を通つた時には隨分さびれてゐた。（窓の側に行く。急に眞青になつてよろめきかける。）

直子。お前どうかおしかい。

恭助。いゝえ。少しめまいが。

お村。めまいが？

恭助。なあに何でもないのだよ。すぐなほるのだ。

直子。あまり歩き過ぎて疲れたんだよ。

お村。（不審さうに一寸外を眺め、何ものかにおそはれたやうに暗い　になる。）

恭助。もういゝのです。何でもないのです。

お村。（心配さうに）いゝんですか。

恭助。大丈夫だ。（間）わしは少し臥(やす)まう。

直子。それがいゝよ。

（恭助次の室に入る。お村附き添ふて退場）

直子。（窓から外を眺めて）こう〳〵嵐になるのかな。

（直子退場）

（お村直ぐ引返して來る。恭助の帽子と杖と書物とを持ちて退場しかける。恭一郎庭から上つて來る。）

恭一郎。母ちやん。風が吹くよ。

お村。お前、そのおもちや誰にもらつたの。

恭一郎。小母ちやんに。

お村。小母ちやんに？

恭一郎。あゝ。ホテルにゐるのだよ。かあいがつて吳れるよ。誰にも云ふなと云つたんだけれど。

お村。お前その小母ちやんがどうして知つたの。

恭一郎。家の裏の原つぱによく來るんだよ。

お村。知らない人からものをいただいたりしてはいけませんよ。
恭一郎。知つてるよ。お父さんやお母ちやんのことをよく訊くよ。
お村。え？　私達のことを訊くつて。
恭一郎。あゝ。よく訊くよ。今日も訊いたよ。今日は泣いてゐたよ。
お村。泣いたつて？
恭一郎。（淋しさうに）もうお別れなんだつて。
お村。あ、、（顚倒して）やつぱりさうだ。やつぱりさうだ。あの後ろ姿は。恭ちやんや、もう逢ふのではないよ。逢ふのではないよ。（無意識に恭一郎を抱きしめ）もう決して二度とその小母ちやんと口をきいたりしてはいけないよ。あゝ。とう〳〵時が來たんだ。（泣きながら）私どうしたらいゝのだらう。
恭一郎。（泣き出しさうになつて）母ちやん。母ちやん。

第　二　場

恭助の部屋。左右にドア。正面に窓。海を望む。風はひどいが空は晴れてゐる。
同じ日の夜。燈台には火が點つてゐる。書棚。ピアノ。額には靜物畫が多い。

恭助。（窓の下の籐椅子に腰を掛け考へ込んでゐる。立ち上り部屋をあちこち歩き、聽てよろめくやうに窓の傍に行き、窓を開く。嵐が吹き込む。何物かを餓ゑ求むるやうに外の方を見廻し、失望したやうに溜息をつき、窓を離れ、再び椅子に腰を掛け考へに沈む。）

（直子左のドアから登場。入口に一寸立ち止まり、恭助を見るが、聽て靜かに側に寄る。）

直子。氣分はどうだい。
恭助。（顏をあげ）もういゝのです。今朝のは何でもなかつたんですから。
直子。（急いで窓をしめ）お前 窓もしめないで。こんなに風が吹き込むのに。（恭助の側の椅子に靜かに腰を卸す）お前氣をつけてお呉れよ。折角丈夫になりかけてゐるんだから。

恭助。（何か考へ乍ら頷く。）

直子。（恭助の顔を見乍ら）少し話してもいゝのかい。

恭助。どうぞ。

直子。少しお前に相談して見たいことがあるのだけれど。

恭助。何ですか。

直子。お村さんのことだがね。お前どうお思ひだい。

恭助。何々？

直子　お前に氣に入つてゐるのだらう。

恭助。忠實な女だと思つてゐます。

直子。私も本當にいゝ人だと思ふよ。眞心があつて…………品だつて惡くはない。お前がどう思つてゐるか知らないけれど、あれを一層のことお嫁にしたらどうだらう。

恭助。（憂鬱な顏をする。）

直子。（熱心に）前から話したいと思つてゐたんだけれど折がなかつた。今日はあることで早く云つて置きたい氣になつたのたよ。あれはお前になくてならない人なんだし、今日の日が來たのは隨分あれの手柄なのだから。

恭助　私はやつぱり今の通りで暮して行きたいのですが。

直子。今の通りでも別に構はないやうなものだけれど、かういふことはわたし正式にはつきりさせて置く方がいゝと思ふよ、名を正しくすることは禮に適ふのだから。

恭助。世間に對することならそんなに氣にしなくてもいゝと思ひます。

直子。家の内のことだつて、きまりをつけた方がいゝと思ふよ。恭一郎の爲には猶更だ。あれが大きくなるにつれてさうして置かないと變になるだらう。

恭助。普通の家庭の通りでなくつてもいゝぢやありませんか。もつと大事なことがあるんですから。

直子。さうばかりもゆかないよ。お村さんだつてちやんとさうなればそれだけの氣位が出來るん

だし。それにそんなに喜ぶだらう。

恭助。あれはそんなにそれを望んではゐないでせう。

直子。（強く）どうしてそんなことがあるものですか。お前には女の氣持と云ふものが解らないのだ。いくら優しくても男だから。それは今のまゝでも不足には思はないだらうさ、だけどお腹の中ではどんなにそれを願つてゐるだらう。

恭助。（苦しさうに）然し私とお村との關係は元からさう云ふ關係ではなかつたのですから。

直子。だけど今となつてはね。恭一郎と云ふものが出來た以上は。

恭助。（焦々し乍ら）それを云はれると私は實に苦しいのです。結局私が惡かつたんです。然し一度誤つたからと云つて、それを續けるのは猶いけないと思ひます。

直子。私はそれを責めやうと思ふのではないよ。だけど恭一郎の母がお前の妻でないことになれば――

恭助。（苦しさうに默つて考へてゐる。）

直子。お村さんはお前の手掛(てかけ)と云ふ風にされないだらうか。

恭助。不愉快ではありますが、さうされるかと云ふことよりも、實際どうあるかと云ふことが大事と思ひますから。私達は夫婦になる一番大事な動機が充分にないのですから。

直子。（もどかしさうに）だけど子供が出來たんだから

恭助。（焦々して）それは私の過失――罪悪です。私はそれを負ふて行きます。誰の前にも隠さうとは思ひません。

直子。強ひてすゝめるのぢやないのだよ。恭一郎やお村さんを可哀想に思つたものだから、

恭助。（益々焦々し乍ら）お母さん、私だつて可哀想には思つてゐるのです。

直子。まあよく考へて見るがいゝよ。（間）こんなことを云ひ出して變だけれど、お前まだ前の人のことを思つてゐるのではあるまいね。若しそれだつたら良くないよ。

恭助。（眉をひそめる。）その話は今晩は止して下さいませんか。少し考へ事がありますから。

直子。（何物かを憎むやうに）しつこいやうだけれど、お前そのことだけはふつつりと思ひ切つてお

了ひよ。そのことでこんなに長く祟られてはたまつたものではない。

恭助。（立ち上る）私はちよつと出て來ます。

直子。この嵐にかい。お止しよ、お前。

恭助。少し頭が亂れましたから。

直子。（立ち上り）氣分に觸つたら御免よ。出掛けるのはよくないよ。

恭助。直ぐ歸ります。

（恭助右のドアから出て行く。）

直子。止せばいゝのに。風が一等毒だのに。（間。椅子に歸り）どうも少し變だ。

（お村蒼ざめた顔をして左のドアから入つて來る。）

お村。奥さま。

直子。お前。どうかおしかい。

お村。私もう默つて居られないんです。高子さんがいらしたんです。

直子。え？　高子さんが？　お前本當かい。

お村。本當です。家の廻りに度々來るらしいのです。昨日ちらと後姿を見ました。きつとあれがさうです。

直子。お前見たつて？

お村、僕てゝ歸る所を見たんです。ホテルに泊つてゐてこの夏から度々家の廻りに來て、恭一郎に色々家のことを訊くらしいのです。

直子。お前。それは確かかい。

お村。確かです。恭一郎に聞いたのですから。

直子。恭助はそれを知つてるのかい。

お村。きつと知つてらつしやいます。だからどうも變だと思つてゐたのです。

直子。ふうむ。（考へる）

お村。（泣き作ら　皃様、あたしどうしませう。今朝から考へてばかしゐたんですけれど。

直子。心配することはないよ。心配することはないよ。（反抗的に）今になつてやつて來たつて。
私がついてる限りは恭助に馬鹿な眞似はさせはしないから。それにあれだつて考へるだらう。

お村。だつて恭助樣は今でもあの方のことを思つていらつしやるのです。それはもうずつと思つていらつしやつたんですから。私には分つてたんです。

直子。大丈夫だよ。私達の平和を横合から飛込んで來て壞されて堪るものですか。本當にあの人の爲に私達はどんなに苦しんで來ただらう。あれだつて眞逆一度蹴つた女を。

お村。だつていくら蹴られたつて可愛い人は可愛いんですもの。あゝ。あたしもう駄目で御座いますわ。

直子。お前しつかりおしよ。氣を弱くしては駄目だよ。お前の幸福を守るがいゝ。お前にはそれ丈の權利があるのだから。

お村。あたしいつか斯う云ふ日が來るのではないかと畏れてゐました。あたしの幸福は其の日までなんだと、諦めてゐました。その時が來れば潔く讓らうと思つてゐました。だけど今とな

つて見ればあたし迚も――。

直子。當り前だよ。そんなことが出來るものですか。

お村。（烈しく泣き乍ら）奥様、あたし今の幸福をなくする程なら死んで了ふ方がましで御座いますわ。

直子。さうだとも。幸福はお前のものだ。誰だつてお前にそんなことをさせることは出來ないのだよ。人間の心のあるものは、お前本當にしつかりおしよ。

お村。だつてどうしたらいゝのでせう。あたしなんか………

直子。心配することはないよ。困るのはお前だけぢやない。私にも小さい者の幸福にも懸つてるんだ。私達は一つになつて私達の幸福を侵入者から守らなくてはなりません。

お村。奥様。お願ひです。お願ひです。今の幸福を無くしないで濟むのならあたしどんなことだつて致しますわ。

直子。（涙ぐみ）さうだよ。お前。たゞかふだけの用意はしてゐなくては。

（女中登場）

女中。おいひつけのものが出來ましたんて御座いますが一寸見て頂きたう御座います。

直子。わたしが恭助によく云つて置くが、お前もね。心配せぬがいゝよ。

（直子と女中と退場。引きちがひに恭一郎積木の玩具を持ちて登場。）

恭一郎。母ちやん。積木をするんだよ

お村。あゝ。あとでしませうね。

恭一郎。今して頂戴よ。

お村。母ちやんは少し氣分が惡いから。あとね。

恭一郎。（母の顔を見て）嫌だな。母ちやん泣いてるの。（並べかけた積木をうつちやらかして）母ちやん。母ちやん。（抱き付く）

お村。（子供を抱いて）少しお腹が痛むのだよ。あつちへ行つてねえやとお遊び。（積木を箱に片づけてやる。）

恭一郎　（素直に笛を持つて）あとでして頂戴よ。

（恭一郎淋しさうに退場）

お村。あゝ、どんなことをしたつてこの家にゐなくては。（ぐつたりと椅子に腰を掛け考へ込む。）

（恭助蒼ざめて右のドアより入つて來る。）

お村。（迎へる。）お歸り遊ばせ。

恭助。ひどい嵐だ。（椅子にかける。）

お村。こんな晩に外出したり遊ばして。

恭助。（不安さうに）頭が惡いものだから。

（間）

お村。心配事がおありなんでございませう。

恭助。いゝや。

（間）

恭助。（不安さうに、立ち上り、窓の側にゆき、外を眺める。）海が大分荒れてゐる。
お村。恭助さま。あなたは探していらつしやるのでせう。
恭助。（打たれたやうに、驚きたつたまゝ反射的に）何だ。
お村。私は知つてゐます。あなたは高子さんを探していらつしやるんです。其邊にうろついていらつしやりはしないかと思つて。
恭助。…………
お村。おつしやつて下さい。解つてゐるのですから。どうも此頃は御樣子が變だと思つてゐました……私は今朝庭であの方を見たんです。
恭助。（お村の側にゆき）ゆるしてくれ。お村。わしも今朝高子さんを見たんだ。一週間前ホテルの庭で一寸高子さんらしい女の姿を見た。けれども私は信じられなかつた。だがその時から氣が落着かなくなつてゐた。今朝見たのはやつぱり彼の人だつた。私は今朝から頭がぐら〳〵してゐるんだ。

お村。それをわるいこは思ひません。あたりまへなんですもの。だけご恭助樣。（急に泣き乍ら跪いて）私を棄てないで下さいまし。
恭助。お前何を云ふのだ。
お村。いゝえ、私は考へないではゐられないんです。一番怖ろしいことを。これからごんな事になるかこ思ふと――
恭助。お村、高子さんはもうやつて來ないだらう。
お村。そんなことがあるものですか。
恭助。見附けられないやうにして來てゐたんたらう。今朝びつくりして慌てゝ歸つたんだ。もうきつこ來ないだらう。
お村。（嫉妬を浮べて）それを氣使つていらつしやるのでせう。來ないでゐられるものですか。
恭助。よし來たつてわしこ會ふ勇氣はないだらう。あゝ云ふ事になつて別れたんだから。
お村。あなたは會はないではいらつしやらないでせう。御自分で探し出してゞも。

恭助。（沈默）

お村。あなたはあの方の事ばかり思つていらつしやるのですもの。此の風の中を外へいらしたのはきつと探しにいらつしやつたんです。

恭助。そんなに興奮しないで。

お村。（亂れて）あなたが未練がおありになるのはもつともです。あたしそれを何とも云ふことは出來ませんわ。だけど私の心になつて下さいまし。淋しくて、淋しくて――いゝえ、淋しい位ならいゝんだけれど、あゝあたし怖しくつて。

恭助。心配せぬがいゝ。わしを信じて呉れるなら。

お村。信じてゐますけれど……だつてあなたがお惡いのではないのですもの。どんなことをなさつても、あたりまへなんですもの。私は何とも云ふことは出來ないんです。

恭助。權利があることなら何でもするやうなわしではない。それにお前は心配しすぎてゐる。どうなるか解りもしないのに。高子さんの姿をちらと見た、たゞそれ丈のことぢやないか。あ

の時からは十年こ云ふ隔りが出來てゐるんだ。

お村。十年間のあなたの生活は一日だつてあの方を離れては考へられません。あなたの思想も、お仕事も皆あの方の思ひ出が基になつてゐたんです。

恭助。それは本當だ。今のわしはあの人がなかつたら出來上らなかつたらう。だがそれは別問題ではないか。

お村。でもあなたはまるで捉へられていらつしやるんですもの。あの方を御覽になつてからこつち、まるで違つていらつしやるんですもの。

恭助。お村、ゆるしてくれ。わしは無神經な人間ぢやない。お前はわしに平氣でゐろと云ふのかい。

お村。どうして、そんなことを。只こはいものだこ思ひます。戀の力と云ふものは。八年間のいろ〳〵な生活や、子供や、あんなに靜かに見えたあなたの落ち着きや、それらがみんな一目あの方の姿を御覽になつたゞけで、まるで無力になつて了つたんですもの。私は想像してゐな

いことはありませんでした。かう云ふ時が來ることを。だけど本當はもつと怖ろしいんですもの。

恭助。お前は誇張して考へてゐるんだ。私達の間には運命の造つた壁が立つてゐるんだ。

お村。あなたは一途な情熱で屹度それを突破つてお了ひになるでせう　あなたの御氣質では。

恭助。（うなされるやうに。）それが突き破れるものなら！

お村。（身慄ひする。）お願ひです。お願ひです。私と約束して下さいまし。私を可哀想だと思つて下さいますなら。（恭助の前に身を投げ出して）私と結婚して下さい。

恭助。出し抜けに。お前そんなことを云つたことはこれまで一度もないぢやないか。

お村　一生のお願ひです。私や恭一郎を可愛いと思つて下さるなら。あたし今日までそんなことを思つたことも御座いませんでした。そんな出すぎたことを。いゝえ、それどころでは御座いません。あの方がいらしたら、私は何時でもゆづらうと思つてゐました。あの方がいらつしやるまであなたをおあづかりしてゐるんだとさへ思つてゐました。だけどいざとなつて見

ると其んなことは只の空想でした。とても出來ないことが解りました。あたし今の幸福をなくする程なら死んでしまう方がましで御座います。
恭助。落ち着いてくれ。お村。お前の氣持は解つてゐる。だが其事に就いてはこれまで幾度も話したぢやないか。二人の間には完全に理解が出來て、お前もちやんと得心してゐてくれたぢやないか。
お村。今朝あたしは始めて本當にあたしの地位を知つたんです。どんなに危い所にゐるのかと云ふことを。あたしは自分が命としてゐるものを安全にして置かなくては。
恭助。八年間のお前との歴史を考へて見ろ。わしがそれを無視出來ると思ふのか。
お村。同じお心が高子さんとの歴史を復活させるんです。あたしは土に噛みついても私の幸福を、命を守らないではおきません。
恭助。お村、どうしたのだ。いつものお前にも似合はない。もつと落付け。
お村。いゝえ。落付いてはゐられません。こんなに脅かされてゐるのに。競爭者が、敵が窓の下

まで來てゐるのに。

恭助。敵が？

お村。（全く亂れて）さうです。敵です。今のあたしにとつては。

恭助。お止し。さう云ふ考へ方は卑劣だ。少くとも眞直ぢやない。

お村。（烈しく泣き乍ら）だつて あたしにとつては恐ろしい人なんです。あたしから命を、子供から母親を奪るかも知れない人ですもの。あなたの大事な人をこんな云ひ方をして御免なさい。だけご本當に今朝あの方の姿を見た時には敵を見付けたのと同じ氣がしたんです。

恭助。あゝお村。嫉妬の爲に心を汚して了ふな。お前はもつと靜かな女だつた筈だ。

お村。今のあたしが靜かにして居れるでせうか。どうぞ約束して下さい。取り亂してゐるあたしを憐んで下さい。あなたの一言であたしの心は靜かになるんですから。

恭助。…………

お村。（嘆願を籠めて）あたしに そのねうちがあると思ふのでは厶いません。あたしはあなたの侍

女でも過ぎてゐます。だけど縁と思ぼし召して。

恭助。お村。亂れて理性を無くしてはいけない。わしを信じて呉れ。わしはどんなにお前を愛してゐるだらう。だが結婚は神聖だ。他の何ものの手段ともすることは出來ない。さう云ふ動機は結婚の動機にはならないのだ。

お村。だけど子供が有るんですから。どうぞ恭一郎の名に依つて――

恭助。（涙ぐみ、唇を顫はせながら）わしは苦しい。それを云はれるのは實に堪らない。わしは子供が可愛いくないのだらうか。無責任な人間なんだらうか。皆二口目にはそれを云ふのだ。わしは運命の落し穴に陥つたんだ。

お村。そんなひどい。あんまりです。あんまりです。いくら私が誘つたんだからと云つて。

恭助。さう云ふつもりぢやない。わしが悪かつたんだ。わしはそれを逃げやうとするのぢや決してない。だがいくらお前や子供が可愛くても、罪と感じても、それは結婚の動機にはならないのだ。結婚はその償ひをする道ぢやない。それは益々間違ひを重ねるのだ。その償ひは別

の仕方で――
お村。それをして下さいと云ふのではムいません。だけど恭一郎は何と云ふ不幸な子なんでせう。
恭助。（絞り出すやうに）それだ。わしは恭一郎に對しては實に申譯がない。だが涙を呑んでこの不幸は恭一郎に負はせるより仕方がない。あの子が大きくなつた時わしは[illegible]の子の前に跪いてお陀びする氣だ。わしの一生涯かゝつて償ひをする氣だ。
お村。償ひなどして欲しくはムいません。私が悲しいのですもの、あたしやもつと、もつと苦しんでもいゝ。どんなになつてもいゝ。たゞ三人が一つのものにさへなれたら。
恭助。三人は今だつて一つのものぢやないか。只結婚だけは――
お村。あゝあたし駄目です　どんなにしたつて　一番大事なものがあたしには欠けてゐるんだから。あたしがどんなにして闘つても、それがない限り、あの人に負けるのはきまつてゐるんだ。
恭助。よく聞いて呉れ。お村。お前達は競爭者でもなければ、敵でもないのだ。二人の内どちら

か勝つたものがわしを得られる譯ではないのだ。又二人の内から、一層優れた方を選んで、わしが取る譯でも無いのだ。わしは只眞理の命ずる所に從ふだけだ。だからどうするのが眞理かと云ふ事を今朝から一生懸命考へてゐるのだ。

お村。眞理は何んて冷たいものなのでせう。

恭助。（力をこめて）眞理は甘いものではない。それは實に冷い――ある場合には冷酷なほど。お前だけぢやない。わしも恭一郎も高子さんも負ふべきものは避けてはならない。それに堪え得る者許りが勇者なんだ。

お村。（苦しさうに）あゝ。どうしたんでせう。あたしはあなたがお拒みなさるのはあの方に未練がお有りになるせいだとしか思へないんです。

恭助。（目を瞑つて沈默。）

（書生右のドアより登場。恭助に名刺を差出す。）

書生。此の方が先生に御目にかゝりたいと仰いまして。

恭助。（名刺を見る。顔色が變る。數瞬間沈默。やがて抑制した聲で）暫くあちらにお待たせして置いて呉れ。

（書生退場。）

（間）

恭助。（吐き出すやうに）高子さんが來たのだ。

お村。（眞蒼になり、釘付けされたやうに突立つてゐる。）

（直子登場。）

直子。（二人の容子を見て）どうしたんだ。お前達は。

お村。奥樣。高子さんがいらつしたんです。あゝあたしどうしませう。

（直子の足元にくづれて泣く。）

直子。高子さんが來た？　恭助本當かい。

恭助。本當です。

直子。（恭助の傍にゆき）お前無論お斷りしたのだらうね。
恭助。あちらに待たせてあります。
直子。待たせて？　お前會ふ氣なのかい。
恭助。………
直子。（鋭く）どうしてお斷りしなかつたんです。お前考へて御覽。今になつて尋ねて來るなんて。そんなことが出來るものだらうか。
恭助。突作でわたしも躊躇つたんです。どうしていゝかと思つて。
直子。きつぱりと斷るがいゝよ。虫が良すぎるぢやないか。
恭助。（默つて考へてゐる。）
直子。あの人の爲にお前はどんなに苦しんだらう。お前許りではない。わたしだつて、お村さんだつて。やつとその後仕末がついて、幸福になりかけてゐる時に突然又遣つてきて、掻き亂して了はうとするんだ。

恭助。（考へ乍ら）ごう云ふ心算で來たものだか。

直子。ごう云ふ心算でも結果は同じです。今になつて來られる筈のものぢやなからうと思ふ。自分のした事がごれ程の事か考へて見たら。やつとお前の名譽が世間に認められて來た今になつて。

恭助。さう云ふ風に考へなくてもいゝでせう。

直子。償ひはしてくれなくても、せめてわたし達の平和を守つて吳れるだけの事はして吳れさうなものだ。

恭助。罪に責められてお詫に來たのかも知れません。

直子。本當にすまないと思ふなら、いくら來たくつても、私達の平和を破らない爲に、我慢するのが道だと思ふ。

恭助。然し、面會を拒絕すると云ふのはあまり大人氣ない氣がします。私としてはあまり自尊心がなさ過ぎるやうな――――何だか復讐をするやうで。

直子。復讐をしろこ迄は私は云はない。私達の受けた苦しみを思へばそれ位の事はしてやりたい氣もするけれご。だが少くこも拒むだけのことはしなくては。

恭助。（考へて）私は復讐するのだこ思はれるのが一等不愉快です。私の嘗めて來た苦しみにかけても。私の苦しみはもつこ深かつた。復讐すればすむやうな苦しみぢやなかつた。若しそれだつたらあれの名譽を社會的に殺す機會は絶えずあつたのだ。私はその復讐心に勝つ爲にごんなに鬪つたでせう。それを思ふ丈け、彼女に復讐をするのだこ思はれるのは堪らない苦痛です。

直子。だつてお前。男こして一度蹴つた女を。

恭助。お母さん。私はもう彼女を憎んではゐません。さうするのには私はあんまり大きくなりました。强くなりました。（涙ぐんで）十年前に須磨の海岸で私はその憎惡を克服したんです。

直子。でも私は憎まないではゐられないのだ。お前がさうなつてゐればなほさらお前に代つて憎みたくなるんだ。だつて若しあれ丈の罪が憎みを受けないですむとしたら——

恭助。お母さん。裁く者は別にあるんです。

直子。うむ。（間）お前の立派な氣持は私にだつて分らない事はありません。だが會ふのだけは止してお吳れ。お前が復讐する氣でさへなければ疚しい事はないぢやないか。

恭助。だがあまり私こしては小さ過ぎます。是迄とつてきた公明正大な態度に對しても。私はあいれとの事件丈けは本當に神の前にも恥ぢない態度をとつてきました。一番高い態度を。だから今になつてさうする事は自尊心が傷くのです。

直子。私が心配するのは會つた後です。お前きつこ結果がよくないよ。きつと風波が起るのだから。今の私達の靜かな幸福を思つて御覽。それを亂すここは本當に賢くない事ですよ。

恭助。然し、あんまり自信がなさ過ぎる。

直子。（鋭く）お前本當に自信がおありかい。

恭助。（沈默。）

直子。お止しよ。恭助。惡い事は云はないから。恭一郎やお村さんを可哀さうだこ思つたら。

恭助。（うなされるやうに）それとは別です。

直子。お前高子さんに未練があるのぢやあるまいね。お前がそんなに御云ひだと――

お村。あゝ。あたしもう――とても……御免遊ばせ。

（お村泣き乍ら急ぎ退場。）

恭助。お村。

直子。（氣づかはしさうに、お村を見送り乍ら）恭助。本當にお止しよ。會ふと心がぐらついてはいけないから。人間はそんなに强いものぢやありませんよ。いゝかい。きつぱりと斷はつておしまひ。

恭助。（昂奮して涙ぐみ）私の事は私に任せて下さい。

直子。押しつけるのではないよ。お前の爲にお願ひするのだよ。彼女（あれ）のことも考へておやりよ。可哀さうに。一寸行つて見てやるから。よく考へてお呉れよ。（直子心配さうに退場。）

恭助。（少時突立つたまゝでゐる。軈て部屋をあちこち歩き、椅子に腰をかけ考へる。少時沈默。軈て決心し

たやうに身を起しベルを押す。)

(書生登場。)

恭助。お客様をお通し申して呉れ。

(書生退場。)

恭助。(心を整へるやうに身繕ひし、確かりと足を踏みしめるやうにする。)

(間)

(高子登場、入口に立ち竦み、恭助をじつと凝視す。)

恭助。(立上る。)

(間)

高子。(突然恭助の傍に突進し、跪き) 恭助様。(すゝり泣く。)

恭助。(一歩後ろにしりぞき、凝つと高子の肩のあたりをみつめる。)

高子。ゆるして……ゆるして下さい。

恭助。（眼を閉ぢる。）

（間）

高子。厚かましいとお思ひでムいませう。でもあたし上らないではゐられなかつたんです。

恭助。（何か云ひかけて唇がひきつる。）

高子。どんなに憎んでいらつしやるでせう。

恭助。（抑へた聲で）私は憎んではゐません。

高子。いゝえ。憎んで下さい。責めて下さい。どんな罰にもあたつてゐます。

恭助。……………

高子。どんなはづかしめの御言葉も覺悟してきたんです。

恭助。（絞り出すやうに）私は憎むにはあまりに深く苦しみました。

高子。（打たれたやうに沈默。）

恭助。今になつてまだ貴方を憎んでゐる位なら、私は今日まで生きて來ることは出來なかつたで

せう。

高子。あゝ。恭助さま。

恭助。（激越して）私が生きてることが出來るためには殆んど生命の回轉的努力が要りました。その努力の前に憎みがなんでせう。

高子。ゆるして下さい。私が悪うございました。あなたに深い、深い傷を——あゝ私どうしたらいゝのでせう。あなたの前に身を投げ出します。どうでもして下さい。どんなにでも——あなたのお心のゆくやうに……

恭助。……

高子。私はおめ〳〵お目にかゝる氣はなかつたんです。たゞ他所ながら御樣子が知りたくて。（泣く。間）今朝お家のまはりをぐる〳〵してゐるのをあなたに見られてから、もう堪らなくなつたんです。一度お目にかゝつておわびをしなくては、一生に一度だけ……私は自分を抑へる事が出來なかつたんです。

恭助。お立ち下さい。（椅子に腰をかける。抑制した聲で）心を靜かにして下さい。

高子。（猶跪いたまゝ泣きながら）私は辯解は致しません。私が弱かつたんです。惡かつたんです。取り返しのつかないことをしてしまつたんです。

恭助。どうぞ立つて……私はもう責めはしません。

高子。（身を起し、涙を一杯ためて）どうぞおゆるし遊ばして。

恭助。（靜かに）ゆるしてゐます。……お掛けなさい。

高子。（腰をかける。）

（稍長き間）

高子。一度躓いたことがこんなに永い間の後悔になるとは……こんなに近づきにく……私は夏中ホテルにゐました。

恭助。（考へ乍ら）さうでしたか。

高子。（訴へるやうに。）あなたが明石にいらつしやると云ふ事を知つて、たまらなくなつて參りま

した。夏の初めに……瀬戸内海の濱邊で暑さを避けて暮したいと父に云つて……

恭助。（何か云ひかけて止める。）

高子。（懐かしさうに）恭助さま、あれから十年になります。小石川の植物園でお別れしてから

恭助。さうです。十年經ちました。——

（間）

高子。（恭助の顔をじつと見ながら）お體は如何でいらつしやいますの。

恭助。此頃は可成り元氣になりました。

高子。お大事に遊ばして……（口ごもりながら）貴方が御病氣におなんなすつたのは、私のせいです。（涙ぐむ。）本當に私は……

恭助。いや。さうは思はないで下さい。私が無理をしたのですから。

高子。貴方の事をどんなに御案じ申したでせう。色々の噂も聞きました。お書きになつたものは皆讀んでゐます。實は大變お悪いと云ふ噂を聞いて、心配してこちらに來たのでございます

けれど、別におよろしさうな御様子を他所目にお見受けして、少しは安心してゐました。

恭助。他所目に？

高子。(顔を赤くして)私は氣づかれないやうにしてゐましたの。幾度も貴方を視たんですけれど。

恭助。(硬く)さうでしたか。

高子。(顔、急に泣き作つて)恭助様。どうぞ心を閉さないで下さいまし。後生ですから。私はもう今夜此地(ここ)を發(た)つんですから。

恭助。(思はず高子の顔を視る。涙ぐみ)何を言つてい丶か解らないのです。

高子。父が迎ひに參つてゐます。私どうしようかと迷つてばかしゐて、とう〳〵今晩になつてしまつたんです。九時の汽車で發(た)つことになつてゐるんです。私[illegible]へもゐれなくなつて決心して上つたんです。

恭助。(淋しさうに。)北海道へですか。

高子。はい。

恭助。あなたは今どうしていらつしやるんですか。

高子。（涙ぐみ）不仕合せに暮してゐます。

恭助。私はあれから貴女の事を探つてゐました。然し貴方の家の方でそれを厭がつて、出來るだけ秘密にしやうとしていらつしやることが解つたので、斷然それを止しました。其後も何時も氣にかゝつてゐましたが、貴方からちつともお便りがないから、幸福に暮していらつしやるのだらうと、思つてゐました。若し私の事で耐へられなかつたら、お便りがあるだらうと思つたので。

高子。あゝ。そんなことで便りをしないのだと思つていらつしたんですか。私は幸福ではございませんでした。私どんなに手紙が出したかつたでせう。だけどあんまり厚かましい氣がして、氣がひけたんです。それに貴方の御家庭の平和を亂してはならないと思つて。貴方の御本にさう云ふ事が書いてあるんですもの。私を引き止めたものはそれでした。

恭助。（涙ぐみ乍ら）貴方は結婚なさつたと聞きましたが。

高子。両親に無理に勧められて或人と結婚しました。然し今は獨りでゐます。

恭助。どうして？

高子。離婚になりました。私が悪かつたんです。馬鹿だつたんです。うまくゆく筈がありませんでした。それからは何からも責められてゐました。虚僞の生活に堪へられなくなりました。そしてとう／＼決心して歸りました。子供を殘して、――

恭助。子供を？

高子。三つになる子供を殘して。あゝ私どんなに苦しんだでせう。だけどやつぱり自分を僞はつて生きてはゐられませんでした。私の罰です。自分を守る事の出來なかつた罰です。だけど何も知らない子供が可哀想で、可哀想で。（泣く。）

恭助。私はさう云ふことは少しも知りませんでした。

高子。でもそれは皆自分で招いたんです。どうぞ貴方に訴へに來たのだと思はないで下さいまし。私は譬へさうなつても、自分の思ひ出を守つて、それを心に描くことを誰にも心苦しく只だに

ないですか今の境遇をむしろ喜んでゐるのですから。あたしは憐れみを求めに來たんではございません。只お詫びがしたくて――

恭助。それはもう氣にしないで。私はゆるしてゐます。心から。傷ついたのは私だけではありません。貴方も不幸になつたんです。今となつては氣の毒に思ふ許りです。それに貴女は私の思想を産んで呉れた恩人です。私にとつては第二の母です。私が此處まで成長して來ることの出來たのはあなたのお蔭です。

高子。そんなに仰られると苦しくなつてしまひますわ。私は只あなたを傷つけたばかりです。あなたが起き上り遊ばす迄に、どんなにお苦しかつたか、あたしよく解つてゐるんです。

恭助。（追想するやうに）貴女は私に本當の青春を味はせて呉れました。實に短い間ではあつたが。それは私にとつては何ものにも代へ難い程貴重なものです。

高子。（急に啜り泣き乍ら）あゝ本當の青春でした。恭助様あたしは只それ丈けで自分は不幸者ではないと思つてゐます。誰があたしのやうな幸福な青春を　高い、充實した青春を味ふ事が

出來たでせう。それはあたしの一生涯の寂しさを償ふて餘りあると思ひます。その幸福を自分で守る事の出來なかつたあたしは何と云ふ馬鹿でございませう。あたしの一生の過ちでした。それを思ふとあたしは………

恭助。其處に人生の深さがあるのでせう。運命が。誰でも避けることの出來ない過失があるのです。しかも生涯の運命の別れる一番大事な時に――――私は本當にあなたを責める氣はありません。

高子。（靜かに泣く。）

（間）

恭助。これからどうして暮していらつしやるお心算ですか。

高子。（恭助の足元に泣きくづれて）思ひ出で………唯思ひ出で生きてゆきますわ。

恭助。（目を閉ぢて沈默）

（間。廊下をバタ〳〵子供の走る足音と、子供の何か叫ぶ聲きこゆ。）

高子。（身を起し、再び腰をかける。）

お村。（舞臺の後ろにて）恭ちやん。いけませんよ。今いけませんよ。

（間）

高子。（口籠り乍ら）あたしお子様とおなじみになつてしまひましたの。海べの廣つぱで。何てかあいゝお子様でせう。お子様をお抱きしてゐたら淋しいやうな不思議なやうな何とも云へない氣がしました。……あなたによくお似遊ばして……奥様にも……奥様も度々お見受け申しました。

恭助。（少し氣まり惡るさうに）妻ではありません。……ずつと一緒に暮してゐるんです。

高子。（不思議さうに）お子さんは？

恭助。長男です。私達は主從のやうにして暮して來ました。……師弟のやうに……私が過つたんです。

高子。いつもお傍にお仕へしていらつしやるんでございますね。

紫助。さうです、あなたと別れてから二年後、ある海岸の病院に入院してる時に知り合ひになつてからずつとです。

高子。噂々お噂を聞いたことはございました。どんなにいゝ方なのでございませう。

紫助。實に優しくて立派です。私はどんなにあれの爲に慰められて來たか知れません。

高子。[illegible]ではないのでございますか。

紫助。一生[illegible]にしない心算です。

高子。（急に暗い顏をして考へこむ。）

（間）

高子。（決心したやうに顏を上げ、涙ぐみ）あたしもうおいとま致します。

紫助。（少し慌てゝ）どうして？

高子。[illegible]方がいゝと思ひます。（立ち上る。）

紫助。まあ待ちなさい。高子さん。（急に情熱を示して）あなたの名を何年振りに呼んだでせう。も少

しゐて下さい。

高子　それでもいゝんでございますか。（吸ひ寄せられるやうに腰をおろす。）

（間）

恭助。（心の内に聞きながら）あれからあなたが私を忘れて下さらなかつたのは、只心が責められるからだけだつたんですか。

高子　（考へたやうに、真顔を見せて。）さうではございません。（間）ずつと思ひ上げて來ました。お別れしてからどんなにあなたを思つてゐるかゞ、はつきり解つたんです。家の内がうまくゆかない度毎に、どんなにあなたに愛されてゐたかゞ思はれて、ひとりで泣きました。………でも皆もう遲かつたんです。

恭助　（間へ切れなくなつたやうに）まだ駄目ではありません。

高子　（苦しみて沈默。）

恭助　又新しく話しませう（堤を切つたやうに）私にずつと忘れませんでした。この十年の間一

日も貴女を離れては生きませんでした。

高子。あゝ恭助樣。

恭助。この前ホテルの庭であなたによく似た姿を見てから、私の心はまるで落着きをなくしてゐました。あなたの姿を探し求めてゐました。今朝はつきりあなたと分つた時、どんなに驚いたでせう。私は混亂してしまひました、でもどんなに幸福だつたでせう。

高子。私は貴方に見られることを恐れてゐました。だけどやつぱり心の内ではそれを願つてゐたのです。貴方に見つけられると私はすぐ逃げて行きました。でも私の顔をまともにじつと御覽になつたお目が、心に烙き附けられて、私は上らないではゐられなかつたんです。

恭助。今朝から私は惑亂してゐました、貴女を[illegible]求めてゐました。あのまゝお目に懸れなかつたら、………私は嵐の中を海邊をうろつきました。貴女を探して――

高子。出發の荷造りをしてしまつた瞬間に、私は上る氣になつてしまつたんです。長い間の決心をこはして――

恭助。（熱に浮かされたやうに。）高子さん。私達は昔に歸りませう。

高子。……

恭助。（夢見るやうに。）二度目の春を作りませう。

高子。恭助さま。

（恭一郎駈け込んで來る。）

恭一郎。小母ちやん。小母ちやん。

（お村あわてゝ恭一郎を止めながら登場。）

お村。恭ちやん。恭ちやん。お邪魔するのではありませんよ。（二人の容子を見て。）ご免遊ばせ。

（お村あはてゝ恭一郎をつれて退場。）

（長き間。）

高子。（青ざめて。）私やつぱりおいとま致します。

恭助。お待ちなさい。高子さん。

高子。私は氣を弱くしてはいけません。決心を鈍してはなりません。（立ち上る。）

恭助（思はず傍に寄る。）私と一緒に暮して下さい。三人一緒に暮しませう。お村にはそれを得心させます。私達のことはよく解つてゐてくれるのですから。

高子（一歩後にしりぞき）恭助さま。今は大事な時です。私は自分の立場を忘れかけてゐました。過ちを繰り返してはなりません。

恭助。高子さん！

高子。（強く）いゝえ。今こそ償ひの時です。私は貴方がたの幸福を守つてあげねばなりません。貴方がたの平和を破つてはなりません。（泣きながら）それは貴方を傷つけた私の、せめてしなければならない務めです。

恭助。三人が兄妹のやうに暮したら――

高子。恭助さま、思慮を忘れますまい。運命を畏れませう。三人が一緒に暮すことは出來ることではありません。ごうなるか知れ切つてゐます。二人の内一人はごうでも離れなくては。

恭助。でも一度かうしてお目に懸つた上は！　私が結婚しなかつたのは、貴女の思ひ出のためだつたんです。私はもう一生お目に懸れないものと思つてゐました。だが運命が――

高子。（決心を示して強く。）いゝえ二人の間には運命の淵が出來てしまつたんです。

恭助。（何ものかに打たれたる如くぐつたりと椅子にかけ、青ざめて沈默す。）

（間）

高子。私はやはり來るべきではなかつたんです。是まで永い間決心して來た通りを守るべきだつたんです。私がお便りもしなかつたのはその爲でしたのに、そのために永い、永い間忍耐して來たのでしたのに。一番大事な時に又過ちかけてゐました。だけども迷ひません。私のすべきことは解りました。貴方にはやさしい、忠實な方が傍に附いていらつしやいます。私は安心してゐられます。私は遠くに離れてゐて皆さまの御幸福を祈ります。

（長き間。舞臺の後ろにて子供の泣く聲かすかに聞ゆ。）

恭助。（悲哀に立ちたる石の如く身をかゞめて。）高子さん思ひ出として、永久に思ひ出さして生きませう。

私は貴女と別れ、一つの精神的回轉によつて自分を支へて後、もうずつと長く戀といふものを私の精神生活から捨離しゝて來ました。戀よりももつと高い形の愛を建てゝ、理想として來ましたが、さういふ愛であなたを愛してゐました。それは私の精神生活にとつては實に重要なものでした。それだのに貴女に逢つてから………私はまだまだ駄目です。もつと強いつもりでしたが。

高子。………

恭助（半ば泣き乍ら）私は自分の薄弱なことを今こそ知りました。十年の間私が築いて來てゐた精神生活を一朝にして壞すところでした。今日のことを私は想像しなかつたのではいません。ちやんと考へてゐました。それを考へて置かなくては、私の生活を支へてゐることは出來ませんでした。けれども貴女を一目視てから、私の心はぐらついてしまひました。何いふ無力でせう。貴女の決心は立派です。

高子。恭助さま（涙ぐみ。）此の立派な考へは貴方の御本敎からはたつんです。

恭助。さうです。私は自分が立てた理想を實行せねばなりません。貴女は私の思想の象徴のやうに、私の前に立つてゐます。貴女はよく私の理性を呼びもどして下さいました。

高子。(泣き乍ら)私の決心は私の愛のしるしでございます。さゝげた心の……

恭助。高子さん。感謝します。心から。學者としての良心にかけて、私は此の理想を守りませう。

(間)

高子。なんて淋しい人生でせう。私を勵まして下さい。此後の生き方を敎へて下さい。其の敎へを守ることを、貴方にお仕へすることだと思つて生きますから。

恭助。(考へて)私達は思ひ出で生きませう。それは何ものよりも美しいのです。現實の何ものによつても汚されないのです。それを私達の神聖の宮として心の内に祀りませう。私は此頃斷念の意識について考へてゐます。超絶的斷念によつて此の世に屬いた幸福を棄てませう。二人の愛を聖い、聖いものに高めませう。総ての感性的なものから離れた、天に屬いた愛、—

――それはもう嫉妬の對象にはならないものです。さう云ふ愛で愛しあひませう。

高子。あゝ。私は神様におつかへするのと同じ心で。

恭助。(涙ぐみ)神様にめされた時、私達はもつと自由に交ることが出來るでせう。此の世では此の地に屬した約束があるのです。其の約束を忍受するものは勇者です。神は謙遜なるものです。

高子。私は淋しく此の世を送ります。そしてあの世を待ちませう。だけど恭助さま(泣きながら)あの世では、あの世ではきつと貴方の妻でございますよ。

恭助。あの世では神が偶はせ給ふものが偶ふでせう。あの燈台を御覧なさい。私には今あの光があの世のもののやうに見えるのです (間) 淋しく、強く生きませう、私達の心を清め切つたら、此世をも、此世でない光りで視ることが出來るでせう。

高子。私は淋しく強く生きて、出來るかぎり自分を清めてゆきませう。(灰の如く青ざめて) もう一生お目に懸りません。貴方の御書物を讀むことを、お目に懸るのだと思ひます。

恭助。私は一生の私の著作を貴方に捧げる氣で書きませう。

（間。汽笛の音聞ゆ。）

高子。（机の上の時計を見て）もうおいとま致します。時間がございませんから。

恭助。（寂しさうに）さうですか。

高子。（立ち上る）父が待つてゐますから。

恭助。旭川へですね。

高子。はい。父の農場に參ります。そこで靜かに暮さうと思ひます。

恭助。もう止めますまい。

高子。恭助さま。どうぞ何よりもお身體を御大切に遊ばして。

恭助。あなたも。高子さん。

（間）

高子。あたしは強く、強く生きます。あなたが生きていらつしやる限りは。

恭助。さうです。氣を強くして。この地の上の何處かに私が生きてゐるのだと思つて。

高子　（茶を一杯溜めて）あたしもう何も云へません。どうぞお大事に。

恭助。（涙ぐみ、うなづく。）

高子　（扉の傍まで行き、振り返る。蒼ざめて氷のやうな眼付きをして、凝つと恭助の顔を見る。）

（間）

高子決心したやうに退場。）

恭助　（數秒間そのまゝ立つてゐる。軈てよろめく如く扉の傍まで歩いて行く。把手に手をかけたまゝ立ち止る。軈て絶望したやうに窓の傍の椅子に腰掛け、倒れるやうに身を埋める、數秒間沈默して、やがて啜り泣く。

「其の聲は微かであるが、觀客に聞ゆる必要あり。」）

（間）

（お村急ぎ登場。恭助の傍に走せ寄る。）

恭助。（泣き止む。）

お村。許して下さい、あたしが惡うございました。さつき云つたことを許して下さい。出過ぎた

ことを申しました。自分のことばかし考へて。どうぞ高子さんと一緒にお暮し遊ばして。—
——
恭助。高子さんは歸つた。
お村。どうぞ一緒に暮して下さい。あたしが出て行きますから。それが本當なんですから。あゝあたし自分の立場を忘れてしまつて、どうしてあんなことを云つたのでせう。本當に恥かしい。（泣き乍ら）どんなにか身の程知らずだとお思ひになつたでせう。
恭助。いや、お前はわしの傍にゐてくれ。
お村。いゝえ。あたしが出て行くのが本當です。高子さんと暮して下さい。あたしはいつもさう思つてゐたんです。高子さんがいらつしやるまであなたをおあづかりしてゐるのだと　若しあの方がいらしたら、いつでもあたしはあの方にあなたをお返しして、いさぎよく出て行かうと思つてゐたんです　それだのにいざとなつてから。本當にあたしが惡うございました。八年の間お傍にゐられた丈でどんなに幸福だつたでせう。それだけでもあたしに過ぎてゐま

すのに。

恭助　高子さんはもう二度と來ないのだ。

お村。そんなことがあるものですか　そんなことをおさせしていゝもんですか　恭助さま。どうぞ許して下さいまし　あの方と一緒に暮して下さいまし。あたしが許されないことを夢見てゐたんです。あたしへの義理など立てゝ――。

恭助。いや　無理ではない。私達は自ら選んで決めたのだ。

お村。だつてそんなことをおさせしてあたしが凝としてゐられるものですか　あたしは喜んで出て行きます。あたしにや恭さんがあります　あなたの一人子が　あなたのお跡嗣をお育てすることで、あたしは幸福に生きて行けます。

恭助。私達はもう固く決心したのだ。

お村。いゝえ　そんなことを仰らないで　後生ですから。あたし行つてあの方をお伴れ申します。

恭助。（强く）お村。私達は運命の意志に從つたのだ。一番愼み深い、思慮のある道を選んだのだ。一番高い生活を建てたのだ。お前も私達の決心を祝してくれ、

お村。（泣き作ら）だつて、あたしばかり幸福で――あたしとしては

恭助。いや、お前も運命の意志に從ふがいゝ。

お村。あゝ。あたし。

（直子恭一郎をつれて登場。）

直子。私は安心しました。恭助や。（涙ぐみ）あたしやお前の心は解つてゐる。本當に有難く思ひますよ。

お村。（恭一郎を抱く。）

恭助。私達は一つだ。

（汽笛の音聞ゆ。）

恭一郎。（母の手を離れ、窓の傍にゆく。）

お村。あゝ。あたし。これでいゝのか知ら。

恭助。これでいゝのだ。………（しんみりして）人生は深い――

直子。私達は又靜かに暮して行くのだ。

（間）

恭一郎。（窓の傍にて）汽車が。汽車が。

（汽車の轟く音聞ゆ。數秒間沈默。）

――幕。

一九二一・八・八　作

書後

本書に載せたる二つの作品の内「布施太子の入山」は讀む戲曲（Lesedrama）として書いたものであつて、實演を意圖せざるものである。從つて作者の意圖した戲曲的幻影の現像は讀むことに依つて、完成することを期したものである。故にその儘にて實演に適せざるものである。これに反して「水邊」は舞台に於ける戲曲（Bühnendrama）として書いたものであつて、作者の意圖した戲曲的幻影の現像は實演することに依つて、始めて完成することを期したるものである。從つて讀みたるのみにては藝術的に不完全なるもの、否嚴密なる意味にては藝術品と稱し得ざるものである。自分の意見ではレーゼドラマとビューネンドラマとは藝術的所緣を異にせるものである。故に自分はこの二つの異れる藝術的所緣より生ずる、異りたる條件に適合するやう、夫々異りたる態度を以て、この二種の戲曲を書き分ける心算である。

従つて自分の意見ではレーゼドラマのみが文藝として藝術品であつてビューネンドラマは演劇の筋書であり、譬へば建築の下圖の如く嚴密なる意味にては藝術品と稱し得ざるものである。自分のこの戯曲に就いての意見は今一層自分の思想を精練したる後、他日詳しく書きたいと思つてゐる。

一九二一・九・一〇

大正十年十月三十日印刷
大正十年十一月五日發行
大正十年十一月十日再版

（定價金貳圓）

布施太子之入山

著作者　倉田百三
東京府下北豐島郡長崎村高松一六二

發行兼印刷者　長島豐太郎
東京府下北豐島郡長崎村高松一六二

印刷所　曠野社印刷所

發行所　東京府下北豐島郡長崎村高松一六二
新しき村出版部
曠野社
（振替東京五二五四七）

布施
倉田百三著
以入

太
子
大正拾年九月河野通勢装幀